明治三十二年十月五日發兌

女鑑

第百九拾號

東京國光社



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑第百九拾號 目録

鷹見爽鳩の妻



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑　第百九十號

貴賤

士農工商とて、むかしは、士を尊び農を次ぎとし、工次ぎ、商次ぐ。さるは、いにしへは、心を勞するのみ貴とし、力を勞するを賤しとせしかば、自然と役人を貴びて、實業をいやしみ、座食を好みて、勞働を厭ふの風となりきと。然る、もと故あり。士や、多少の學あり、敎あり。故に智あり、能あり。物の理をさとり、義をわきまへ、仁を知り、廉耻を知り、國のため、君のためには、水つくかばね、くさむすかばね、身命をも惜しまず、赤心をつくす。忠孝仁義の道を知り、之を行ふ。人間の第一とする、うべならずや。農は、大方、學に乏し、故に、心は善良なれども、心くらく、善惡をわきまふる事能はず。見識もなし。善しと思ひて、よからぬ道にふみ入り、わろしと知らで、わろき事をなすさへにあり。工は、手をのみみがきて、心を

みがかんとはせず、一字、一點をもわきまへず、世の理にくらきもの、亦、少からず。商人は利にのみに走り、欲にのみ目くらみて、物の理を後にする多し。人として、人の理を後にし、世にありて、世の理にそむく。これ人間中、尤もはづべき事なり。されば最下等の者とす。誠にうべならずや。人皆、かくと云ふにはあらねど、商人根性、職人根性、下司根性など云はるゝまでの者あるに於てをや。

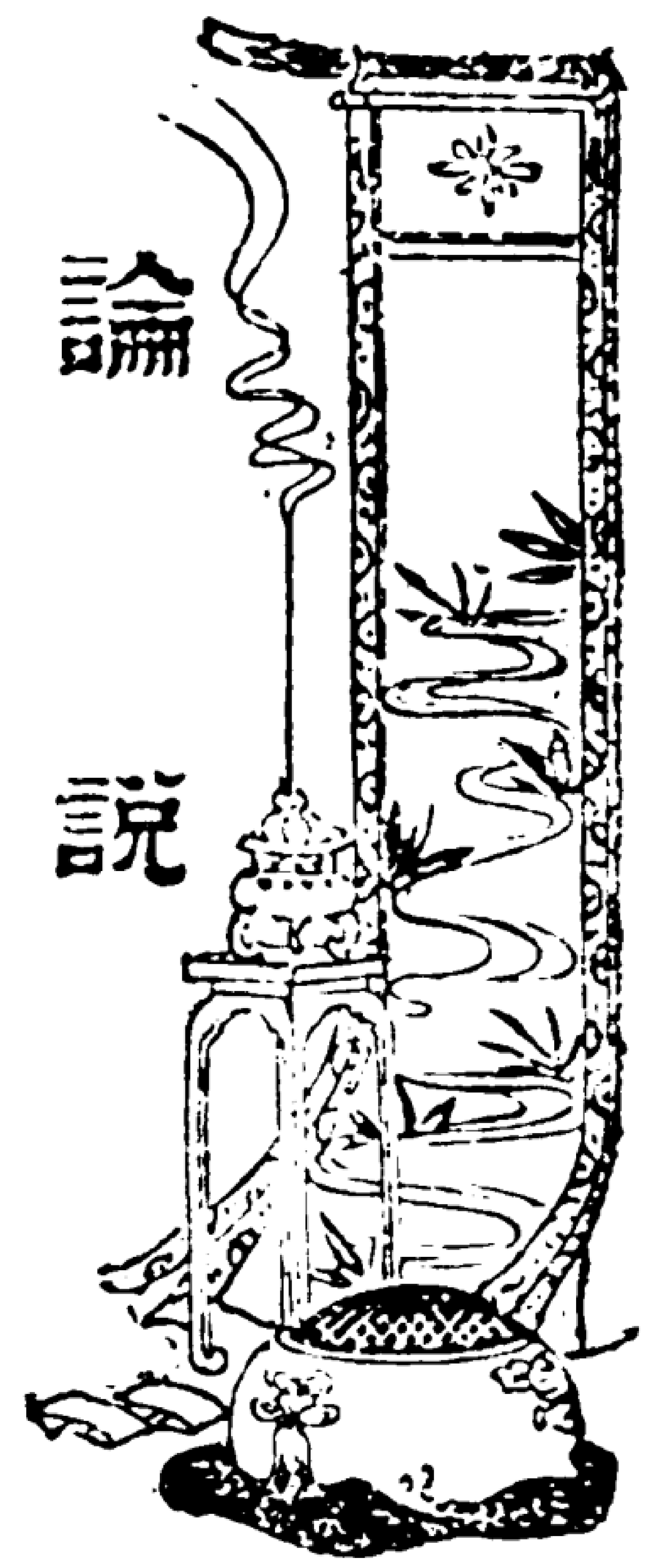
敷島の大和心を人間はゞ朝日に匂ふ山櫻花、花の中の櫻、人の中の士、士はたゞ、その心のいさぎよく、學識あり、見識あり、國のために、君のために身をしまず、心信に、人に接して、いつはらず、何事も、心の玉を寶としみがけばこそ、士は貴きなれ。心いさぎよからずば、士とて何の貴ことかあらん、農とて、工とて、商とて、學あり、智あり、道をふみ、理をなさば、何のいやしき事かあらん。殊に、世もあひみ、互ひ身と云ひて、士あり、農あり、工あり、商あり、漁人あり、さまざまの職、さまぐの業ありてこそよけれ。學者のみ、役人のみにても、世の中もてず。農あり、田を作り、漁人ありて、魚をとり、工ありて、家を建て、器をつ

くり。商人ありて、萬つの物を貿易し、役人ありて、世を治め、學者ありて、教をしき、軍人ありて、四海を守る。互ひに守り、守られ、食し食され、着、着せられ、住み、住ませらる。皆必要なり。皆公なり。職に何の上下あらん。業に何の貴賤あらん。事皆公事なり。故に商人は、利を貪らず、適當の賃金をとる。何ぞ賤しからん。職人、手と心と共にみがき立てゝ、物を巧みにす。何ぞ賤しからん。百姓も、海士もみなしかり。されど、學なく、道をしらず、たゞ黄金をのみ寶とし、しろがねをのみ得まくほりし、血脈あひ分れ、親子あひ食み、兄弟相爭ひ、互ひに利にのみ走る。何ぞ賤しからずや。

古への士は道を尊び、廉耻を寶とす。故に貴し。今の士や、往々黄金を尊び、金錢を寶とす。學者學をしき、役人、人を治め、軍人、四海を守りながら、たゞ利の欲のみ深くして、世を治めながら、世を治めず。天下を守りながら、人民を守らず。學をしき、人を導きながら、己れ理と道とに反す。かゝるを何ぞ尊とせん。人の尊ぶものも職にあらず、業にあらず、位にあらず、たゞ一の心のたまなり。たとへ高臺

高閣を築き、錦衣玉床に身をつゝむとも、心きよからず、うつくしからずは、いたづらに瓦を錦に包みたるのみなり。たとへ、土中に埋まるとも、其の身に光澤あらば、又、貴からずや。富貴は人のうらやむ所、殊に女子、高臺を愛し、衣服を好み、容貌をのみ盛んに志す。以て貴しとし、美しとす。之、甚だあやまれるなり。歴々たる天上の白楡、其の枝は高く、天にそびえ、その葉は美くしく、日にかゞやくとも、要にてきせずば。又、何ぞ高しとせん。たゞ高きに居るのみ、沈々たる海底の珊瑚、根は深く、千ひろの底に埋み、枝はかなしく、白浪の下にひたるとも、誠にうつしき質ならんには、又、何ぞ低しとせん。あはれ孃たち、貴賤は、貧富を以てせず、寳玉、黄金しろがねを以てせずして、たゞ心の玉を以てし玉へや、以て、うつくしく、以て、貴くみがき玉へや。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



日本女子今後の覺悟（六）

三輪田眞佐子

見よ、鶴は、喬木に、巣をくみ、鴨は水邊に、身を寄するを。そは、各、その天分に適へばなり。人、亦、かくのごとく、その天命に從ひて、人分を知り、更らに、低を望まず、わざと、高を願はず、獨り、我に相應なる配偶を撰び、夫は、夫たり、妻は、妻たり。以て春秋の花紅葉も、團欒せざれば、敢て樂まず。世路の難も、共に受け、共に忍びて、露ばかりも、敢て、憂と思はず、眞に階老の契を結ぶこそ、結婚の本願なれ。彼の結婚して、あだなる榮輝に耽らんとする如きは、君子の惡むところぞかし。

古人は、婚を議するに當り、財の多寡を言ふものを排斥しけり。さるに、今人は、富貴の家の孃を娶り、持參金の多からんことを望む男子もあり。亦、富豪の家に嫁ぎ、美服を纒ひ、珍味に飽き、知人、及び、友人に誇らんと祈る女子もありとかや。果して、然らば、彼らの迎ふるものは、婦にあらずして財なり。亦、求むるものは、夫にあらずし

て產なり。果して然らば。夫婦の關係は、財產によりて維持せらるゝものと言はざるべからず。されど財產は、風前の燈のごときものとせば、かゝる社會の結婚は、一寸たりとも、未來の謀られざる恐しき關係と見る外ぞなき。たとひ、財寶は、一朝にして盡きざるとせんも、夫婦の因緣は、元來、夫と婦との人物如何、品質如何、あるは、懷抱する理想如何にあらずして、唯、財產のみが標準となりて、成立せしものなれば、その閨門和樂して、夫婦の實を擧ぐるに至るものは、獨り、偶然にして、多くは、夫婦相互に精神上の不平や絕えざるべし。あはれ、人生の不幸、これに勝るものあらじ。おのれ、近時の風潮を見て、歎息の聲なきこと能はざるなり。

勿論財產の上より言へば、富むものは、亦、富める家より、室を求め貧しきものは、貧しき家より、妻を迎ふるを適當と信じぬ。如何となれば、富の程度相異なれば、おのづから生活の程度も更なり、日時の交際社會も、同じからざるを以て、貧家の女は、豪家の主婦たる風采なきのみならず。その家風を守りて、任務を果すこと能はざるべし。これに反して、豪家の女は、貧家に入りて、家政を主るは、不利益の點多かるべし。故に人は適當なる緣を結ぶこそ良けれ。然るに、現今の風潮は、拜金俗の結果にや。この適當なる程度を慮らずして、銖兩たりとも、我より多き家財ある家と婚するを歡ぶものゝ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ごとし。

苟も、婚を議するには、夫婦たるもの相互の品性と理想とを正すを以て足れりとせんも、家政上の關係より、婦に持參金を與ふるは不可なし、但し持參金を附するとせば、世の風潮は、その額の大小を問ふに至り、遂に惡風を生ぜんを以て、持參金は、婦の所有財產として、婦の名義を以て、公債、若しくは、株劵となして、將來、若し、一家の不運に逢んとき、これを消費せんため、亦は、兒童の敎育に費さんため貯蓄すべし。決して、濫に消費する勿れ。

或人曰く、夫婦は、異身同体とも見るべきものなれば、婦たるものゝ、持參金を、その名義にせんか。おのづから婦は、誇慢に流れ、從順の女德を失ふに至ると。そは貧しき夫にして、富みたる婦を迎へ、婦の持參金を恃みて、生計を立つるための結婚ならんには、かゝる結果もあらん。されど、實際、多き持參金を有する婦を迎ふるほどのものは、これに相當する資產家ならんを以て、さるべき恐なかるべし。若し、亦、婦を娶るに當り、人物を標準として撰擇せんか、持參金を以て、從順の女德を失はざるべし。仮に、持參金あるため、誇慢の動作あるものならんには、既に好人物を撰擇せざりし證なり。などか、好人物とも言はるべきもの、財を恃みて德を傷はん。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

亦、嫁装のため、富家は、巨萬の財を散じ、貧家といへども、相當の費を要すべし。おのれは、世の女子たるものは、必要にして欠くべからざる嫁装に止まり、及ばん限りは、冗費を省き、その餘財を以て、持參金に充てんことを望む。然らざれば、身、一朝不幸に逢はんも、兒女を敎育する費なきのみならず、自の生活にだに窮する慘狀に陷ることもなしとせず。亦、財資に欠乏なき貴婦人といへども、持參金を利用して、世の慈善事業などに投せば、眞に、上流社會の体面を有つに至るべし。

復習の時間を與へよ

隨菴生

余輩不敏なりといへども、未だ、今日の女子敎育を以つて、完全なりとは信ぜざる也。然れども、學校卒業以後の成績の不良なるを以つて、單に學校敎育の不完全に歸せむとするものあるに至りては、其の觀察のあまりに皮想にして、責むることの極めて、又、酷なるに驚かざるを得ず。

勿論、彼等の多くは、猶いまだ、帝國臣民の母として、甚だ、不充分なるものなり。甚しきは、家政の整理に於いても、手藝の技能に於いても、或は讀書算術作文等のことに於いてさへも、全く學校敎育を受けたることなきところの或者に比較して、寧ろ數步を

譲らざるべからざるもの、其の數尠からず。是れ、一は學校教育の不整備なるにも因るものなるべけれど、多くは、家庭の教育が、遂に彼等をして、斯の不名譽にして、而かも、最も、不幸なる境遇に彷徨せしめたる也。世の女子について論談せむとする人は、請ふ少しく通學時代の彼等が、家庭に於ける實況を顧みよ。

身体の健康、及び、腦髓の聰明の度に於いて、我國の今日の女子は、男子に比して、頗る劣等の地にあり。言或は、甚だ、女子を侮辱するにちかきが如しいへども、事實極めて明白にして、何人も、異議を唱ふる能はざるを如何にせむ。大凡、人間の智識は限りあるものなり。決して、一人にして、萬事萬物、悉くを能くすべきにあらず。故に、人々、總べて、各自の目的に對ひては、心を專にして、多岐に趨らむことを恐れ、而して、其の學問は、唯、實際、人生の福祉に必要なるものゝみを學びて、毫末も、無用不急のものを混ふべからず。是を以つて、識者は學ぶべき時を教ふると共に、常に、其の學問の種類について、深く愼みて撰擇せざるべからざることを注意し、怠らざるなり。若し夫れ、其の學問の撰擇をあやまり、或は徒に多きをのみ貪らむか。即ち無學の人、無道の徒となりて、到底世間の厄介物となり終らむ而已。健康聰明、はるかに優等の地を占むる男子にして、猶、且つ、斯くの如し。況むや女子にありては、其の注意、一層愼重な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らざるべからざるなり。然るに、彼等の家庭に於ける實際を見よ。彼等の勉強は、多く、其の時を得たるものなるか。又、果して、撰擇宜しきを得たるものなるか、余輩は學問するに、最も、適當なる時代、即ち、高等小學校時代の彼等によつて、少しく、卑見を述べむ、

女子の學科、及び、一週間の配當時間（高等小學校に於ける）

明治三十一年三月訂正出版の東京市小學校長會編纂教授細目による

學期＼學科	修身	讀書	作文	習字	筆算	地理	歴史	理科	圖畫	唱歌	体操	裁縫	外國語
一學年一小期	二	五	二	三	四	三	○	二	二	一	二	三	三
仝　二小期	二	五	二	三	四	三	○	二	二	一	二	三	三
仝　三小期	二	五	二	三	四	一、半	一、半	二	二	一	二	三	三
二學年一小期	二	五	二	三	四	一、半	一、半	二	二	一	二	三	三

注意　（以下卒業に至るまで學科時間ともに第二學年一期と異るなきを以て之を略す）

修身と唱歌とは男生徒と全く異に女生に適節なるもののみを講説教授す

作文時間は同しかれど女生には消息文を多く男子には漢字交り文を多く作らしむ即ち一小期間に男生には漢字交り文十二題を消息文八題をつくらしめ女生には消息文十二題他を八題つくらしむ四學年を通して此の比例なり

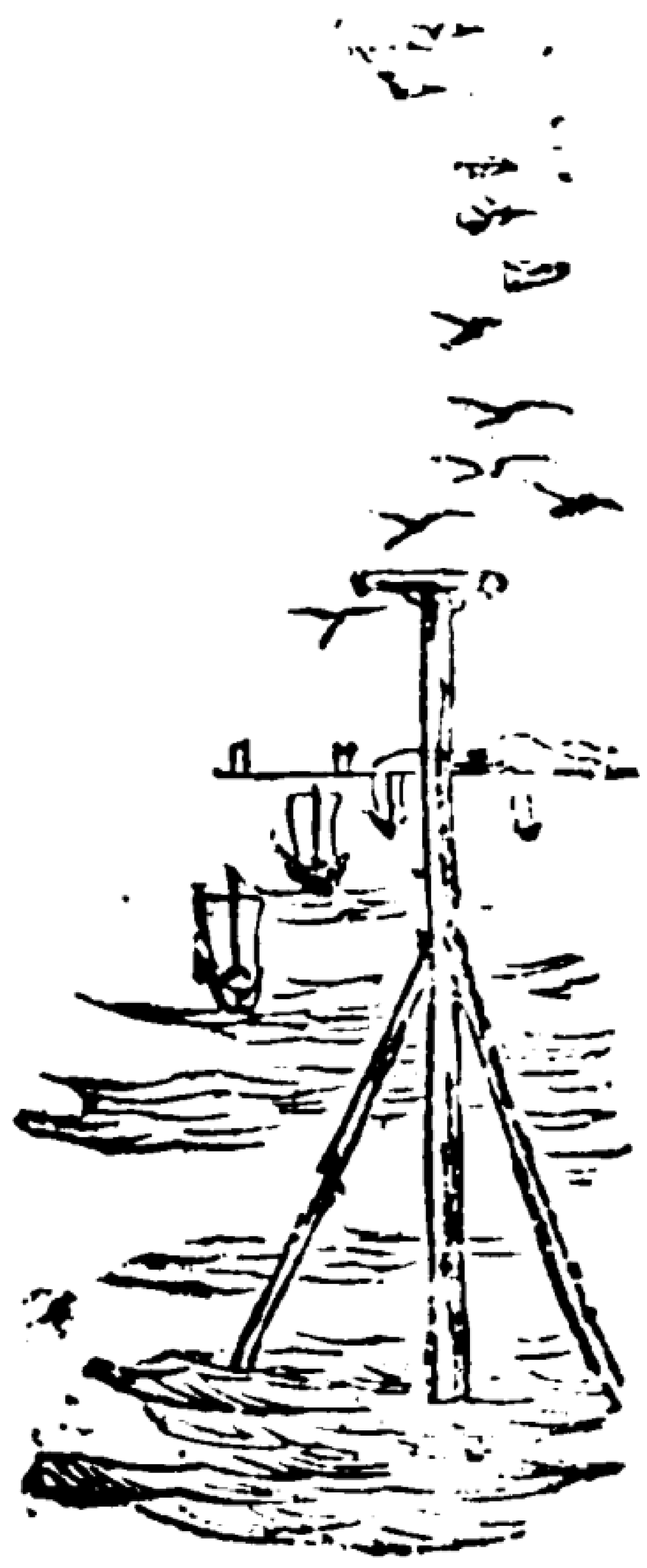
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

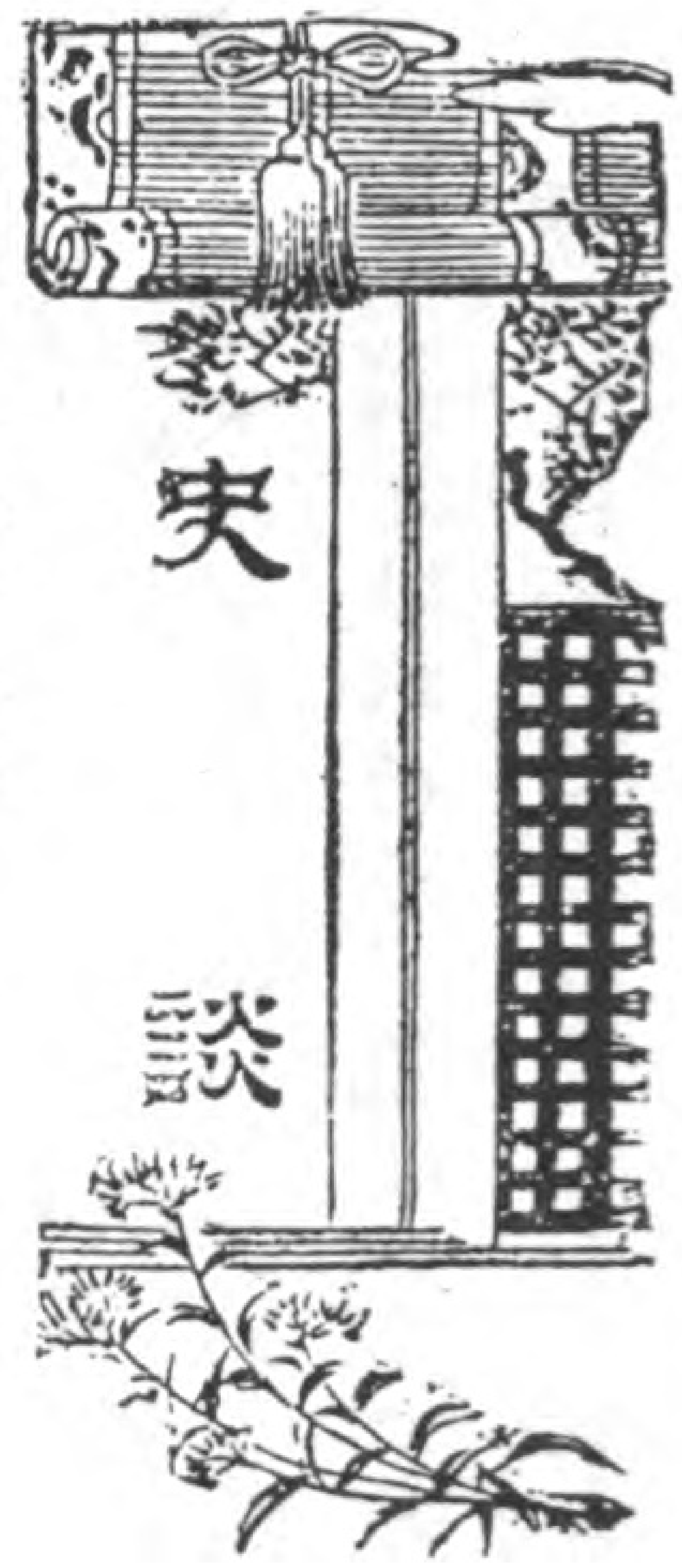
高等小學校に於ける女生の學科及、時間の配當、いつくも之と大差なかるべし。之を男生に比すれば、身体健康を發育保全せしむべき体操に於いて、一週に一時間を少くせし代り、裁縫の二時間を增し、差引一時間多き割合なり。學校に於いて課する學科、及び、時間は、既に彼等のためには、過重ならざるかの嫌なき能はざるにあらずや。而して、彼等は日々、是等の過重(カ)なる課業を終へたる後に於いて、猶、更に受けざるべからざる日課あり。琴三味線、或は茶湯生花等の中の一種、若しくは數種を必ず稽古せざるべからず。而して、其等の復習のためには、學校以外の時間を、悉く用ゐて、猶足らざるの觀あり。之に加へて學校にて授くる學科の復習を强ひむか。是れ、豈に、彼等の堪へ能ふところならむや。然はいへ、余輩は、絕對に學校以外の課業を排斥せむとするにはあらず其の時の宜しきをだに得ば茶湯生花の如き却つて。之を奬勵せむ。然れども、彼等の父母が、家庭に於いて、專ら是等の課目について勉强せしむる目的は、大に余輩と、其の見を異にするなり。實に彼等の多數は、琴なり、長唄なり、踊なりが、即ち愛女の幸福を大にすべき、唯一の學科なりと信ずるが如し。學校敎育の如きは、唯世間の例に外れざらむがためのみ。嗚呼斯くの如くして、猶、其の罪、學校敎育の不整備にありといふを得べきか。卒業後の成績良好ならざるもの、固より當然のことゝ云ふべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

余輩は、更に學問せしめむには、適當の時に於いてせざるべからず、而して、其の種類は、最も撰擇を愼まざるべからずといはむ。又更に、前に掲げし學科表を再閲せむことを望まむ。眞にわが子のために幸福を求めむとならば、先づ學校にて、授けられたる課目について、充分に復習せしめよ。其の餘暇に、復習を妨げざるかぎり、健康を害せざる程度に於いて、他の緊切なる課目を學習せしめよ。或は其の目的を達するを得む。又、或は、よつて以つて、世に多くの賢良なる母を見ることを得べし。若し然せずして、飽まで撰擇を誤りたる今日の家庭を維持し、徒に無用不急なる課目にのみ勉强せしめむか、余輩は、彼等の未來、國家の前途を豫想して、轉た悚然たらざるを得ざるなり。

しばらく、復習せしめよ。唯、復習せしめよ。而して、後、徐に學校敎育の整備を期すべし。





鷹見爽鳩の妻

有馬祐政

かの女の名は冬野、號を綠柳女史と云へり。そが夫爽鳩、本性は石川氏なるが、鷹見家には、女子のみありて、男子なかりければ、石川氏とは、數世うちつゞきて、親近の間柄となり居りたる因みに依りて、即ち、此に養はれて嗣子となり、かの女が主頭の點とはなりしなり。爽鳩十七歳にして、既に著書あり。乘燭或問珍と稱し、凡て六卷。いたく、僧巫の妄を排し、嚴に淫祀の害を彈じ、以て、當時士大夫の惡風を斥けたるもの。二十一歳の時、鄕國三河を去りて、江戸に到り、徂徠の門に遊び、特に詩才の超絶なるに依りて、吟詠の誦すべきもの尠からず。されど、尤も、志を經濟の事に傾け、更に法律儀制をも心得て、大いに治蹟を擧げたりき。冬野女、亦是れと敢て權衡を失はず。居常端正、已を持ち、從順夫に事へ、而も讀書の才屬文の能を有し、好んで國風を詠み、手蹟も、亦、纖麗、草書に於て、最も巧妙を致せり。家父、晩年に至りて、新に男兒をもうけしを、爽鳩夫妻、たま〳〵子女なきがゆゑに、之を鞠養しつ。爽鳩歿かりて後は、冬野女、身自義方を以て、之を訓育し、實は姉弟の間なれども、其の狀さながら母子の觀ありたりといふ。時人、みなかの女が才徳を稱へ、以て良偶賢婦と爲したる、げに理りなりと謂ふべし。世間、現に、かの女が如き地位にある者は云はずもがな。今、假し、天下、多くの婦女子をして此の如き境遇に立たしめんか。果して、能く、その入婿を輕侮せず。又、かさねて、その嗣弟を冷遇せざる者、幾人かあるべき。況して、かの女の如き貞順懇切、才をさへ、能をさへ兼ね備ふる者、吾は殆んど見ることを得ざらんを虞る〻なり。

はん女

磯野徳文

むかし、下總の國、成田といふ處に、はんといへる女ありき。父を藤右衞門といひ、家は、世々漁をもて、なりはひとしけり。はん女年ごろの人となりにければ、父藤右衞門、某がむすこ某をむこにとりてあはせたり。されど、むこの某、うまれつきて多病なるに、父はこれをいとひて、いくほどもなくて、離緣して、家に歸らしめぬ。はん女心ならねども、父のおもはくなれば、せんすべもなくて、涙ながらに、日を過ぐしけり。家もとより富めりしに、こゝ數年がほど、不漁うちつゝきければ、漸まづしくなりまかり、家產すこぶるかたぶきぬ。この時、父、他人をとりて、再はん女に配せんとしけり。はん女きゝて、いなみていへらく、諺にも貞婦は兩夫に見えずといへり。わらは女と生れたれば、ればつかなけれども、願はくは、この義を守らんとて、遂にうけがはざりき。かくて年月經るほどに、家いよ／＼貧しくなり、家產も、大かたうりつくして、ほと／＼窮乏におちいれり。はん女なげきても甲斐なければ、今は、鋭心ふりおこして、人のために衣服の洗濯をし、又は人にやとはれて、いさゝかながら賃金を得て、女の手、一つに、辛くも家計をたて、父を奉養して、たゆまざりけり。さて、いと貧しきが中にも、父には美味をすゝめて、みづから粗糲を食ひ、をり／＼は、一日、一食にてすぐすこともあれど、父の、心をいためんことをおもひはかりて、知らしめず。夏の暑さには、綠陰に負ひ行きて涼を納れしめ、冬のさむきには、爐に、火を熾にたきて、暖をとらしめ、ひたぶるに孝養おこたりなきこと二十六年の久しきになりにければ、其の善行をちこちに聞え、いひ傳へ、聞きつたへて、感せざるはなく、終には、藩主守山侯にも聞えて、粮若干をたまはりて、孝貞を賞せられたりき。こは、寶曆七年八月の事にて、時に、はん女、歲四十四歲なりきといふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



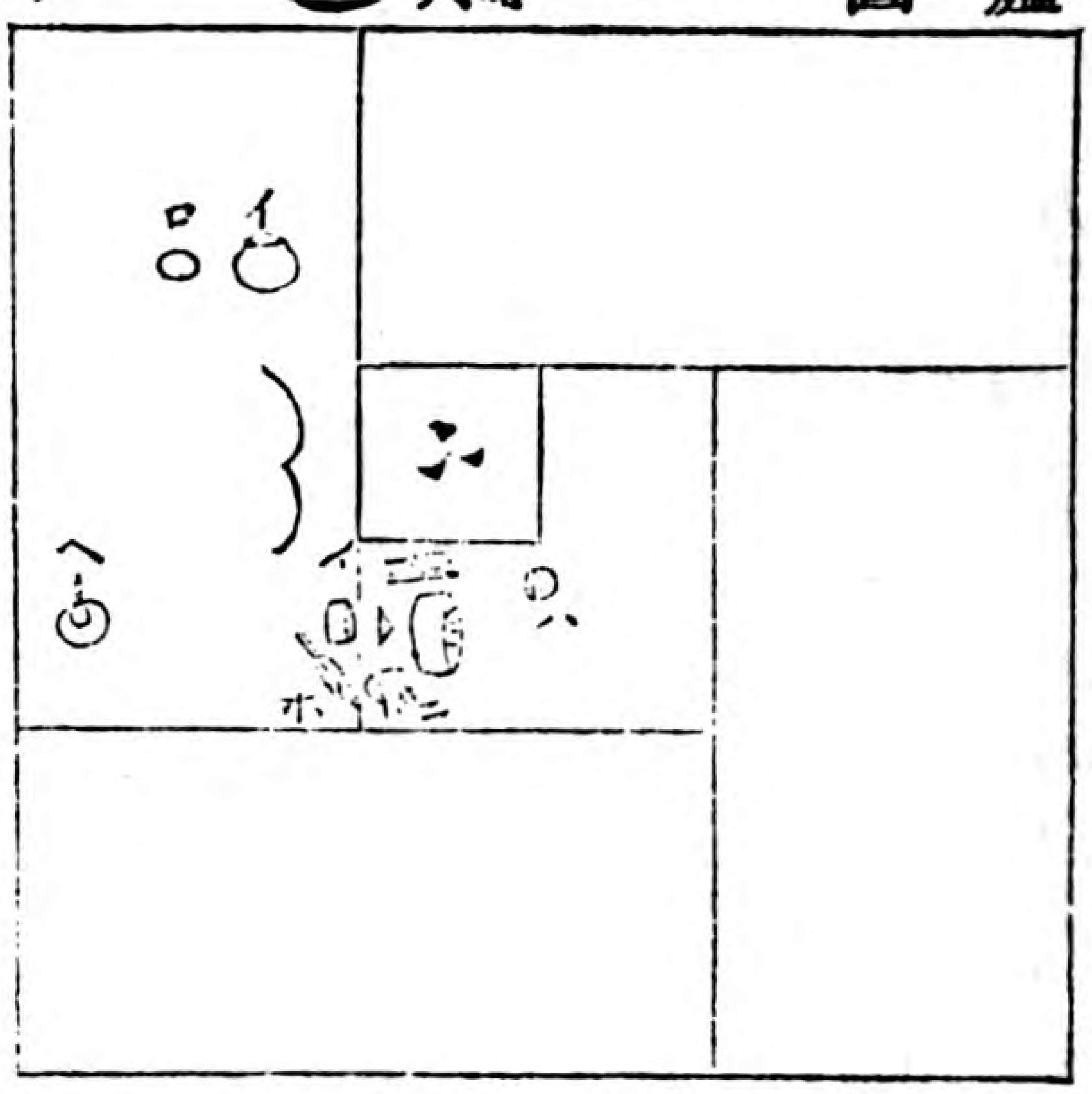
茶の湯

茶禮初學（承前）

孤峰庵碌仙齊　關　葦雄

四疊半爐
炭手前圖
并順

一、羽箒、
二、火箸（此時鐶火箸に掛てあらは假置すへし）
三、香合、
四、鐶かけ



△は環假置の印なり

イロハニホヘト

釜
鐶
香合被好出す處
灰炮錄此處へ假置
三羽一且つかひて後は此處
灰炮錄本座
炮錄灰なまく時ばかり居ろ

る、五、釜敷出し、釜揚る（濃茶の時は必す釜敷紙を用ふるなり）六、鐶はづし、七、羽箒遣ひ、（總はきなり）八、下火直す。九、灰炮錄取寄灰蒔、十、灰炮錄假置五徳の爪はき、其の余灰のこぼれたる所斗箒く。十一、枝炭灰炮錄へ假置、十二、炭を置、十三、灰炮錄、元の座へ戻す。羽箒取、惣箒、直に炭取へかくる、十四、香合を取、香を焚べし。但し、此の時、客より所望あらは出すべし。十五、釜掛け釜敷仕舞ひて、鐶をはづすなり。十六、三ッ羽にて、釜の蓋を向、前、脇と、三つに箒、直に羽箒仕舞ひ、十七、灰炮錄持入り、又、出て、炭斗持入り、次に座箒持出、座を軽く箒込、勝手口、一旦建切り、香合返りたらは、又、出て、直に、釜に向ひ、釜のふたを切掛て、一膝、香合の方へ披き、香合を取り、一禮して入るべし、但し、八疊敷以上は、炭の時座箒なし、其の餘、六疊、七疊は時宜に寄るべし。

注釋、不羨曰、炭斗組付方の事は、風炉炭手前

の所委細記したり。可ㇾ見合。雖ㇾ然、爐の時は、小異なき事不ㇾ能、炭斗も、大振なり。炭の寸にも、差あり。特に寒さの時なれば、炭數も多く組ことならん。枝炭は、假置有故、炭の上に置も不ㇾ苦しめり灰は、下火を片付て、直に蒔べし。下火は爐にては向の方へ積上ぐべし。灰蒔方は、向の山より、左りの方、五德の爪の所迄にて、一と匙、次は、又、向の山の所より、右の方の山迄、一と匙、次に左の方の山より、前の山迄、一と匙、又、匙を持直し柄の先、上に出る様に持、前の山より、右の方の山迄、一と匙、又、匙を元の如く持、爐中の下火をも付たる跡の邊迄、村なき様に灰をまくべし。若、又、釜中、湯不足する時は、水を差足事あり。此時は炭をして後、釜引寄、蓋を明て見て、乃ち不足ならば、鐶を下に置（但し、釜の鐶付の通り、釜へ付て置べし）灰砲烙を持立て、水屋へ、入水指藥鑵にても、湯桶にても持出水を差べし。（但し薬鑵ならば、ろへ蓋置をかけ、例の布巾を、能水を含ませて持出、釜に對して座し、蓋置をばづし、持釜の前に置、蓋の摘みあつければ、布巾を持添て取、其布巾、口の下の方に當、蔓を左手にて持、水を差足べし。程度は、釜の鐶付より上へ過べからず。底で、差たらば、釜の蓋を締、布巾を右手に持、釜の蓋を向前とふき、次に、釜の胴を向の方三四篇、前の方が、二三篇拭ふべし。布巾元の蓋の上へ載、蓋置を口にかけて、持入べし。再出して、釜に向ひ座し、鐶を取釜へ掛けて、釜を、爐へ掛べし。此の時は釜の曲りを見て、鐶をはづし。炭斗へ入、直に炭斗を持入跡は無ㇾ替）

女禮

臨時の客の應接（二）

三石直子

煙草盆をいださば、次には
茶をいだすべし。折から淹茶なく、粗茶ばかりならば、とりあへず、薬罐急須なとへ、茶碗に七八分目の水をいれ沸え立せ、茶碗に程よくつき、香泉など、少しばかり散し、納敬へ載せ持ちいづべし。斯くして、薬罐の類へ、少しばかり、水をいれ、沸え立つ頃に、茶を焙ずべし。上茶は凡て焙するにもおよはされど、非常に濕われば、雜と焙じ黴臭くば、少し焦るはどにすへし。淹茶は、激りし湯にて、先、外の茶碗へ、一扁漉し、二扁目を客人の茶碗へ、程能くこし、前の通り蓋をして納敬へ載すべし。煎茶は、湯の激りし所へ入れ、早く、蓋をしておき、茶漉の上より茶碗へ洒くへし。

納敬、茶碗は、湯の沸ゆる間に拭きおくやうにすべし。さて、茶出來たらば、納敬にのせ、兩手にて持出で、客人の右の膝の脇に取り、よきやうにして出すなり。若し、此の時、湯茶の御好もあらば、タップリとついて出すべし。又、水ならば、必ず汲置きの水を出すべからず。井様のものへ、葛を、少し入れ汲立ての水にて、薄くときて、砂糖を澤山に入れ、よくかきませ、塵などをとりあげ、其の上水をコップ、水呑茶碗等へ、一杯にうつし、猶、又、塵抔に氣をつけ、よくとりあげ、杉楊子を、一本、頭の方を客人の右にして、盆にのせ持ちいで、其の儘に客人の膝より、二三寸前へ出すべし。杉楊子なくば、白箸の頭の方を、一寸五六分切り縮め、頭の方を盆の椽へかけて出すべし。

十月中旬ごろより、四月の下旬までの間は、寒暖にしたがひて
火鉢を出すべし。先づ、灰を、よく掻きならし、眞中へ火をおき、其の廻へ、櫻炭、其の他雜炭にても、躰よくつぎ、灰ならしにて、炭の根へ、少しばかり灰をかきよせ、火鉢の椽臺等を拭きて、持ちいで、火鉢の大小にしたがひて、左の膝の前へ程よくいたす

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

べし。但し、耳か取手か付きたる火鉢ならば、耳取手を左右にして出し、三足の類ならば、貳本の足を客人の方へ向け、壹本を手前にして出すべし。又、火箸は、銘々、火鉢の類ならば、火鉢の椽、片脇、中程へ立て、枠火鉢ならば、客人の前の椽へ、火箸の頭を揃へ、客人の右にして、かけて出すべし。嚙火鉢の類は、下の臺へおきていだすもよし。

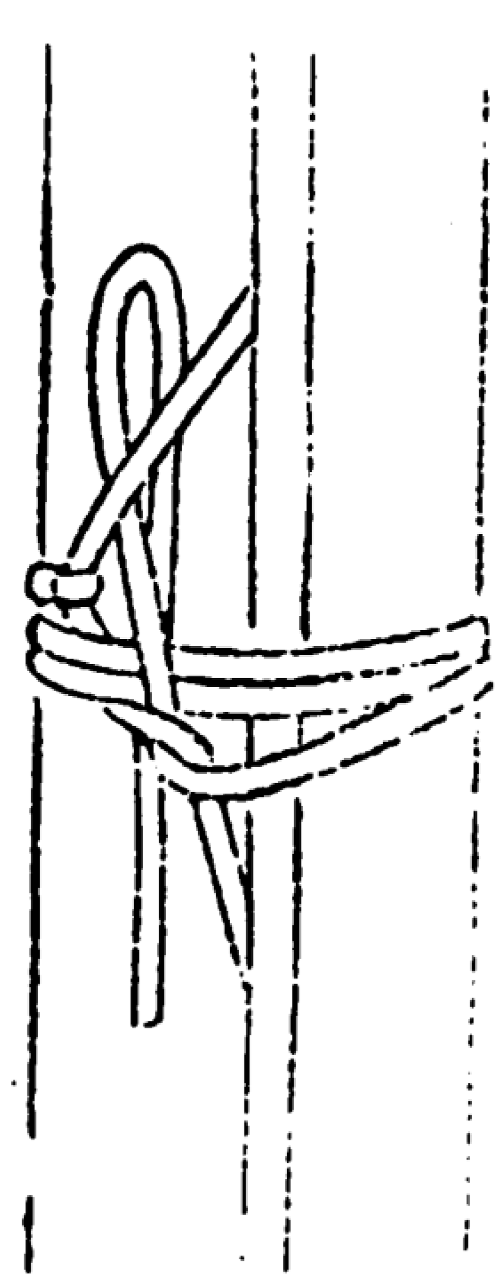
菓子は、時宜により出すべきは勿論なれども、子供同道の御客には、なるたけ出すやうにすべし。菓子を出すに、菓子鉢か銘々盆の類ならば、紙をしくに及ばず、唯、体裁よくもりあげて、盆にのせ出すべし。若し通盆等にて出さむとならば、奉書粘入。なくば、半紙にても、二枚重にしてしき、其の上へもり杉楊子（白箸にてもよし）を一膳、頭を揃へ盆の椽へかけて、客人の前まで持出で、先づ、自分の脇におき、煙草盆火鉢を少しづゝ開かせ、客人の正面膝より、五六寸前へ出すべし。

結方

中島義一

かけもの及び卷ものゝとめかた

（圖　一）



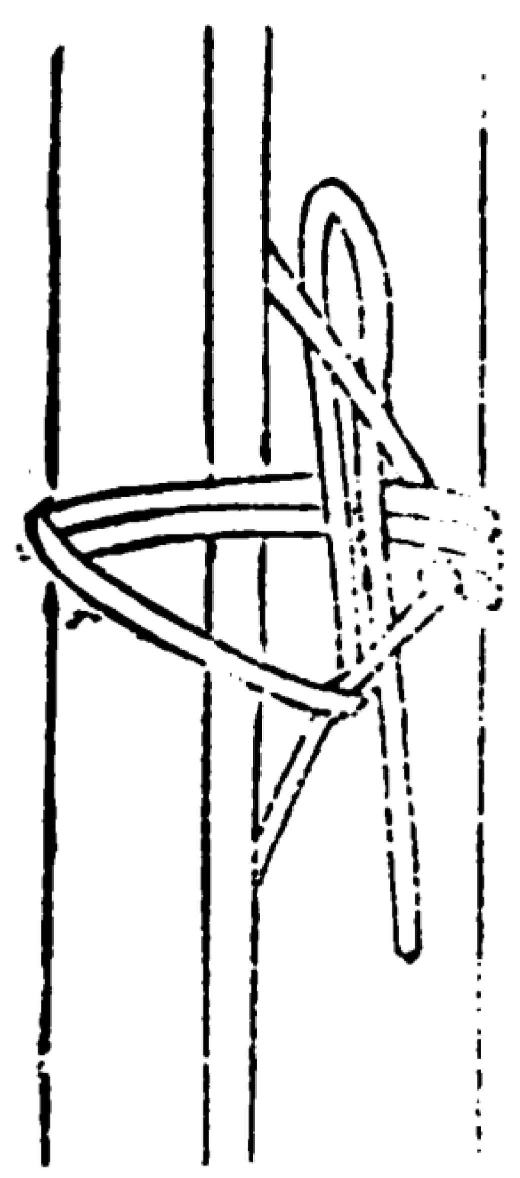
（かけもの）

（圖　二）



（まきもの）

（圖　三）



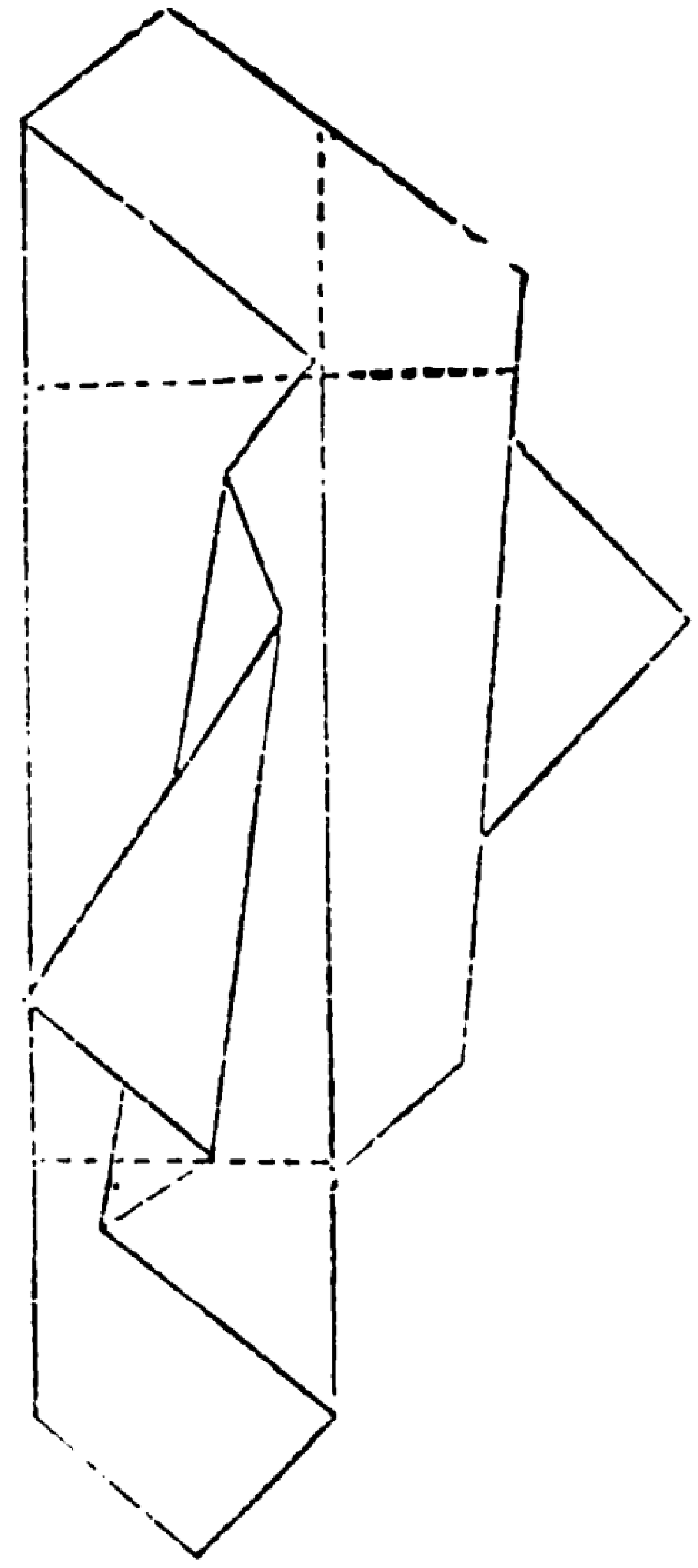
（仝上）

折方

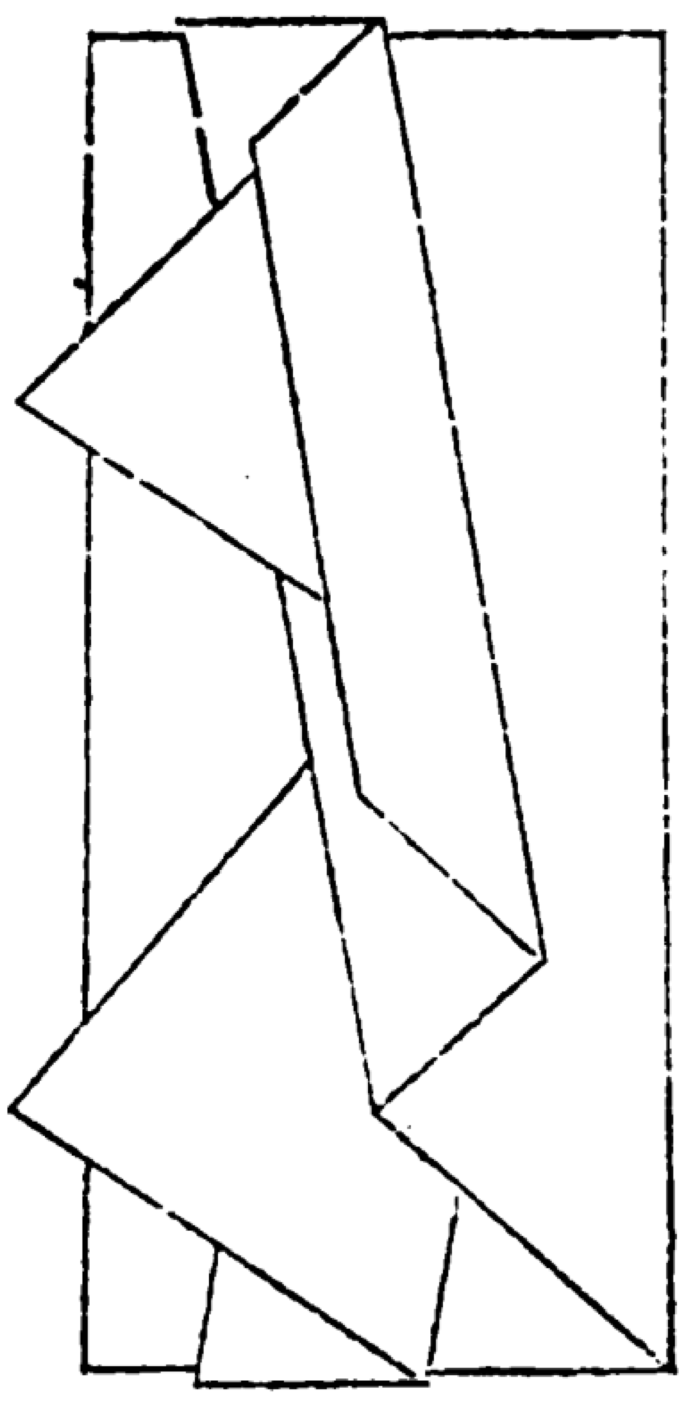
けだれ髪撫包

有佳くやう子

（第一圖）



（第二圖）



進物、又は、常に包置くも、此如くにてくるしからず。水引かくるなり。

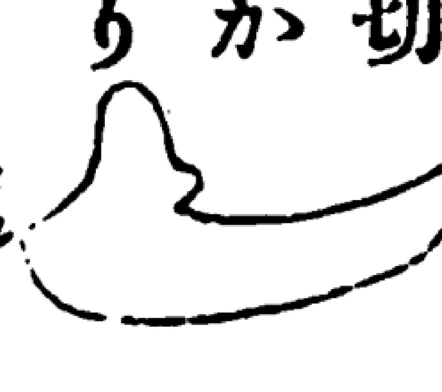
たちぬひ

背負ひ守り寶船

まづ、厚紙を、かやうに、帆の形に切り。又、



かやうに、舟の形に切り。各、綿を、少しばかり入れて、切れをはり



つけ、また、◇かやうの形したるものに、たゞ、切をはりつけ、其の上の眞中に棒の如くきりたるものをはりつけ、即ち〃軍配團扇の如き形を、小さくつくりおき、また、



かやうの形したるもの、左右、二つを切りたる切をはりて、帆の兩傍に出して、はりつけ、軍配を、間にはさみて、船を上にはりつけ、裏を千代紙にてはりつけ、其の上に白きわつき紙、又は、厚紙に、白き切をはりたるもの、、◯かやうの形をつくり、その上を寶の如く畫どるべし。船も、又、白き絹などよろしとす。そして畫

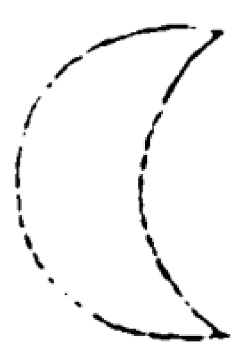
どるべし。帆は、にしきにても、何にてもよろしく、兩わきのかざりも、又、何にてもよし。たゞ、かやうの物は、細工物なれば、なるべくうつくしきやう、色どりをよくする事肝要なり。

（その形）

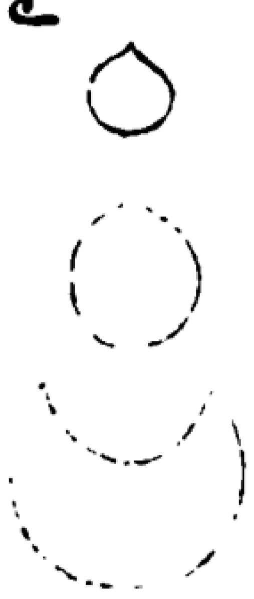


小槌

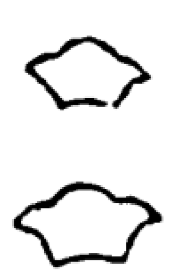
まづ、厚紙を五日月ばかり、即ち、



かやうの形に切り、又、



かやうの物等を切り、各、綿を入れ、切をはりつけ、又、



かやうの形を二つつくり、びろうど、又は、繻子等をはりつけ、左の出來上りの圖の如くはりつけ、裏に千代紙をかやうにきりてはりつくべし。



（小槌の形）



だいどころ

季節料理

鰯の摘入

鰯の新鮮なるをえらみ、頭骨腸を去り、庖丁にてたゝき、摺鉢にて、能摺り。食鹽と、味噌の少量を加へ又、能くすりて、裏漉にてこし、能程にまるめ、沸騰たる湯に投じ、火の通りたる時、すくひあげ、別に清汁を製し置、ねぎ、豆腐類をあしらいになし、椀盛抔によきものなり。

初茸豆腐

初茸を、能く洗ひ、小さきは丸のまゝ、大なるは、二

つ、又は、四つ位にきり、鹽水につけ置、鰹節の、煮汁をとり、初茸を入れ、にえたる時、豆腐をきりて、投れ、醤油にて、鹽梅し、椀に盛、口柚子を添るなり。

燒初茸

初茸を、能く洗ひ、暫時、鹽水に浸しとり出して、水氣を去り、竹串にさし、鹽燒、又は、醤油つけ燒にて食す。

鰯飯

鰯の、頭と、腸を去り、飯の火をひかんとする前、鰯を逆さまに、幾本もさしこみ、火をひきて、能く、蒸したる時、尾をつまみて、引きあぐれば、骨はぬけてとるゝなり。飯は上下と能く、かきませ、清汁にさらし葱、唐がらし杯添て出すべし。

松茸飯

常の如く、飯を焚き、松茸を、能く洗ひ、短冊にきり、酒味淋醤油にて味を付け、飯を、飯びつにうつす時、前の松茸をおかませにすべし。又、飯を、焚時に、米壹升の中に、酒五勺、醤油五勺程投れて仕かけ、松茸を、短冊にきりて、飯の沸あがりたる時、投れて焚も宜し。

菜花園

秋の草木いろ〱　(六)

○白茅　茅萱種類に淺茅、菅茅、香茅、黄茅、などあり。春は芽を出すをつばなと云ふ。小兒、好んで翫ぶ。尤小兒食して、甚益多し。根を茅根と云ふ。又、俗にあき根といふ。夏朽て、螢となると、本草に見えたり。小がやといふは、ちいさきかやなり。高かやといふは、たかく立のぼりたるをいふなり。

○萱刈　萱葺、萱軒端、茅萱は、形、小く、萱、は形大なるものなり。秋刈て、家根をふくなり。いやしき家居を茅屋といへるによりて、諸註誤り來ること久し、

茅は、ちかやにて、短くまことにちいさき家などはふきもしつべし。たゞ萱は別種にて、大なるものなり。

歌　後鳥羽院

かきりあればかやか軒端の月も見つ
しらぬは人の行すゑのそら

此の歌は、後鳥羽院、さぬきの國にて詠せ給ひけるとぞ。此の御製によりて、かやが軒端に遠き島守などゝ付奉るともいへり。

○角觝草　此の草の莖をわけ、互に引合、小兒のたはむれとす。故に相撲草といふ。此の根至りて剛し、よつて、鳥飛ぶ時抓で力草とする也。

俳　　乙由

夏は又むすはれにけむすまひ草

○犬子草　又、狗尾草とも、書く一名、莠、秋穂出る形、犬の尾の如し。又、粟の穂に似たり。俗に雀の粟といふ。

歌　夫木　　爲家

ゑのこ草おのがころ〳〵穂にいでゝ
秋おくつゆの玉やくるしむ

○萩殿　萩の戸、禁中、清涼殿の北の方なり。萩を植うる故に名付られたるなり。又禁秘抄目曰、禁中常の御所なり。萩にかぎらず、秋の花、いろ〳〵植らるゝとぞ、時代によりて、替れるなり。

歌　續千載　　後京極

萩の戸の花の下なる御溝水
ちとせの秋のかげそうつせる

○鬼灯　本名、酸漿、一名、燈籠草、桂金燈、姑娘菜、神代卷に、酸漿、かゝちと訓せり。四五月に、はなをひらき、秋實をむすぶ。

○若烟草　漢名、烟艸異名、相思草、淡婆姑、還魂草、菸、

○布瓜　本名糸瓜、絲羅、紡線、蔓卿なり。六七月に黃なる花ひらく、へチマといふは蠻語なり。近世、へちまの若き物を取りて、田樂とて、食用に宛つ。

或るものに足の冷ゆる人、糸爪の水を、いくたびもぬるべし。一生寒をわするとあり。

十月手いれすべきもの(一)

あくるまばかりさく花も、いつしか露のまかきにあとたえて、をみなへしも、色さめにけり。たゞおひさらほひし尾花のみ、ものよりことに、手をさしいでゝまねくかおかしうみゆるに、紅葉、のやう／＼色つくなどいふはかりなし。

はるけき野邊をわけいれば、いとものあはれなり。かぎりなくさきみたれし秋のくさ／＼は、みなおとろへつゝ、あさちかはらも、かれ／＼なる虫の音に、松風すごく吹きすさぶなり。かゝるをりの手すさひには、とり／＼に色つける木たね、草のみとりをさむるなど、いとよけむ。または、腰もと、さては下邊どもしたかひて、來ん春に吹きもみたざむ草や木に、手いれしたるもまたふさはしきなぐさみならむかし。いてや、此の月にものすべきものをかき出でむ。

分栽すべきもの
蠟梅　梅桃　萱艸　牡丹　芍藥　玫瑰　菊　八仙

移植すべきもの（凡て分栽すべきものは皆移植するなれさなほ）
枇杷　山茶　玫瑰　麗春　橘　橙

此の月は、扦插も、壓條もよろしからず。

接換すべきもの
牡丹　薔薇

下種すべきもの
罌粟　柿　紅花　栗子

（つゞく）

餘談

前號雜報欄内に、農事篤志者と題して、あらましをかゝげたる、奥州萩の馬場の老農、千葉新四郎氏の行、及び、はなしの中には、此世の家をなさむる人たちの聞きてあるべきふしあればなほ、此處に餘談としてかゝげつ、（眞澄胤）

籬の内に聲たからかに、傭夫等をはげます翁あり。今日は、氏あるめりと、門をさし入れば、今朝は土の濕はとよし、いろ／＼の苗をうゝるなりとて、傭夫等に、茄子苗の女男を教しへ、南瓜のも、女をうゝれぞ、男よ

りは、三倍の收穫あり。其の茄子苗の根の細根のみ多くあるは、女苗なり。其の牛房根のみなるは男苗なるぞ。とり除くべし。此の南瓜は呼び接ぎするのはいとよしとて、呼び接ぎの法などいふ。いとも不審儀なることをいふものから、翁に、さぞや面白き農業上の話やあるといへば、うちに入れかし。告げむ事こそあれ、とて家内をして茶の間にあないせしめぬ。さていはく、余の年、六十をあまれり。此の間經驗せし事をいはむ。思へばふるきことなり。萬延元年のころ、稲穗に雌雄あるを發見せり。秋の取をさめ多きをのぞまば雌種をうゝべし。其の雌種は穗先、二粒か、三粒にて止まり。雄種は、一粒なり。之もて見分くるなり。まづ雌種をとり、之を穗先三分、中三分、根元四分の、三部に分かち、こゝろみるに、穗先の方、一反歩植うる時は、普通より、六斗も取り増す、中のは、四斗五升を増す、根本のは、一斗を増すなり。近きあたりの農人には、茶席なり道連せし時なり、はや敎へあれど、猶いかにかしてか、之を、天下に公にしたし。また、大根にも男女あり、其の根の末の太きは女なり。細長きは男なり。之も女の方を種にして、植うれば、おほきくなる事、いふばかりなしなど其の他、くさ／＼の菜木についてかたるところ多かりき。ある時、氏はあまたの賞狀をあたへられありと聞きしかど、其を見まほしと、のぞみけれども、よのつねの人ならばほこらしげに、差し出だしべきに、氏は之をいなめり。されどさま／＼に強ひこはれてやう／＼古めきたる箱より、あまたのかきつけとり出でき。博覽會、及び、各縣聯合共進會等に、農產物出品して得たる賞狀十三通、舊藩主よりの賞狀、及び、賞品の送狀などあり。また金穀物品を人に惠みて、或は公共のためにさゝげて救助せしを以て得たるもの、四枚父母に、孝養を盡したるをもて得たるもの、一枚あり。氏は、又、諸禮式、折形、料理をこのみて、そが薀奥を極む。弟子あまたあり。されば、家政もよくとゝのひて、家内一同僕婢の末々まで、禮義たゞしく、農家の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ものとはおもはれぬばかりなりとぞ。氏が常にさとし草とて詠吟する歌に曰く

つとめてもつとめてもまたつとめてもつとめても
　つとめたらぬはつとめなりけり

以つて其の平常を察すべし。



源氏物語講義（三十一）

下田義天類

朝夕のことぐさに羽根をならべ枝を交さむと契らせ給ひしにかなはざりける命の程ぞつきせずうらめしき。風の音虫のねにつけてもものゝみかなしうおぼさるゝに弘徽殿には久しううへの御つぼねにもまうのぼり給はず。月のおもしろきに夜更くるまであそびをぞし給ふなる。

こゝも、前段より引續きたる所なり。即、母北の方よりの御返事を御覽じて、陛下の思食しつゞけさせ給ふ御心の内を叙したる所なり。さて、その終を弘徽殿に移し、此の女御の無情なる事を序でゝ讀むものをして、陛下の御愁傷に對する同情の度を高めしめ、また、一方には、源氏の君の敵役なる、悪后の憎体なる筋を進め行く伏線としたる所なり。

○朝夕のことぐさとは、更衣が御在中、陛下と共に語らせ給ひし御談話の定文句になり。

○羽根をつらぬ枝をかはさむとは、天にあらば、願くは比翼の＝鳥とならむ。地にあらば、願くば、連理の木とならむといふことを、かく言ひかへたるなり。即、陛下と更衣との二人の御中は、彼の玄宗皇帝と楊貴妃との御間に契らせ給ひしやうに、鳥となるならば、御互に、其の羽根を連ねあはむ。木となるならば、相共に其の枝を交へあはむとは契らせ給

ひしにと也。

○かなはさりける命の程ぞつきせずうらめしきとは、其の御約束は、御在世中の空だのめにて、遂に、その御念願をも果されず、更衣も、獨先立たれ、陛下も、一人生き殘りおはしますこと、共に心に叶はぬ命の度合が盡くる世なく哀しく、うらめしく思食さるゝとなり。彼の長恨歌の結句なる、此の恨、綿綿盡くる期無らむといふ語を取りて書きたる所なり。

○風の音虫のねにつけてものゝみ悲しくおぼさるゝるに、義はいふまでもなし。風と虫とは、彼の野分だちて云云と書き出したる文の脈なり。例の長恨歌には、この意を春風桃李花開夜。秋雨梧桐葉落時。西宮南苑ニ多ニ秋草一。宮葉滿レ階紅不レ掃などいへり。是をかきかへて、かく言少にいへるなり。

○弘徽殿には久しう、うへの御局にもまうのぼらず。まうのぼらずは詣登らすの音便なり。陛下には、かくまで御愁傷遊ばされて、風のおと、虫のねにつけても、物のみ悲しく思食さるゝに、弘徽殿の女御は、それを慰め奉らむともせられざるのみならず。此の頃、久しう殿上の御局にも御出仕なく、こよひもこよひとて月のおもしろきに乘じて、さも氣樂らしく愉快そうに、此の深更に及ぶ迄管絃の御遊興をし給へりとなり。

以上を、再度取束ねて申せば更衣御在世ノ時ニハ陛下ト更衣トノ御兩方ノ朝夕の言種に二人が中ノ約束ハ此ノ世ニアリテハ云フモ更ナリ。生ヲ代ヘタル後々マデモ若シ鳥トナリテ天ニ住マハ相互ニ羽根をならべ若木トナリテ地ニ生ヒナハ相共ニ枝を交さむとマデ常々契らせ給ひしに更衣ハ墓ナク先立レ陛下ハ連ナク死遅レテ共ニ契約ヲ果サレヌヤウニナリハテタノハ偕モ心ニ叶ハヌ二人が命ノ命數カナ。コノかなはさりける命の程ぞ長恨歌ニ天長地久時アリテ盡クトモ此ノ恨綿々盡クル期無カ

ヲント云ヘルヤウニつきせずうらめしき限リテアル

風のおと虫のねにつけても陛下は物のみ悲しう覺さるゝに、弘徽殿ノ女御には、久しく、上の御局にも參上り給はず。今宵モ今宵トテ彼ノ御方ニハサモ氣樂ラシクコノ月のおもしろきに乘シテ夜ふくるまで琴や笛ノ御あそびをぞし給ふなるといふ程の義なり。

思子等歌一首并序

田島隨二

釋迦如來金口正説。等思二衆生一如二羅睺羅一。又説愛無レ過レ子。至極大聖尚有二愛レ子之心一。況乎世間蒼生。誰不レ愛レ子乎

〇金口如來は、金身なりといへれば、斯くいへるなり。〇羅睺羅釋迦の子なり。契沖曰はく、最勝王經に、吾觀二衆生一無二偏黨一如二羅睺羅一、愛毋レ過レ子誰不レ愛レ子乎とありと。

宇利波米婆。胡藤母意母保由。久利波米婆。麻斯提斯農波由。伊豆久欲利。枳多利斯物能曾。麻奈迦比爾。母等奈可可利提。夜周伊斯奈佐農。

うりはめば、こどもおもはゆ、くりはめば、ましてしぬはゆ、いづくより、きたりしものぞ、まなかひに、もとなかゝりて、やすいしなさぬ、

反歌

銀母。金母玉母。奈爾世武爾。麻佐禮留多可良。古爾斯迦米夜母。

しろかねも、くろねもたまも、なにせむに、まされるたから、こにしかめやも

〇しぬはゆしぬはるにおなし〇まなかひ眼の間にて、即ち眼のさきなどいふに同じ〇もとなかゝりてのもとなは、基無にて、いたづらに、そゞろに、などゝおなじ〇やすいしなさぬ古義に、しは例の一すぢを、重くいふ助辭にて、安寢不レ令レ宿なり。

ねは、禰佐の縮りたる言なりとあり。さていとねとの別をいへば、いはよく眠りたるをいひ、ねは眠らずとも、臥たるには、總べていふなり。瓜を食へば、先づ、子供のことぞおもはるゝ。栗を食へば、まして思ふこと甚切なり。如何なる因緣にて、いづくより生れ來りしもの（にて斯くまで愛情深きもの）ぞ。（瓜栗などの時のみならむや。いつもいつも）眼のさきにかゝりゐて、思ひわするゝひまなく、夜も、心安くは、遂にいねさせず。

○なにせむに古義には、何故にといはむがごとしとあれど、いかゞ、何にかせむといふ意ならむ。金銀、珠玉は、うへもなき寶といへども、何にかならむ比較しては、其等の寶にもまされる寶は、子に若くものあらむや。子にまさる寶あらむや。子なるかな。子なるかな。唯、愛に溺れて、邪なる道に入らしめさらむことを、つゝしむべし。



神國女訓抄（二）

山口貫道

抑、吾大日本國は、天壤の間、中津國にして、唐土天竺の諸國にも勝れ、掛まくも畏き、天照皇太神の御孫瓊々杵尊、天降りましませし神國にして、皇統天地ときはまりなき壽域なり。それ皇太神は女神にておはしまし、院中に陽德を具し給ひ、土金のお德、全く、光華明彩、六合の內に照徹し給ふ。伊弉諾伊弉冊の二神、天の柱を以て、天の上におくりあけ給ひてより、永く、天地を照し給ふ。是、今日の日神にておはします。この御神の御子孫、永く、天地と共に、かぎりなく寶祚につかせ給ふゆゑ、上は　天子月卿雲客

皆眉をれろし、御口に御歯黒を召し給ふも、皆、女人の容良なり。惣じて、主上の御側、夜の御殿、或は内侍所におりて、八咫の御鏡を齊き奉り、及び、神璽寶劍を供奉し、或は奏請、宣傳、禁内禮式、宮内管鑰、陳寶賞賜のことまでも、皆、女官を以て掌せ給ふ。是皆　祖天照太神、女神にておはします、其の御神胤なるゆゑに、女人を親しみ用ひ給ふ御事なり。唐土より、吾朝をさして、女王國とも、又、姫氏國とも稱し奉るとかや。わけて、祈禱神事には女人を專一となすこと神代よりの古實なり。抑　天照太神御弟素盞嗚尊の、惡き行迹を發慍たまひ、天の石窟に幽居給ひしかば、六合常闇となり。夜晝の相代事をしらざるとき、八百萬神等、種々禱り給へども、其の驗しなかりしに、女神にて天鈿女命と申すがありて、手に茅纏の矛を持、天香山の眞榊を以て、鬘となし、日陰を手繦にかけ、庭燎を燒、舞踊して、たくみに俳優をなす。此のとき、日神、御手をもて磐戸を、細目に開きみそなはし、再び、天地をてらし給ひて、めでたき御代となり侍りしも、ひとへに、天鈿女命、神樂を以て、大神の御心をやわらげ給ふ御德なり。其の後、神祇を祭るには、必、女人を用ゐる事なり。人皇第一　神武天皇、朝敵退治の御祈禱の御時、和州丹生川上に渡り、天神地祇を祭り給ふにも、道臣命に勅ありて、齋主となし、嚴媛の號を授け給はりしも、軍中、女人なきゆゑ、かりに道臣命を女となし、祭主とし給ふ御こころなり。

續人名

釋　法　忍

もろこしわが朝ともに、聖の掟として、をとこは、二たびつまをむかへてもくるしからず、女は、一たび人のつまとなりては、また、とをとこにとつく法なし。そのゆゑいかんとなれば、をつとは、天にたとへ、つまは、地にたとへたるものなれば、つまの、夫をいた

だくことも、天の地をおほひ給ひて、のがれざるがごとく、天は、二つとなきものなれば、ふたりのをつとにまみゆる道なし。すでに、辨才天女は、宇賀神を、かしらにいたゞき、おはしまし給ふ。是、をつとは、天にひとしきせうこにして、もろ〳〵の衆生へ、つまの、をつとをたつとぶべきことを、しめし給ふ御事にておはしまし候ふ也。されば、夫にはなち出されたる女は、天のなはひをはなれたるがごとくにて、此世の外のものとなれば、人間の内にあらず。いか斗かなしき事にておはしまし候。すべて、をつとにすてらるゝ事はみなあやまちあれば也。されども、をつとの心に入らんとて、こびへつらひ、をつとのあくじにくみし、天下の御掟をそむき、夫も身をうしなひ、家のほろびんをみながらも、いさめあらそふべからずと申には侍らず。これ、このことはずゐぶんあらそひ、いさめ、をつとの身のうへあんおんなるやうにするこそ、まことの道にて候ふ也。さればとて、をつとを見はなし、

我かたより、家出するは、道にあらず、たゞわが心を正しくして、まことをつくし、いさめあらそひ、そのうへ、難にあふとも、身をのがれざるを、貞女とは、申すべし、さほどの心底なれば、をつとも、女房の志にはぢて、あらき事も直るものなり。されば、つね〴〵みづからのつゝしみかんようにておはしまし候。唯わが心を一すぢにして、をつとを、大せつにいたし、かりにも、夫婦の禮義をみださず、志をたゞしくして、ねんごろにつかへ、外へ出るとて、わきて、かたちをつくらず。内に有るとて、身もちをこそず。夫の留守に、人をあつめて、あそばす。僧俗によらず、おつとのるすへ客來らで、ひとまをへだてゝ、ゐんぎんにあいしらへ、用の事は、とくとうけ給はり、入組候事は、硯を出して、認させて、うけ取給ふべく、たとへ、不斷こゝろやすき人たりとも、をつとの留守にたはふれくるふべからず。隨分、行義正しく、何かに、心を付け、人にうたがひうけざるやうに、はからひ給ふべ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し。留守の酒事よろしからず。みだりにありく事なく、火のもととうぞくの用心し、召つかひ等へも、心を付け、家のしまりよきやうに守り給ふ事せん一にておはしまし候。

すべて、女子は、こんれいの時、おやの家をいでゝより、二たびあとをかへりみず、夫の父母を、まことの父はゝとおもひ、ずゐぶん孝行を盡し、大切に取あつかひ、たちゐおきふしに心を付け、みづからかいはういたし、食事も、舅姑の御心にかなふやう、あさ夕ともに心をつけ、すこしもわたくしの心をもちひ給ふべからず。夫には、事によりいさむる事もあるものなれども、しうとしうとめには、いかなるひがことをのたふとも、あらそひいさむることあるべからず。たとへば、しうとしうとめ、此のことはあしとのたまはゞ、よき事にても、まづうちおきて、したがひ奉り、又、よかるべしとの給ふことあらば、たとひ、あしからんとおもふことありとも、まづその仰にしたがふべし。是をまげてしたがふとは申侍るなり。こゝに、さる家中の何某のつま、貞心ふかく、女の道をまもり、夫は申に及はず、しうとしうとめによくつかへ、少も心にたがふことなく、しうとめの心かたましく、いろ／＼無理なる事のみ多くありしに、これにもとんぢやくなく、たゞしうとめの心のまゝに、はからひければ、しうとめもせんかたなく、ある時、しうとめ晝ねせんとせしが、せうじのたてゝあるをしりながら、いたうかぜあてゝ心あし、せうじをたて候へと申しけり。よめも、せうじのたてゝあるはしるといへども、あらざるよしをこたへば、しうとめのはぢらひぬらんとをおそれ、せうじのそばへ行き、おとせぬやうにせうじをあけはつして、たてけり。しうとめは、よめにむりなるわざをいひ付しに、ことはをそむかで立ぬれば、いかにしぬらんと、枕をそむけ見遣るに、たてたるせうしをそとあけて、はたとたてけるは、わがことばをそむかぬまことかなと、是より、はじめて、とくだうして、おも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

へはおもふほど、今までのしかたのはづかしく、それより志をあらため、よめしうとの中よく、家も、めでたう、今にさかえけりとなり。惣じて、まことをつくせば、そのまことの光りあらはれ、遂には、身をてらし、人の心をしたがふるものにて候らへば、たゞ〳〵道を守り、信をはうし給はん事かんえうにておはしまし候。

さこし草（三）

故　兒島顒齊

父母の齡かたむきぬれば一しほ心を配り老のものうさを慰むべき事

父母の齡かたむきぬれば、萬のことものうくおもひたまふゆゑ、見るにつけ、きくにつけ、朝夕心せわしくして、不興に見えたまふこともあり。或は老耄し、氣おとろひ、今いひたることもわすれ、又、すこしのことも祝ひ、すこしのことも悲しむものなり。子たるもの、父母の、かく老たまふを見ては、いよ〳〵力をつくし、面色よろこばしく、容貌やはらかに、たゞ、父母の御心にかなうやうにして、老のうさを慰むべし。されば

慶安の頃、岡山侯光政君のつねに書よむことをこのみたまひ、國のまつりごと、聖の敎にかなひて、國中、皆、其の德に服せざるなし。ある時、御弟、某の君と同じく、母の御前に座し給ふ。母君光政君にうち向ひてのたまふは、江戸の通行に、奴の鎗ふることいかゞいたし給ふや。われ、いまだ是を見ず。そのさま見たしと御意ありければ、光政君、かしこまりたてまつるとて、直に箒を以てよと仰せられ、それをもて鎗となし、裾をからげ、奴のまねをなしたまふ。母君よろこび玉ひ、弟君にも所望と御意ありければ、只わらひを含みたまふのみ。光政君しり眼にてにらませ給ひ、日を經てのち、弟君、いかゞ思はれしぞ。われら年

來母君につかふといへども、國を領するととなれば、御傍にていつかせ給ふ人、又、御膳にさふらふものなとは、たいてい御不自由はあるまし、たゞ〳〵御意ありしとを、いかでかなさずしやむべきやと、御孝心のほど、自然と御顔色にあらはれければ、御傍にありあふ人、みな感ぜぬはなかりしとぞ。彼の老萊子が、七十にして、二人の親につかへ、身にいつくしき衣を衣て、幼きもの丶形になり、戯れ、或は、親の食し玉ふまへにて、わざとつまつきたふれ、幼兒の泣くやうになきしも、皆、親を慰めんためなり。又

寛永のころにや、京に勘兵衞とて衣裳に繪をかくことを業として、父に孝なる男あり。父、つねに酒を好めども、家のまづしきをかなしみて、飮めども樂まず、勘兵衞、夫婦これをうれひて、黃金いるべき箱、ひとつもとめきたりて、石灰を滿て、よくもしたゝめ置き、夫婦、これをかき出で、父にむかひ、われら年來まうけし金、是ほどあり。これを、酒のあたひといひしかば、父大によろこび、それよりおもひのまゝにのみて、まことに富りと思ひけるとぞ。光政君の鎗ふりのまねをなしたまふ、老萊子が、幼兒のかたちを似せ、繪屋が、金箱をもち出る、かくまで、親のことを慰めける孝子の志、あはれともいと殊勝に覺ゆ。

日本人性質（二）

大鳥圭介 翁 講話

それから書物は無論內外共に讀まなければならぬが成べく外國の本も讀まぬといけませぬ、外國の本と云ふても御承知の通り、いろ〳〵ありますが、今の東洋の位地に在ては英書は宜しいでござりませう、之は骨の折れることで一寸したことではいけませぬ、日本では學問をすることが多くて、歷史も知らなければならぬ地理も知らなければならぬ、算術も知らなければならぬ、其上に西洋の本も讀と云ふ必要が起る、私共の若

い時を御話すれば、二十二の時に、初めて西洋の本を讀みました、緒方とか、加藤とか、箕作麟祥とか云ふ人等と、同塾してやりましたが、これは、中々急に往かぬものであります、固より當り前の、今日の本や、漢文と云ふもでもの、骨が折れる、勿論、英國語でありますから、中々骨が折ました、併し私共がやつた時分から考ふれば、字引でも、何んでも、備ッて居ッて、金さへあれば、大概の本は得られないと云ふことはない心掛さへすれば出來る、內地雜居と云ふことになれば事業でも企てやうとか、世間の交際をしやうとすれば外國語を知らなければならぬ、內地雜居になッたならば、我々の隣に來て外國人が家を建てるかも知らぬ、從て話もせねばならぬ必要も起る、年齡に餘裕あるものならば、心掛けられたい、これからは、支那の學問をすると云ふ人が少なくなるだらうと思ふが、漢文も相當にやッて、ザッとした文章を書き、六ケ敷い文章も讀めて詩でも作ると云ふことは、中々六ケ敷い、六ケ敷いがそれも一通りはやらなければならぬ、それから、漢文ばかりやッて外國語をやらぬと云ふのはよくない、概して一体に言へば、世間一通りの洋書は是非讀まなければならぬ、さう云ふことを心に掛けられて充分本を讀まれましたならば、國家の利益だらうと思ひます、其人一身に取つて、會社に雇はれやうが、官吏にならうが、其外何にならうが、洋書が讀なくてはいけませぬ、…………

それからもう一つ御話して置きたいのは、矢張り日本人の性質ですが、もう一ッ欠てけ居ることがある、物をするに本氣にならぬ、六ケ敷言へば、神聖になれぬ、是非此事をやらうと云ふて、一生懸命で物を成し遂げると云ふ、其勇氣が日本人に少ない、私は日淸戰爭の時分の歷史を書いた人が、何か私に題字を書いて呉れと云ふことでありましたが、至誠臨事天助之と云ふことを書きました。天之を助くと云ふことは甚だ漢然たることでござりますけれども、一生懸命にやると

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

云ふことさへ衰へなければ必ず事が成就する、これを支那の語から言へば、天之を助くると云ふても差支ない、西洋の言葉にも、さう云ふ意味のことが澤山ある。

それから日本人が今日御同前の話をするに、笑が多い、極く餘計笑ふ、下女とか、其他總ての女が只笑て居る、途中で會うても笑ふ、可笑いときに笑ふならば、幾ら笑つてもよいが、可笑くないときに笑ふのはいけない、御同前の日本人同士で笑ふことは慣れて居るから可笑くないが、西洋人は何んでもないのに笑つて話をすると云ふことはありませぬ、日本人は途中を歩行いて居るのを見て居るに、獨りで笑て居る人がある、

……初めて調練の稽古を、横濱の小田と云ふ所に始めたとき、即ち佛蘭西流の海軍を組織したのは、私共が始めたのです、佛蘭西から三十人の士官を聘して、舊幕の人に稽古をせよと云ふことでありましたが、その時日本人は調練をするに能く笑ツて居ると佛蘭西人が言ッた、肩に筒を付けと云ふとき、それではいかぬと云はれると、日本人が笑ふと云ふやうな譯だ、そこで、佛蘭西人は考ふるに、日本人の笑ふのは己れを輕蔑して笑ふのでないかと考へて八ケ間敷く云ふ、それからだん〳〵辯解してあれは日本人の僻だといふことを得心させて漸く濟ませたことがあります、西洋人に對して笑ふべからざるときに笑へば、輕蔑すると考へられます、今申したやうな譯で、佛蘭西人も、初は己を輕侮する、師匠たるものが物を敎ふるに、愼んで敎を受くべきのに、ニヤリと笑ふと言ッたさうであります、それでそれは日本人の癖だと云ふことの説明も受け、段々やッて見れば、どれを見ても笑ふから、輕蔑するのでないと思ふた、斯ふ云ふ性質だと云ふことを悟ッたと云ふことであります、笑ふと云ふのは輕卒と云ふことから出るのでないか、物に眞面目になッて本氣になると云ふことの出來ないのは、平常笑ふと云ふことの多いからでないか知らぬ、……本氣にならぬと云ふことについて、斯う云ふ例がある、（つゞく）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

主從心得草

諏訪忠元

子は、親の仕くせにてどうでもなる者なり、攝天保七申の三月用事ありて、京都へ登り、京都より、叡山へ參詣致したり。其の時は八瀬大原近所より、十七八の娘、三十四五四十位の女、いくたりも連立て、柴薪米麥等色々な物をつむりの上にのせて京の町へ賣に出る、此の女共は、朝より出て、晝の八ッ頃にかへると見えたり。中には、乳呑子を持たる女もあるべし。跡にのこりし乳呑子はいかゞ致て居るやと思ふ。かく致て、茶屋に休みたる時に、其の事を尋ねしに茶屋の亭主がいふには、朝乳をのませてふごにいれて、(ふごといふは、わらで作りたる、此方のお鉢いれを見るやうな物なり)釣致ておけば、母のかへる迄は手をなめ、足をうごかして、きげんよく遊んで居る也、若なけば、其のふごを誰にてもうごかせば、夫にて、子は、泣やむとの事、何所の子供も、皆、其の通りなりといへり。

爾らば、心なき孩兒さへ、ならはしによると見えたり。況や、五ッ六ッ十一二の子供致つけするに、何のかたき事かあらん。親の心の通りになる者也。畢竟、親があまいからの事なり。又、越前の國より、三十四五の女、江戸へ奉公に來る、其の女の咄しに、私は越前の國の百姓なり。女も農業に出る。朝出で、晝かへる、ひる出でばんにかへる。是によつて、子供も、日に三度宛より外は、乳をのみ不申候長人の御飯をたべると同じ事なりといふ。そして、其の子は内にどうして居るぞといへば、是も、わらにてふごを作り、下に、灰をいれ、其の上に古きござを致き、不淨致ても、皆、下へ取るやうに致ておくなり其の中に、一日遊んで居る。又、たまく泣子もあれ共、夫も捨置と、泣くたびれて、後には、其の儘ねて致まい申候といふ。是によつて、朝、乳をのませると晝迄遊んで居るといひたり。爾らば、孩子も國のならはしによる所の風によると見えたり。然るに、三ヶの津を初め、相應に暮す所

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の人々は、乳母を置、だきもり等を付てそだてるもあり。世の中は色々様々也。所々方々を見合せて、身分より下のはうを以てそだつべし。身分より上の方を以てそだつれば、親子共に福分を失ひて、大いにあやまる事あり決して、奢たる育てやう致すべからず。歌に

○お乳うばて育てた子にはゆだんすな
　親のめぐみをしらぬ者なり

とあり。是にも間違なし。をごりて育てた子は、己を高ぶり、人をあなどり、不忠不孝の事多し。末の繁昌は覺束なし、子は、親のしつけによる物なれど、必ずあしく育ぬやうにすべし。子供は、五ッ六ッ頃より、十二三が大事也。此の内に手ひどく育つべし。十七八になつてからしつけをしてもきかぬとしるべし。何でも幼少の内のしつけが大切也。智ある親々は考へ給へ。子供は、國の風、所の風親のいふやうになる筈也。犬猫でさへ、國の風、所の風になる者也。尾州あたりの犬は、猫や、鶏を見ると直にくい殺してしまふ。夫故、猫や、鶏は、犬を見ると大ひに恐るゝ事也。爾るに、江戸の犬は、猫鶏を取といふ事なし。又、猫も、鶏も、犬を恐れる事なし。かへつて、猫が、犬に飛かゝつて犬をおどす事あり。犬も、又、猫に世辭を遣ひ、恐れた風をして、逃て行也。畜生でさへ國の風所のならはしによると見えたり。况や、人間は、猶々、習しによるとしるべし。世間の親々達は、此の道理ある事をしつて、子供のしつけを、よく致すべし。あまり、あまやかし、寵愛過て、子供の福徳を失ふ事なかれ。中人以下は、捨育てといふにすべし。あまりやれ〳〵といふと圖にのつて、甚だ、我儘者となる。大にわろし。又、古人も子供は、三分寒く、三分ひだるくさへしておけば、子供に病ひなし。達者に育つ者也。といわれしが、尤也。子供は、くひ過、あつ過ぐと大毒也。子供は、身しらずにたべるからして、親がかげんして、食はせねばならぬ。子供は、只さへ、熱の多き者也。然るに生れ子に頭巾をかぶせ杯するは、子をてうあい過て、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

子の壽命を縮る也。愚鈍といふべし。

敎悌抄（十六）

風雅集雜下

白絲を人の心にたとへたる事を
よめる　高辨上人

むかしたれ人のこゝろをしらいとの
そまればそまる色になさけむ

題しらず　從二位爲子

こゝろだにわが思ふにもかなはぬに
人をうらみむことわりぞなき

新千載集雜下

百首御歌の中に

花園院御製

雲をふむみねのかけはしそれよりも
うき世をわたる道ぞあやうき

同　俳諧歌

康資王母とりこして久しくまうて、こさりければ、伊勢の大輔がもとよりたらちねのおやをばすてゝはいかに人の子をのみおもふ我子ぞとありしかば返し

康資王母

人の子のおやになりてぞわがおやの
おもひはいとゞ思ひしらるゝ

新拾遺集雜中

中園入道前太政大臣

いつ代まで君につかへてとしさむき
松のこゝろはならひ來にけり

同　同

題しらず　普語法師

あらましにいとふは今もやすき世を
まことにならば捨やかねまし

新續古今集雜下

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

白河殿七百首歌に隱士出山

みちありとわか君の代にいではてゝ

前大納言經任

山のおくにはすむひとも無し

風雅集雜下

大江廣秀

みなかみのすめるをうけてゆく水の

末にはにごる名をばながさじ

續後拾遺集雜中

弘長百首歌奉りける時山家

前大納言爲氏

音するにかけひのみづのたよりにも

みを任せぬるこの世なりけり

續古今集雜下

十首歌の中に

前内大臣(基)

八雲たつみちはふかきをあさかやま

あさくも人のおもひいるかな

新後拾遺集雜下

貞和百首歌めされける序に

光嚴院御製

十年あまり世をたすくべき名はふりて

たみをしすくふ一ふしもなし

新葉集雜下

武藏國へうちこえてこてさし原といふ所におりゐて手わけなどし侍りし時いさみあるべきよしつはものどもにめし仰せ侍りしついでに

思ひつゞけはべりし

中務卿宗良親王

きみのため世のため何かをしからむ

捨てかひあるいのちなりせば

同

同

題しらず

入道前右大臣

日に三たびおろかなる身をかへり見て

つかふる道もわかきみのため

夫木集雑

建長四年毎日一首歌の中に

民部卿爲家

ゆきかよふみちの小山田をりゝゝに
かはるしわざも民やくるしき

同　同

六帖題刀　衣笠内大臣

何ことをおもひけりともしられしな
ゑみの中にもかたなやはなき

（未完）

飛鳥井家和歌の式法（六）

秘傳和歌切字可意得事（二）

忘るなよほとは雲井になりぬとも
空行月のめぐりあふまで

是は、忘るなよと書切て、末にめぐりあふまでと、首尾を合する也。

大よとの松に生ふてふ見るがみに
心はなきぬかたらはねども

此のなきぬは、たらん也。なきぬは慰みぬと云心なり。

花の色に一はるまけよ歸るより
ことし心の空たのめして

是は、二句にて下知して、まけよと云切て、空たのめしても首尾したる也、

俊頼

日くるればあふ人もなしまさきちる
峯の嵐の音はかりして

是は、あふ人もなしと言切也。むかふしやしてと首尾にはてたれども、心のあまれる歌也。深山落葉と云題にて侍り、日くるれば、逢人もなしといふとちめ、嵐の音ばかりして、逢人もなし、さて淋しきをいかにせんと思ふ心あまりを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る也。かやうに同じてにはなれども、歌により
て、心かはる事あり。

櫻花春くはゝれる年だにも
　人の心にあかれやはせぬ

此のやはは、常のやはにかはれり。櫻花と人を
よび出すやうに呼出で、春の久しき年たにもあ
かれすと、花にをしへたる心なり。歌の詞によ
りて、かやうに手爾波かはれる事侍り。初心の
時、心得がたき事なるべし。

定家
浪こさむ袖とはかねて思ひにき
　末の松山尋ね見しより

是は、三句に思ひにきと言切て、尋ね見しより
と、首尾し侍るなり。

俊成
難波江の蘆のふる根は我なれや
　戀路にひちて年のへぬらん

是は、我なれやといひ侍れともらんと侍るはい
ひすゑるらん也。疑のらんにはあらず、かやう
の手爾波、能々見認侍るべし。

我庵は都の辰巳しかそすむ
　世を宇治山と人は云ふなり

是は、首尾あはぬ歌也。古今の説に深重の事侍
れば、書顯すにおよばず。此の歌を本やうにし
てよみ侍らば、手爾波相違すべし。用心あるべ
き事とぞ。

俊成
袖ぬらすをしまか磯のとまりかな
　松風さむみ時雨降なり

是も、首尾、慥ならず、心と手爾波と違ひたる
やうなり。とまりかなといひては、末にては、時
雨降つゝ共、ふる比とも有べきを、時雨降也。
といへる堪能の仕業なるべし。綿密なる事侍る
べし。

家兄遺文（三）

白松園主人

寝覚草紙

第十一段

童の時、したしく遊びける友に、平吉といふ賤の男ありけり。ある日、髪あらはせにいきけるに、平吉も洗はせんといへば、さはとて、諸共にいきけり。君さきにし給へといへば、まづ洗はせをはりて、さて、わしいくつとらせんかと、とふに、わかゝね四つなりといふ。平吉、之を聞きて、何思ひけむ。物をもいはで、つとたちて、さうじあらゝかに、ひきあけて、走り出でにけり。あるじおどろきて、いかなればかくにげたまふといふ。我も心得ず。わし與へて外に出て、平吉平吉と呼びけるに、物のかげより出でけり。などてにげたると問ふに、わしたらねばなりと、かしらかきつついふ。しかさわがしう物せずとも、我はわらはずなど、さりげなく出でんには、中々におとなしく見ゑんを、かたゐなかには愚なる者もありけり、と人に語りて興じき。

第十二段

あるかたゐなかの賤の男、いへ貧しくて、妻子の飢を見るに忍びず、六ッ七ッになれる子をゐて、月を戴きて、ひそかに人の家の芋をなん、盗み掘りける。その子みちべにたちて、とはみをばしたりけるが、忽ち父にいふやう、とはみすでにせんなし。月かしこにゐまして、父のわざをあり〳〵と見給へりといふ。賤の男これを聞きて、何となう尊く覺えければ、かしらを地につけて、その罪をなん、月にわび申しける。もと、その心のすなほなればこそ、心なき童が言葉にさへ、かくはかんじいりにけれ。

第十三段

ある寺院のはしため、いひを焦せし時、主人の僧のいからんことをおそれ、つねにいひをばひそかに、土にうづめけり。さる事を主人の僧はつゆしらず、つねに

よきほどにかしぎて食はせければ、さうなきはしためとおもひけり。ある時僧はいでゆきて、その女、一人留守したりけるが、憚なきがまゝ、ゐろりに足なげ出していねたりけるに、火、衣のすそにつきもてあがりけるを、驚きさめて、もみけさまくせしかど、はや及ばで、惣身やけたゞれ、久しくやみふしけるが、つひに狂ひじにゝ、死にたりけり。天罰きびすをめぐらさずとかや。あなかしこ。

第十四段

すまひ見にいきけるに、めつぶれ法師が見るあり。何すらんと思ひながら、そのさまを見るに、かしらをもたげ、かたづをのみつゝ、何やらんひたすら聞くさまなり。さて、かたへの人に、今は何がし勝ちたり、くれがしが負けたりなど、かたるさま、さながら目ある人の如し。こはかけごゑにてしるにこそ。さとりはやき者なり。

第十五段

悪心といふ法師ありき。貧しかりければ、事々しからぬ法事にても、かならず小僧をゐてゆきて、物などくはせけり。法事やみて後、饗膳をすうるに、精進なればくはず。腥き者ならでは味なしとて、いかなる方にても、魚を出させて、さて、くひちらしけり。布施などのすくなかりけるときは、中々に上封の書きよごさぬぞよき。障子などこそはらるれとぞいひける。されど、人、皆見ゆるして、とがめざりけり。又ある時道に老いかゞまりたる神官の、ありきなやめるを見て、手をひきつゝ宿まで送りつかはしけり。此の頃の、神官と法師との中わろきに似ぬ、まめ〴〵しき法師なりとて、人々語りあひけり。

第十六段

和歌は、をかしき事、悲しきことにつけ、見る物、聞く物よろづ心にしみ感じて、さて、おのづから口のはにうかび出づる物ぞかし。さればこそ目に見えぬ鬼神もこれを聞くときは、すゞろに哀をもよほすと、貫之

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も去るしたるなれ。昔し承久の亂に、後鳥羽上皇隠岐の國へ遷幸の時、葛田の里にて、時鳥のなくを聞食され、すゞろにすぎし都をおぼし出で給ひて、

なけばきく聞けば都の悲しさに
　この里いでよ山ほとゝぎす

と詠ぜさせ給ひしかば、それより、此のあたりに時鳥、絶えてなかずなりけるに、世くだりて、元弘の帝この國にさすらへ給ひし時、このあたりには時鳥はなきぬやと御たづねありければ、里人、そのかみ、後鳥羽院の御製にて、なかずなりぬるよし奏しければ、帝きこしめして、御袖かきあはせさせ給ひて、

聞く人も今はなき世に時鳥
　たれをうらみてなかぬ此の里

かくあそばしければなん、またなき出しけるとかや。心なき鳥だも、いみじき御製にかくは感じけり。さるを、今の世の歌よみどもの歌よむに、ことさらに題をかゝげて、心にもあらぬ事を、あながちにとり出しつゝつづくるは、いとようなきことぞ、自らも心から感じで、さてよみ出でたるにあらざれば、聞く人も、たゞにいみじう物し給ひけるかなとばかりいひて、心にかんずるもの稀なり。

第十七段

ある家に、つばくらめ巣くひて、雛をそだてけるが、ある日、いと大きなる蛇、二ついできて、身をつなぎて、梁よりかしらさしのべ、ひなをくはんとす。あなやと思ひながら、なはそのせんやうを見てありけるほどに、蛇二つながらおちにけり。いぶかしく思ひて、巣を見るに、親鳥がわざにや、巣のかたはらに、なめくじといふ虫をおきたり。蛇のいときらふ者なれば、これにおそれて、落ちけるにてぞ。さかしきわざぞと、人々感じけり。

（つゞく）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三輪田刀自を訪ひ其の言の葉より歐陽修の母鄭氏を思ふ

吉野眞澄

秋の雨いとしづかにふりて、庵をまつへる葛や、すゝきの、いろ〳〵にみたれたるつゆのしけみをふりわけて、名もうるはしき錦町にぞまぎ出てぬる。はしめて訪へる事なれど、ひとはいざ道さへ志らず、なにはともあれ心あてに行かはやゆかむと、道のは。衢そちこちと、たどり〳〵ありきしか、門高くかゝけし札に心つぎてやをら差し入り、あないを乞へど、女の人出きたりぬ。ことのよしをつくれど、内におはし、今、講義のさなかなり。じはしとあればうちに入り手をこまぬきをるに、來たる女生徒あり。歸るもあり。また、奥のかたになとやかに物いへるこゑすなり。さては講義を聞くもありなむと、いとう聞かまほしかれど、さるべきやうもなしなど、とかく思へるまに、そもはてたりけむ。足おとしづかに梯子をとゝろ〳〵におとせり。さて、此へといはるゝまに〳〵女史にあへり。さて、其の案内の人、また、出入する女子たちのふりは、或る名たかき校の女生徒にたがへて、仲々に世の女子たちのかゝみとせまほしきふしのみななりけり。やかて、四方八方の話の末に、世に女子教育といふ事いともかまひすしゝ。つまり、深くきりつめて、此にまたき女をきざみ出てむはいかなるものにかと、問ふものありと云へは、女史いへるは、女子敎育とは、學者を作る目あてに非ず、藝人を仕立つるにもあらず、只、女子の本職なる、家政を調ふるにあり。即ち父母舅姑によくつかへ、夫に和し、子女ををしふるにあり。さあれば、難にたふる事肝要なり。女史なは、こゝに力をこめて克く艱難を忍ぶ心肝要なりと、なへての女は、よき時にはさもことなる所なし。一度難事起らむか、皆たへかねて、心をかへ、はては、如何しても購へがたき、操をさへそかふるなる。今の世に、此の百難を忍びて、心

ともせざる女、果して、いく人かある。此の徳だにそなはりたらむには、ささむとも、またからむ。女子教育の指ざし所こゝなりといはれたり。さて話もながく時もうつりけれど、いとまをこひぬ。さて、其のかへさに雫のひまなくたるゝ小傘のしたに、このことを思ひつゝくれど、我國にてはさる事ながら、からくにの歐陽修の母などは、砂中の玉にて、よく難にたへたりけりなど、ひとりごちつゝかへりて、友にかくとつくれど、そは、そのまゝ女鑑にものすることそよむとあれば、われたる筆のはやしをはゝかりげもなく、こゝにすさびいてぬ。

歐陽修は、聞えたる人なり。其の母の行、ことごとくは、詳ならず。今、其の一つ二つ傳はれるをしるさん歐陽修が父は修、四歳の時に逝けりと夫人節をまもり、自ら拮へ、手づから衣食をとゝのへ、さて幼なき修をはぐゝめり。折りしも修にかたりけるは、いましの父、官に仕へぬ。廉にして、施與をこのみ、賓客をよろこぶ其の俸祿、薄きも、皆人に厚くして、餘財あらしめずして曰く、以て我累となすなかれと。故に、其の死するや、すこしも遺物なし。嗚呼、何を恃みてか、自ら守らむや。しかはあれど、妾、いましの父の、一つ二つを知りてたゞいましの、世にたゝんを待ちつゝありしのみ。妾、嫁ぎて、姑に事へまつらず。されど、いましの父の孝をつくし給へる事は知れり。いまし幼き孤兒なりしかば、妾、いましの人となるや、非ずやは、さだかに知らねど、たゞいましの父はも死せりとて必ずしも、徳のつきずで、後ある事を知りはべる。そは、妾、嫁ぎし始め、あだかも姑のみまかりて、一年も逾ねなむをりなりけり。ときをりの祭ある時には、いましの父なきしたひて曰ひけるは、祭に海山の珍物を横山のごとさゝけむも、世にましします折りに少をささけたるには劣れり。また少しあぢよきこのみなどをうれど、昔しをしのびて、泣きいひるは、母のある時は、常に乏しく、今や、かくぞかりと、みまかるまでたへず、然

り或時、燭のもとに、公の事をとる。大きなるなげきしければ、何をか、しか、なげかせ玉ふぞといへば、罪は死すべしと。妾、また、そは求めて免さるゝかといへば、求めても、得ずは死するものと、吾とうらみなけむ。もし、求めて、免されたらんには、なにをかいはむ。今はなき罪をさへ求むる人もある世とはなりぬと、顧み玉へど、うばのめのと、いましをいたき旁に立てり。指さしてまたなげかるゝは、來む戌の年には、吾死なむと術者いへり。もし、其のいふごとくど、吾はも、此の兒の世に出でむを見るあたはず。されど吾云ふ事を、心にしるして、此の兒にかたれと、常に他の童邊を敎ふるも同じ言をもてす故に。妾あまたたび聞きつるより、明かに知れり。其の外事は知るによしなきを、家に居てはをごり、矜る事いさゝかもなく、されど、凡ての事かくやありけむ。是や、其のま心より出しものか。仁に厚きものならん。されど其の徳の報いあるを知りき。夫れ養ふは、豊なるのみいはず。孝を要す、利は、凡ての物に博きを得されども、其の心の、仁に厚を要すと。いまし是をつとめよ、汝の父の遺言なり。妾は敎ふるあたはず。汝、たゞ、此の語を躰せよと云へど、修泣きうべなへり。其の後は、修高位にありとも、其の昔の貧しき時を思ひて、家を治むるに儉約をもてし、其の後も必ず、そを過さしめずして、曰へらく、此の兒、苟も世に合ふ事あたはず。常に儉かに渉からんには患あらじ、何をかかなしまむと。はたせるかな。其の後、修、遂に事によりて、海山遠き夷陵と呼ぶ所に貶ぞげられたり。されど夫人、少しもかなしみもせず、また患ともせず、所謂言笑自若、汝が家、故より貧賤なり。今日あるは、即ち、其の所なり。いましが、心安かれ。妾は固より思はずと。其の度の大なる事、男子も及ばんや。修、尚書吏部郎中となり、南京に留守たる時、疾の爲にみまかりぬ。年七十まり二。後に爵、及進號を、追贈せられける。此の時修曰く、嗚呼、善をなせど、報いざるなし。遅速時あるは

此の理の常なりと、わゝ。

競點歌（二十六回）

諏訪忠元

阿部光忠君撰

酒宴　増山三雪子

あらたむる年とおもへは汲酒も
思ひしよりは人そまされる

主意エキヽトリカネ侍ルハオノレガ淺學ナル故ニヤ

増山喜之子

さかつきの數もみつよついつの間に
うかれ〳〵てすこすさけかな

モトノマヽニテ聞エヌニモ侍ラネドのむ酒にこヽろうかれてさかつきの數もいつしかわすれけるかなナドニテハ如何

増山正治

へたてなきわか友かきとまとひして
酒くみかはしうきそわするゝ

三句まとひ。の假字はまとゐ。ト書キ玉フベシ但シ香川景樹ノ說ニ從ヒ玉フニヤ此說ハウベナヒカタク思ヒ侍レハナリ

青木修

月花にうましと共にくむ酒は
いまもむかしもはかりしられす

初二句。にモジ重ナリテカシマシ依テ二句ヲこヽろうかれてト改メタシ

南部明子

醉にけりうきをさけてふ名にめてヽ
ひる子の神の足たヽぬまて

南部利恭

ひと〳〵をあまたつとへし酒うたけ
そのたのしさは千代もつきせし

二句つとへしトアルヲつとふト改メ下句ヲたのし
さのつきすもあるかれトセマホシ

南部喜久子

汲かはすさけに心のにこりをも
しはしすまして亦ゑひにけり

水野忠敬

おもふとち酒くみかはしむつみあふ
心さへこそ楽しかりけれ

鳥谷部沼胤

をさまれる世をことほきてほと〳〵に
酒みつきするけふの楽しさ

三句言オフセ玉ハヌニヤもろともにナドシ玉ハヽ
聞ユベシヤ

相澤求

かつかたりかつくむ酒のまとゐこそ
うきよをよそに楽しかりけれ

四句うき世わすれてニテハ如何

土岐頼知

思ふとちみなうちつれてむつましく
うたけ楽しむ千代のさかつき

下句詞足ヲハヌニヤサレハ酒うたけするけふの楽
しさナド改メタシ

土岐ときは子

友むつひくみかはしたる盃の
けふのうたけそ楽しかりける

上句ヲむらきもの心へたてぬ友かきのト改メタシ

土岐いく子

へたてなき心のまゝを盃に
うつしてもくむうたけ楽しも

二句以下四句ヲこゝろのまゝに友垣の打とけてナ
ドシ玉ヒテハ如何

水野彌子

うきことも忘れてわらふひとつきの
さけは心のたまはゝきかな

上ノ句以下ヲのむまゝに世のちりはらふうま酒は
ひとのナトカヘ玉ハハイト〳〵目出度カランカ
山田謙益

酒のまぬ人もうかれつまひうたふ
おとめましりにうたけするよは
大田原一清

へたてなくしたしき友と酒のみて
あそふまとひは樂しかりけり
まとひノ假字ヲ書ヘキ由ハ七十九ノ所ニ辨ヘ侍リ
大田原千秋子

おもふとち心〳〵にまとゐして
くむも樂しきけふの酒つき
二句こゝろ〳〵ニテハ樂シキフシモ侍ラヌニヤむ
つひあひつゝナルベシ
大田原清治

あら玉のとしのはしめに千代といひ
くむさかつきの數かきりなき
二三ノ句ヲとしのよことをいひかはしトシ結句ヲ
數もしられずトセマホシ
飯田いね子

くみかはす酒のむしろにつらなりて
遊ぶこゝろそ樂しかりける

はゝその露

はゝそ

なさけと云ふものは、たい厨人の感ずるものであります。むかし、久世大和守様が、將軍のお側役をして居られた時でありました。將軍が、御膳をめし上られました。其の時も大和守はお側にをられましたが、將軍は、お汁の蓋をおとり遊ばしましたのに、中にお芋の虫が、にくたれてをりました。ふとお目にとまり、眉をひそめられまして、お箸にて、其の虫をおはさみ遊ばして、大和守をおめしになりました。はつと答へ



まして、大和守は、お傍へすべり出でますと、將軍は、其芋の虫を、これこれとて大和の守に出たされましのを、之は、誠に、結搆のものをお手づから、ありがたうぞんじますとて、手の上に戴き、幾度か拜して、そのまゝ、ぐつと食べてしまひました。上は、芋の虫を見せて、まかなひ、料理人どもの不行屆をお見せなされましたを、大和の守は、たゞ上が食の一ばんを分かち與へられたやうにして、虫をも知らぬ顏に食べて、下の災難をかむいました。將軍樣は、之を御らん遊ばして、大和の守は、われが、虫をとり出して、不行屆を見せんとしたるを、鹽梅を見よとのやうにとりもちて、役人をかむひけるよとて、其の仁心を深く感ぜられまして、ひそめし眉も、そのまゝお開きになりて、役人どもをもおとがめもなかつたのを、其の日の御膳番、御料理人の者ども、之を聞きまして、のちのちまで大和の守を生神のやうに思ひましたそうな。人は、僅かの事にも目かどを立てたく、又、上にへつらひのため、知らぬ事まで、とり出でゝ告げ口しやうとする人がありますが、これは、わるい事です。また、むかし、井上河内守正利と云ふ人の家では、毎月、晦日毎に、家中のよしあしを書きつけて、さし出

さるゝやうの申し付けがありました、それ故に、晦日毎に、その書きつけを箱に入れおき、年のくれに、これを開き見る事に成つてをりましたが、正利の世になりましてからは、之を見ず。大晦日に封のまゝ燒き捨てましたのを、長臣津川權太夫と申けるが、目付どもが書き上げ候書きつけ、一度も御らん遊ばさずに、おやき捨て遊ばすは、どう云ふ御思慮にて居らせ玉ふや。目付ども聞き候はゞ、本意なくぞんじ奉るでありましやう。一度、御らん遊ばされ、ては如何と申上げました。正利はしづかに、權太夫にむかはれ、目付どもは、其の役人なれば、見る、見ざるはかまはず。なれど、定めて善い事は少なく、わるい事が多からんと存んずる。さりとて、仕置に云ひつくる程の事はあるまい。もし、さやうの大惡あらば、目付のものゝ申すまでもなく、我等の耳に入らずと云ふ事はなし。さるに、家來の小惡を知りて、不行屆と思うてめし仕へば、其程のにあらずや。故にかくはやき捨つるなりと申されました。權太夫はじめ、家臣一同感じに、感じまして、みな忠義の心あつく、此の君に仕へましたそうな。又、和氣の清麿の姉君の廣蟲は、光仁天皇に仕へまして、もろ〳〵官人たちは、人をそしり、告ぐる聲、やかましさを、廣蟲のつかさどりてより、云々の聲は絶えたりと、天皇も深く感しられましたそうな。實に仁と云ふものは人として備へねばなりませんものと、はゝそも、深く感じました。

しのふの露（下）

井上頼文

昨日までも、今朝までも、壯健におひたてよと、祈りつる事は、さながら夢のやうにて、

家の名もわか名もたてよますらをと
　かきいたきつゝうたひけるはや

すゞやかなる顔ばせ、ものいはんばかりの口もと、い

と愛らしくて、みまかれりともおもほえず。

たましひ歸れ　いとし兒と
聲をかぎりに　さけへども
いらへもなさず　目をとぢて
ねふれる姿に　ことならず
わらふが如き　かほばせも
ゑめるか如き　くちびるも
けさ見し時に　かはらねば
目をやさますと　かきいだく

いくたびかいだきあげつゝながむれど
　いつまでさめぬねふりなるらん

めでうつくしみし事ども思ひいでゝ

朝には　かしらかきなで
夕には　かきいだきつゝ
呉竹の　よにぬけいでゝ
折竹の　さきくまさきく
家の風　おこせますらを
家の業　おこせますらを
汝をおきて　たからやはある
白金も　黄金もなにそと
昨日まで　はぐゝみたてし
眞玉なす　うつくしき兒が
咲花の　ゑめるくちびる
照月の　さやけきおもは
顯にも　ゆめにも見えて
忘らえなくに

わすれてはわか兒の聲とおもはれて
　よそのなくこに目をさましつゝ

をさな兒のなく聲すれむわが兒かと
　われをわすれていでゝ見るかな

まくらへの燃火かゝけうまいせる
　ちごかれもわをいくたびか見し

いくそたびおき歸りつゝいとし兒の
　ゑめるねすかたなかめたりけん

去年は、稲子をうしなひ、今年は頼直をうしなふ。あな、あぢきなの身や。

千五百秋まで　みのれよと
　おふしたて丶し　稲子はも
こその葉月の　夜嵐に
　葉末の露と　消えうせぬ
すめらみ國の　ますらをと
　やしなひたてし　をのこはも
このふみ月の　ひるつかた
　天路をさして　いでたちぬ
初老ちかき　身をもちて
　ふたりの兒まで　さきたてし
おやの心の　かなしみを
　かみはあはれと　おはさずや
いのちも長き　ますらを丶
　さつけたまへと　ぬさおきて
いのりいのりし　ねきことも
　うけたまはぬか　うらめしや

となん、うちいでらる丶ぞ、はかなき。

下田義天類ぬしより、ちごの幸なくなれりしをいたみて

それと見し庭のうたかたかつ消えて
　袂にか丶るのきのさみだれ

山岸光徹ぬしより

なけくそのをきその風やそはるらん
　ふく音たかし伊勢のはま荻

小田古香ぬしより

露のよの光をみせて蓮葉の
　うへにくだけし白玉あはれ

中西健郎ぬしより

飛鳥のつはさありせばたち歸り
　さびしき宿をおとつれてまし

坂倉廣胖ぬしより

七月半らはかり、月、いとあかき夜、井上ぬしの、愛

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

兒を失ひたまひて、露けき窓にてもらせたまふを思ひやりてよめる短歌三首。

ありし世を思ひもいでゝ此の月に
　君いくそたひそでしぼるらん

常ならむあかしとめてん此の月を
　露けきまでにきみなかむらん

袖の露はらひかねてやなかむらん
　月もあさちにふけわたるかけ

三輪まさつらぬしより

つけ越る　文のはしめを見し時ぞ
嬉しかりける
あれませる　若子をゝしと聞きし時ぞ
嬉しかりける
そのみこの　病てはかなく
黄泉國に　旅立ぬると
その文の　半をよみて
みこゝろを　思へど
　いとゞ
ますらをも　袖ぬらすなり
桐一葉　秋風も　また吹か
なくに　散るとは　夢か
夏の日の　露れきあへぬ
朝顔の　花にも似るか
撫子の　しほれにけりと
聞そかなしき
なてしこの　散りにしことは　惜けれど　根さへ枯
すは　またも咲くかね

房州日記（一）

柴田しづえ子

人氣多き、江の島大磯などは、避きて、おのれは、常に、人跡まれなるところ、水は清く、氣爽やかなる深山の奥、さては、海つらなどを好む心にしあれど、ことしこそはと、三月の頃より、歸る雁の、便りにまかせ

て、地方の友のもとにいひやりしに、初雁のたよりにそへて、安房の國北條の里なる、友のもとよりしひてうながしおこせつれば、おのれかねてより、ものに志るせるを見て、鏡が浦の、眺望あることをしれゝば、この都會の塵を、しばし、のがれむやと、秋風の立そめたる月の、二十日ばかり、そが用意をもとゝのへ、母をはじめ、古郷よりたづね來し家族うちつれて、草の庵を立ち出で、靈岸島の、乘船場に、うちむかひつ。照る日かげもゆるが如き、海上の暑さは、わびしかるべけれど、夜船こそとて、その日午後十時四十分、發の滊船にのりこみたり。折しも、十七夜の月、さしのぼり、浦々の、ほのかに見えわたり、海上金龍のたゞよへるが如し。かの二千里の外といひけむも、かくやとおぼえて、めもはるばると、見渡されたり。うちむれつる男子どもは、甲板こそよけれどさけべど、女子小兒までみなのぼりつ。右に品川の夜景を見て、滊船は次第に進みゆき、横濱の沖にかゝらむとす。よもすがら漁りする舟の、かゞり火は、水に映きて、影冷かなり。遠近に砲臺の見ゆるに、ありし昔のしのばれて、

黒船をとめしとりでに月さへて
　　昔のかげぞ猶のこりける

など、くちすさびつゝあるうちに、北の方より、一群の白雲、おそひきて、あなやといふまに、はや月のおもはうちおほはれぬ。海の上おぼろになりて、こゝろもとなし。風さへ加はりて、雲のたゞよふさま、水の流るゝよりも、早し。船は、左右にゆられたり。女子小兒らは、うち伏したり。さるに、おのれは甲板に立ちて、あたりのけしきを見れば、船はゆられながら、進むまゝに、はや横濱の海岸は、はるか、後になりぬ。前には、富津の燈臺の見えて、海の上かすかにてらされたり。これに向ひて、右の方には、觀音崎の燈臺、かがやきながら、風さへ、浪さへ、いよゝつよく、いよいよたかく、船はいまはた、左右上下にうごきはじめ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

舳の方なる、ビールの瓶、梨子、林檎などは、艫のかたに、まろびきぬ。かの土佐日記なる男子、童の歌も、かくやと、おぼえて、心ちもまどひぬ。男子等の、月に、うそぶき、浪に、吟せしも、伏しはじめぬ。まして老母女子などは、下なる室に、歸らむ勇氣もうせ、たゞ打あへぎゐたり。さるに船子どもは、晝の疲をもいやさんとにや、高鼾して、伏しまろびゐたり。この時しも、船頭の方より、ひゞきわりて、何とかや、英語のくねりたる、暗號を報じ來りぬ。船子おどろきさわげど、錨は、やがて、おろされつ船。は進行をとゞめたり。乘客なる男子らは、いかに、させしかととふ聲の下より、船長答ふ、さなり、おどろき給ふな、げにも、此の内海には、毎年二八月の両月には、かゝる、荒海の日は、一度二度あるなるに、けふしも、その日にあたりたり。されど、いまは、海のたゞ中にて、いづれの岸にも、へだゝりたり、風は、逆にふきあれ、潮は、はやく、浪、たかし。まして、此の所より進まむには、猶、浪さへ、高くなり、さし汐の、時刻にもなりぬ。いとあやうし。こゝに、二時間あまり、とゞまらど、風はをさまり、潮流も、おなじ方向に流れむ。心靜かにまち給へかし。時のよろしきを見て、進行すべしといふ。またこゝは、いかなる所なるぞと、とへど、羽田沖なりといふ。風はますます甲板をふき拂ひ、ほどしらさへ、折れむばかりになりぬ。船子はいそぎて、そを横へぬ。雨さへ降出ぬべくなりぬ。小兒らのあやふくて、おのれは帶もて、欄干にむすびつけたり。老母は息もくるしげに、はやたすけ給へかし。陸に上げ給へよと、うち呼びぬ。さらぬだに、夜の風身にしみて、肌は冬の日に、水かゝりし如く冷えわたり、ふるひはじめぬ。船子らの、毛布を得んとて、立んとすれど、吹き倒されぬ。船は左右前後にゆすること、絶えず。されど、おのれも、せむ方なく、老母はあたりの、毛布肩掛にのせまつりて、やうやう、いだきあげたり老母小兒などのけしき、生ある人の如く見えず、陸

に上よ上よと、うち泣きぬ。かくするまゝに、風はすこしゆるびたれど、浪はますます高し。錨を下しゝ時は、十二時四十分なりしが、今は二時四十分にもなりぬ。二時間もすぎたらむと、わたりにうづくまれる、船子を呼びて、はや進行せよ。おのれらは、今一時間も、かくてあらんには、病をも引き起しつべし。絶息する人さへあるべしといへば、船子は何にくれと、もとめいでゝ、助けくるゝも、風さへ止まず。この潮流に逆びて、進めんか。船はますます流されむ。今こそしまち給へといふ、聲すらあらしのおとに、よくもきこえず。いまはいよゝ、こゝろもとなくて、貫之朝臣ならねど、神のこゝろに、そむきし方に、船いだせるにやと、そゞろ涙にめもくれて、

わたつみのちぶりの神も心あらば
我ゆくさきの汐路あらすな　（續く）

萩の下露（完）

小倉山人

おや／＼新さん、まア大變な仕かけぢやないか、爾して、其處邊に、何を植ゑます。と母親、少し笑みを含んで、椽側より差覗けど、新太郎は頬冠したる男には色の白過ぎる顏を振向け、これも莞爾打笑みて、この秋は庭一面に萩の花を咲かせる積りです、わたしは華美な春の花より、温順い秋の草花、特に優しい萩の花が大好きです。もし不肖が阿母様より前に死んだら、秋には、何うか萩の花をどつさり位牌に供へて下さい。おゝッいやだ、いやな事をお言ひでないよ、それで無くても一人子なれば、お前は知らぬか知らないが、わたしでも家嚴様でも、コホンと咳嗽を、一ッ爲れても、わるい病氣の血統があるから、もしや、其病ではあるまいかと、ほんとに胸がヒヤッと仕ます。と笑顔はいつしか泣顔に變りぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

孝心深き新太郎、成程、これはと氣に咎め、阿母樣御免さない、下らない事を喋つて、飛んだ御心配を懸けました。奈何してこんな事を云ひましたやらと我れながら譯がわからず、無心に飛行く白雲を仰いで、深く嘆息す。

最う萩などは植ゑなくとも好いではないか、秋に成つて萩が見たくば、又、その時は三人で、百花園にでも出かけましやうに、たまの日曜日ではないか、早く足を洗つて奥に行つて、家嚴樣の所でお茶でもあがれ、家嚴樣は、今佳い長歌が出來たと云つて、太くよろこんで在らつしやたよ、昨夜氣がゝりな夢を見た上、今、又、いやな事を聞かされたので、わたしは變な氣持に成つたが、襦袢の袖口目にあてゝ、もし、そんな事にでも成つたならば、それこそ儂や家嚴樣は。と取越苦勞は、誰が爲る、わかい間に苦勞せし人に、多くは此癖あり。

新太郎は故意らしく打笑ひ、又、阿母樣は餘計な取越苦勞を成さる、わア誰か來て、少し手傳つてくれないかなア、これは、中々思つたよりは、骨が折れる。と再び鍬を取りし所に、御免なさい、叔母さん御機嫌好う。と嫣然笑うて入來るは十六七の美艶しき娘なり。新太郎は、早くも、その聲聞きつけて、鍬を杖に振向く途端、これを夫婦にしたならばと思はるゝ二人の顏は圖らず合ひぬ。新太郎は澄し込んで、美代ちやん、手桶に、水を汲んで來ておくれ。と物を攫んで投出した樣に言ふ。

母はお美代の美しき顏を視て、これに樂しき未來を想ひ、俄に心いそ〳〵して、おもはずも打微笑み、あの無愛相な物言ひ、お前を見ると何か用事を言ひつけるのは彼の子の癖、美代ちやん投つて置いて宜いよ、今日の島田は大層好格搆に出來ましたね、どれ、其方に向いてお見せなさいな。

新太郎は自烈たさうに、島田などは奈何な格搆でも宜いぢやないか、早く水を汲んで來ないか、お前は眞個

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に鈍馬だよと、睨みつけて舌打す。視ればその人は古手拭に頰被して、稽古着に身を固め、鍬を取つたる可笑さに、お美代は他愛も無く笑ふ。さア早くと、叱るが如く云ひ捨て丶、新太郎は切々と土を掘起す。何を成さるの、そんな所を掘起して。と問ひつ丶お美代は椽先に立出づる。萩だ！萩だ！こ丶に一面萩を植ゑて置からと云ふのだ、早く水を汲んで來なければ、秋に成つて、この花盛を見せないぞ。叔母さん手桶は、あア、こ丶に在りました。とお美代が庭下駄はく間も待たず、跣足で、跣足でそんな、手鈍い事では大事な萩が枯れて仕舞うよ。

善くまア小言を云ふ人だね。と母親は笑ひながら、左も樂しげに二人の爲す所を打瞶れり。

やがてお美代は、手桶に半分水を汲入れ呼吸苦しげに、顏紅うして、戀しき人の傍に運びぬ。新太郎は、此處にと、言ひつ丶一寸見て、たッたそれッぱかし。だッて一杯は持てませんもの。大飯は食ふ癖に。アレいやだ。とお美代は涼しき目元に睨む。新太郎は手早く手桶の水をあけて、さア早く、最う一杯。と手桶を投遣る。お美代は手桶を取つて行き、新太郎は振返り、そんな鈍い事ぢやいかん。跣足に成つて。尻を引卷つて。あはれお美代は跣足に成りて、裾を端折り、手桶片手に踏出せば、美代ちやん大變なお役目を言附かつて、御迷惑な次第だねと、叔母さんは御椽側より、興に入つて見え給ふ。

お美代、今度は辛うに、手桶にゆらりと水を運びぬ。新太郎は、水の量を盗み見て、今度は一杯汲んで來たかい。御覽なさい。とお美代は少し得意なり。新太郎は、切々と植ゑつ丶、他に勝れて大飯を食ふんだもの、それ位な物が持てなくて。アレ又あんな厭な事を。それでは、今度は好事を言ふ、わしが斯うして植ゑて行くから、お前は後から水をかけておいでな。はい。とお美代は柄杓を取つて、新太郎の植ゑ行く後より、或ひは薄く、或ひは厚く、注けゆく水に太甚しき斑あり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、その手際極めて拙し。新太郎は柄杓を追取り、お前の遣方へ極めて拙だよ、斯う云ふ梅鹽にかけるのだ。そりや何うせ貴郎には敵ひませんわ、來年は農學士にお成りなさる仁ですもの。拙者の事は、何うでも宜いよ、今言つてるのはお前の事だ、最少し力業に馴れないと、百性の家にお嫁に行つても、盲縞の着物に赤襷をかけて、手拭を被つて、脫引や草鞋を穿いて、肥料車の後押は出來ないよ。アレ、又、彼樣ないやな事を。

隨分わるい事を言ふ人だね、美代ちやん、最う手傳つて遣るのをお止しよ。この聲は椽側より笑ふ聲につゞいて聞えぬ。

いやがるを面白がりて、調戲ひながら新太郎は、桓根に長く萩を植ゑたり。

既うお了ひなの、未だ一株ありますよ。とお美代が指し敎ふる時、兩手を腰に奥より立出で、眼鏡越に庭を見渡し、新太郎、何を植ゑましたと、尋ぬるは、己に人間定命の土俵際なる年比の、髯に半分は霜降りし老躰なり。

この聲にお美代、先づ振向きて、嫣然笑うて腰を屈め、叔父さん御機嫌善う。

老人は、尙、椽側に進み出で、やア美代公、お前も御加勢か、いや二人とも勝い身仕度だの、新太郎、何を植ゑました、萩です、萩をどつさり植ゑました。いや、それは何より有がたい。家嚴樣この秋は、お歌をどつさりお詠みなさい、貴方も、萩はお好きでしやうね。あア、萩は、誠に好物だよ、萩を見ては、自から歌も出來る。

さア、最う、一株殘つて居るが、これは何處に植ゑたものか、井側の所にでも植ゑてやらうか、お丶左樣だ、左樣だ、家嚴樣。何かの。

一むらの萩のさかりにうづもれて
垣根の井戸はくまれざりけり

と云ふ歌がございましたね。それは景樹の歌だと思ふ。

それでは、是は井戸側ものだね。と新太郎は呟きながら、殘る一株を井戸端に植ゑぬ。

家嚴様、これで、悉皆植りました、今にこの秋は見事に咲いて、

おほしたてし庭の萩原咲きにけり
鹿の音さそふあきかせもがな

と云ふ様に成ります。はゝゝゝ、いや何うも御苦勞、御苦勞。

先刻より、暫く見えざりし母親、この時、再び椽側にあらはれて、れや既う、悉皆植りましたね、美代ちやん、何うも御苦勞様、さアお茶でも一ッ喫つて下さない、散々使はれた上に色々な事を言はれてねえ、眞個に引合つた話ぢや無いね、おほゝゝ。

* * * * * * * * *

可忌事は謂はぬものなり、新太郎は、其後間無く風邪が原にて病の床に打臥しけるが、醫薬少しも効を奏せず、夏の氷の滅え去る如く、目に見えて、次第〳〵に衰へけるが、酷暑に激しく打弱りて、軒端の桐の葉に先達つこと幾旬か早く、老いたる父母の心遣して、烏わびしげに、啼く朝、父と母との手を手に取りて、何うぞ、御身躰を御大切に………。美代ちやん亡跡を賴みます。短き言葉に千萬無量の思ひ長く、これが死別か、あはれ閻浮の。跡には起る三人の悲しき哭聲、亡者も嘸や心殘らん。

* * * * * * * * *

跡に殘れる三人は、涙の中に時日を重ねて、今宵は既に亡者の五七日の逮夜になりぬ。時は是仲秋三五の夜、月は大空に澄み渡りて、白露冷々、虫啣々、特更哀は庭一面に枝もたわゝに、咲亂れたる秋萩の花、あはれ、誰の手にてか植ゑられけん。彼時は彼様であつたが。と萩に對してお美代が泣けば、わたしが死んだら位碑の前にと云つたのを私は不吉と叱つたが、彼時虫でも知したものか。と常時を忍びて力無氣に、香の烟に卷かれたる、位碑の前なる萩の花に振向く老母が目

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にも一杯瀧成す涙。このまア見事に咲いた所を唯一目でも見せてやりたいな、あア彼子は死んだのかなア。とおなじ思ひに父なる人も奥歯を噛み閉め、見渡す萩の花の上に、月の光は晝の如く、風吹かぬ間をおのが命に、果敢なく結べる露の白玉、哀を添ふる虫の聲々、泣く二人より「泣かぬ父なる人の胸、ヂッと堪へて口おもく、泣けるお美代に床を指し、彼硯と短冊を。はい。と泣々立上り、落つる涙を墨に磨り、目を紅うして前に運べば、おもさうに筆を執り、あア世の中は實に果敢ないものであるが、如斯悲嘆に遭はない人は爾うとは知るまい、歌でも、一首詠んで見やうか。

かぎりなき世なりとおもふ世の人に
　見せばやにはの草の上の露

水莖の跡鮮に書きつけて、お美代奈何だの、一首讀んで見てくれい。

（をはり）

意氣（三）

白魚女史

思へ、考へろ、決氣せよ、ぐづ一め、のろ作奴、掃除夫奴と朝に、ばんに、百千度のゝしられ、よれど、さはれど、じれつたがらるゝ、しびれし手にわれよとぞかりの父のしもと、身にしむは、たゞ、母にて、あれも病ゆゑ、一作堪へてくれと、かげにはいつも涙、おふくろの甘き菓子などそつととらするを、一作は、それもまたかなします、恨みもせねば、泣きもせず、怒りもせねど、口がへしもせず、口惜しとも、殘念とも思ふやうすもなし。馬の耳に念佛とは貴様の事、馬とて、かうまでのゝしられ、かうまでたゝかるれど、ひびひん位は、どんな駑馬でも答へやう、おろかなる、ぢれつたい、のろい牛さへ、これはどのしもとにあたれぞ、はしつこくなるときくに、じれつたい、じれつたい、己がこんなにさへならねぞ、今一しんだい起して

虎や狼や、狐に、みせてくれんものを口惜しい、殘念と、さらぬだにふるへる身を、もだへにもだへられても、さばかり感せぬ子の一作、もちろん、親にはどれほど云はれても、感せぬは子の情なれば、一作は誠の無神經、他人にもおろか、ぐずあはう、たわけとさげすまれ、馬鹿にせられしかば、怒るは十度に一度、それも、深く感じて腹立つにはあらざりしを、花子がいたづら言、如何なる神經をかうちけん。之や思ひのはじめ、朽木、糞土の垣、いたく身にしめり、思へば思ふほど身にしめり、其の夜はねぶらざりけり。翌朝はいつになく起されず、例の入江に至りぬ。門を過ぎぬ。又、見えたり。默して、此方を見たり。妹の傍らに來りしを、顏見合せて、ふと笑みたり。一作、思はずも、我と我身をかへりみ、我みすぼらしきを感じ、顏をあかめてすぎぬ。あはれ、見まくもなり、見ともなき思ひに、入江にも行かず、一月は家にしづみぬ。見まほしき、見まほしき思ひ、思ひあまりし夕つ方人の門邊を過ぐれば、我門の紅葉ふみ分くる音するなり。泣ぬ鹿かと障子開きし花子、又びたり、鹿の上に馬の字のつきたるものなりきとて笑ふ。一作、また、いたく耳をうちたり。そのまゝ家にひきかへり、鹿の上に馬、人は、己れを馬鹿と見たるよとて、椽にとび上り、小さき机に喰ひつきて泣きたり。母は之をいたはり、一作何とせし、遂に怒りし事もなきそらが、なくはよくよくの事、誰れに如何なる事をされし、一作聞せよ、何もされぬと、何もされで泣く事が何ある。あゝ、あろふ、あろふ、それは隨分あろふが、堪へてたもれと、日來より不びんと思ふあつき涙、はら／＼とふり注けば、一作は反つてじれつたく、うるさし。母上、もう何も云ふて玉はるなとはねつく。一作、つく／＼と思ふに、人は、さのみ高貴と云ふにはあらねど、己れとは、月とすつぽんの差、殊に學問もあり、自分を省れば掃除夫、日に廿七八錢の日雇。身分はいやし。財産はなし。まして、朽木、糞土の垣と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さへ字さるゝもの。かけても及ばぬ戀と思へば、にはかに賤しき身のうらめしく、かなしくぢれつたくのみなりて、母のよる毎にれてこりつけ、父の叱る毎に口がへし、一升袋は、やつぱり一升、掃除夫は何處までも掃除夫、よしや、日に、五錢六錢の錢をためしとて、何の財産になる。例へ日に一卷、二卷の書をよみしとて、何の世に出る杖とならん。とても我には拙き運、ゐる事ならぬ谷の朽木よとて、それよりは、一層勉强もせず。酒をのみ、遊びに行く、さらでもかすけき朝夕のけぶりは、いよ〳〵たえ〴〵。父はます〳〵怒る、母は泣きてくどく。くどくを一作はうるさしとて、つと飛び出づる。行くさきは銘酒屋か、矢場か、道ならぬ借財さへ積るに、母親は悲しく、留めてもとまらぬ子が、袂をひき、袖をひかへ〳〵一二丁從ひ來て、思はずも聲立てゝ泣く、彼方に、花子姉妹

誰れにより翅は生ひしつむくらめ

と花子例の物のかげに入りてうたふ。掃除夫、ふとおどろきたり。つむくらめ、又、我をば不孝の者に例へけるよとて、あたりをうち返す。折りしも、二月半、何處の家の山か、野か。こぼるゝ梅の初花、ほうほけきやうとまだうちとけぬ鶯の聲、世はのどかなりけり。姉妹はかげより、かげに入り、姿は見せず、家に走りかへりて、笑ひてよみ、興ありげに、母に語る。花子、もうよき程に惡戲はせよ、其方も、今年は十六歲、いつまでも子供にはあらず、やがて梅の實も落る期近もきに。人になまいきとそしられなど、何なさる、面のあたりにはぐうの音も出ぬ意氣知なしの癖にとて、母親にたしなめくれ、花子も雪子も、又、かへす言葉なく、空には、まだ咲かぬ花の吹雪を、早くも、顏に散したり。げに花子、ぎやうぎたる二八のはじめ、紅樓富家の女にはあらねど、はや、媒せんとする人あり。たつて娶らんと云ふ人もあり、大學の生徒にして、父の位も卑くからず、財產も、十分に。まして、男其の人は、立派に、長け高く、才子にて、大學中間にも出來よき方

と開けるが、花子を、是非にとて寫眞をさへ送りたり。花子はかゝるとも知らず、寫眞とりて、こは誰れ。にやけ書生奴としらずそしる顔、母につく〲守られて、我からたしなみなく思ひ、さゝぬ紅を顔にうかめしが、いたづらものは、よく母樣にらまるゝよとつぶやきて、庭に下りれば、妹もつゞきて、木の間をくゞる蝴蝶のかげ、たわひなし。



愛しき人々のために

まにく庵

明日の、學校の仕度が、すみましたから、
太郎サンも、操子
サンも、
此處へお出なさい。
今夜は、おもしろい
御話を、聞せてあげましやう子。



一日、小羊が、水を飲まうと思ッて、山の麓をながるる川のところに、參りました時に、狼も、丁度亦飲まうと思ッて、山から出て來ましたとサ。

狼のことですから、此の小羊を見ると、モウ、食ひたくッて、食ひたくッて、堪へられません。顔と顔とをあはすと、直ぐに、

如何いふ理由にしたら、是を食ふことが出來るだらうか。

と、其の理由を作ることを、考へました。ソコで、いよいよ仕事を始めました。先づ、むッとした顔つきして、

アヽ、お前サンは飛んだことをなさる。マ、如何いふ氣で、私の川の水を飲まうとするばかりか、私が飲まれもしないやうに、水を濁しなさる。

と、いひがゝりを、いたしました。小羊は、吃驚しまして、

如何いたしまして。貴方樣が、さう仰しやるけれども、私には、ドウモ合點が參りません。貴方樣は高い地に居

らしやいますシ。水は、又、貴方様の方から私の方へと流れて參りますのに。マア。

と。物靜かに、辯しました。狼も、これではいかぬと思ひましたから、今度は、

勝手にしろ。ソンナ事は、如何でもよい。ダが、お前は、去年、仲間のものに、蔭語をきいて、大厨、拙者のことを惡口したそうだな。拙者は、タシカに知ッて居るぞ。

と、怒鳴りつけました。小羊は、ふるひながら、

コレは亦狼の旦那樣。去年と仰しやいますれば、まだ、私の生れぬ前の事で御座ります。如何してソンなことが、旦那樣………。

ナルホド是れは今年生れの小羊で御座います。モウ如何しても、口實か出來ませぬてしたから、狼は本性を顯し、口を大く開げまして、ジリ〳〵ッと、小羊の方へ寄りました。

コリヤ、こわッぱめ。手前が言ッたのでなかッたら、屹度手前の親が言ッたのだらう。手前が言ッても、親が言ッても、同じことだは。

と、可憐サウに、遂々、小羊を食ッて仕舞ひましたとサ。

如何な惡い事でも、爲やうとおもへど、ソレ相當に、理由は、つけられるものです。

理由があるからと申して、惡いことなどを敢へて爲るのは、誠にいけない事で御座いますヨ。



雨中虫　　久我建通

夕しぐれふる野の末の小篠はら
　しのにみたれて虫のなくなり

千代野尼　　高崎正風

碎けぬと思ひしつきはやがてその
こゝろの水のそこにやどれり

夜虫　西三條實義

窓ちかくなくむしの音に秋の夜の
ふかき哀の身にぞしみぬる

雨中草花　宮地嚴夫

百くさの花のさかりとむらさめに
ぬれても野邊に出てこそみれ

夕虫　北郷久政

くれわたる野への萩原つゆみちて
虫のねしけくなりにけるかな

枕上虫　阪正臣

なく虫のこゑ面しろみしきたへの
枕はとれとねられざりけり

石川丈山　小出粲

渡らしの底のこゝろはしらねども
せみの小川の名こそきよけれ

月夜に船こぐかた　千葉胤明

うらやまし月の夜船にのるひとの
指てゆくへはいづこなるらん

庭秋草　大口鯛二

ことさらにうゑぬ草まで花さきて
庭おもしろきあきにはなりぬ

徳川光圀卿　遠山英一

史の上にだてしいさをは小筑波の
やまよりたかく仰がれにけり

野萩　岡部譲

まはぎはらいさ宿からむ春の野の
すみれに寐たる花のゆかりに

吹雪濱　諏訪忠元

岩かねにくたけてなみのちるみれは
ふゝきの濱の名こそたかはね

猿叫岑　足立正枝

山風のふきの絶間に聞ゆなり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あはれましらの子をれもふ聲

野萩　石川彦太郎

さきにほふ野べの千種に一しほの
色をそへたる秋はぎのはな

安養尼　佐々豊水

白なみの立さわぎてもさくかゐは
心の月のひかりなるらん

月あきらかなる夜友きたり　近衛貞子

初かりのこゑきくよりも嬉しきは
つきにとはれし友にぞ有ける

水上月　前田朗子

瓢もてくまんとしたるいさら井に
おもひもよらぬ月そうかへる

山路秋　栁原愛子

うなゐ子か落栗ひろふこゑすなり
山さとちかくなりやしぬらん

秋雨　小池道子

降つゝくあめはれぬまに秋の日の
くれやすくさへなりにける哉

秋木　松平健子

おくやまのいてふの梢いろつきて
秋のふかさもしられぬるかな

望遠帆　岩崎寧子

いさりふね追手をまちて歸るらん
あやしの帆かけ沖に見えたる

秋山路　坂田泰子

家つとにをりてやゆかんわし引の
やまちのきくは今さかりなり

虫聲夜多　松平淑子

さらぬたに寐覺かちなる秋の夜を
繁くきこゆるむしのこゑかな

山影寫水　三宅龍子

夕つく日入てのちもさわみづに
うつろふ山のかげのさやけさ

國旗　河村重子

門ごとにかゝげて祝ふ日のみはた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くもりなき世のためしなるらむ

雨後萩　土岐いく子

村雨の名殘の露に打ちふして
しつゑたわゝにさける秋萩



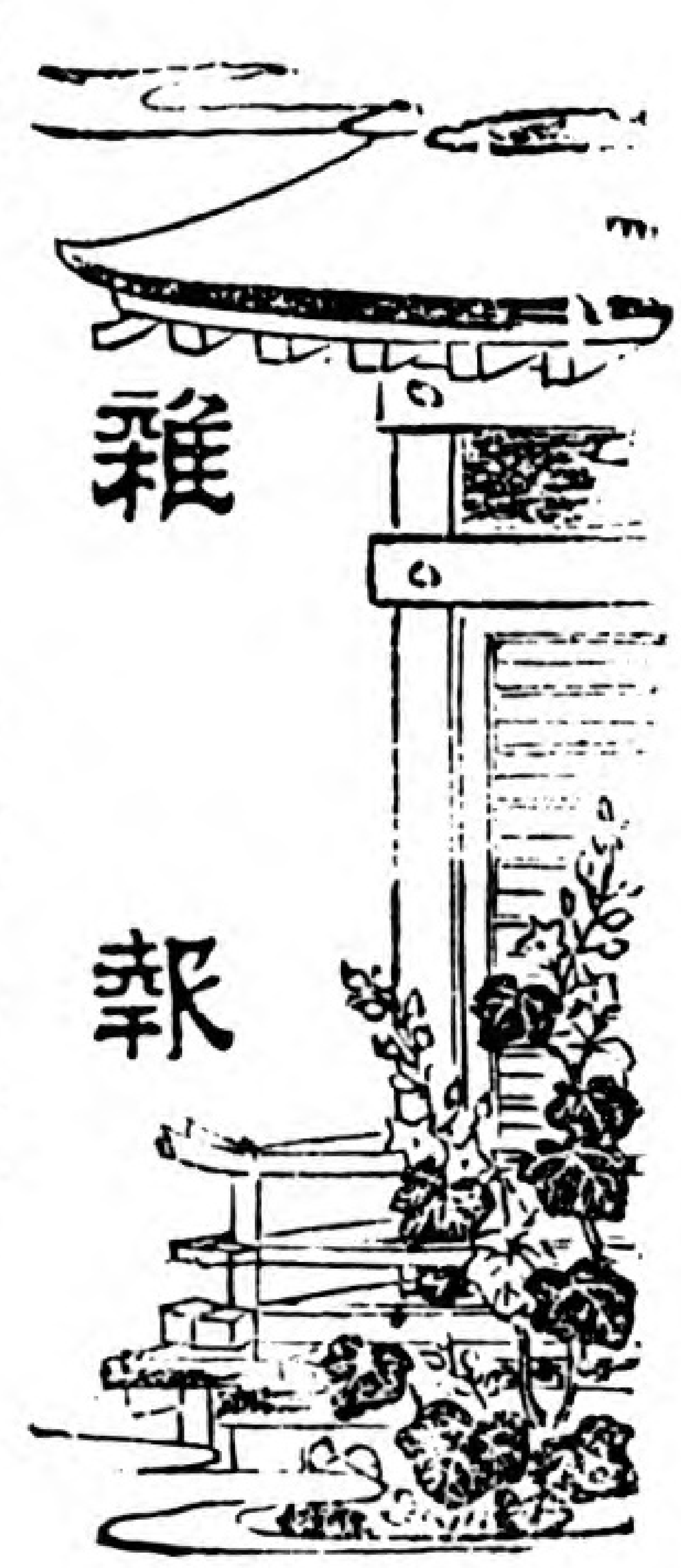
海水浴の記

三輪義方

はなれ、小じまのおもしろさを、眺めやりつゝ、岩ま傳ひに行けど、ふと打よする波に、引かれて、足のたちども、たゞよはし、さぞれ、それはた、心ちよくもおぼゆるまゝに、ゑらずしらず、五六町が程は來にけり、こゝなん、海汐あせる處なる。磯の崎さし出でたるあなたは、浪高く、水も深し。こなたは、波もなごやかにて、水も淺く、鶴はぎにて、おりたちぬべき程なり。男どちは、たふさぎ穿ち、高き岩の上より、その深きに、おどり入りて、浮き沈むなり。女どちは、涼しげなる浴衣姿に深やかなる菅笠きての淺みに、はひかゝみさまよひありくに、十二、三ばかりなるが、大魚のやうにて、およげるも、腹は水の底につく程なれば、あやふげもなく、いとこゝろゆくげなり。げにいはけなきどちは、水いかけあひなど、そばれあへるもらうたうなん。やゝとほきところに、二人みたり、打かづくを、いざりする海人かとおもひしに、よく見れば、うるはしき髭おほしたる、おもひかけぬ心ちするに、そが中に、こと國人の打まじれるもをかし。照日にやかれたる砂のうへに、まろびあくるは、そがいみじう、身の藥になるとぞなん。かうて、日頃經ぬれど、身もすくよかに、みな月ふ月のあつさしらで、過すはさるものにて、なべてよの、あつかはしさもわすれはてぬとぞ。



雜報



●聖恩無疆　曩に、臺灣に派遣せられたる佐々木侍從武官は、去月十三日午前十一時二十六分、無事臺北に着し、總督府に於いて、兒玉總督に對し、左の叡旨を傳達せられたり。

一、此度の暴雨風被害の實況

二、軍隊現今の狀況

三、上件に就き、視察を遂ぐべし

尙、之に加へて、宮內大臣より、左の通達あり。

去月、上旬、其の管下、非常暴風雨の爲め、被害尠からず候趣　愍然に被思召

天皇　皇后、兩陛下より、目下、救恤の補助として、金四千圓下賜候條、此段及通達候也。

明治三十二年九月六日

宮內大臣　子爵　田中光顯

臺灣總督男爵兒玉源太郎殿

兒玉總督は、深く、　聖恩の無疆なるに感激し、島民、亦、　兩陛下の隆恩に感泣しつゝありと云ふ。又本月中旬北海道函館大災にかゝりし趣を聞召され天皇皇后兩陛下より罹災者御救　恤として金二千八百圓を下賜せさせ給へり。

●東宮殿下の御下問　伊藤侯、去月二十日、葉山にまします　東宮殿下に伺候したりしに早速拜謁を賜り、さて、備さに、政治憲法などに關する御下問あらせられたるに、侯は、一々奉答の後、午餐の御陪食を仰付られたり。

●同殿下の行啓　未たさたかならねと、ほのかにもれ承る所によれば　同宮殿下には、近々御西遊あそはさる由なりと。はたしてしからは、此の度は海軍少佐の御資格をもて、沼津御用邸より、常備艦隊に御乘組あ

りて、海路、神戸に直行の上舞子濱なる、有栖川宮御別邸に入らせらるゝ筈なりと。

●御陞進　有栖川威仁親王殿下　海軍中將に、小松依仁親王殿下は、海軍少佐に御陞進あらせられたり。

●久邇宮榮子女王殿下の御慶事　久邇宮榮子女王殿下子爵東園侍從へ御降嫁華燭の禮を行はせられしに付天皇皇后兩陛下より内舎人を以て鮮魚一折酒一荷を久邇宮家へ紅白縮緬一疋づゝ榮子女王殿下へ御遣し遊ばされし由に承る。

●御衣冠謹寫　歷朝御儀式の御衣冠各二通謹寫の事は、京都華族書學教習所生徒從五位淸岡長言氏に命せられたるが、右取調掛には、殿掌取締、六角博通子、殿掌山科元繩伯、書記には、殿部北河原雅伯外二名が申付けられ、近日に着手の筈なりと。

●仁德天皇御遺跡の標石　仁德天皇御遺跡保存の一として、河内味原池の西南に建設する標石は、同國中河内郡日下山の天然石と確定せり。神武天皇御東征、草香泊舟の御因によりて、斯く定まれるなりと云ふ。

●藍綬褒章銀杯副賜　兵庫縣神戸市兵庫出在家町の神田兵右衞門といふ人は、資性温厚にして、其の行正しく、世の師表とせらるゝ人なるが、公衆の利益を興したる廉を以て、九月十一日賞勳局に於て藍綬褒章に銀杯を併賜せられたり。

兵庫縣神戸市兵庫出在家町　神田兵右衞門

資性温厚、夙に、先志を承け、家風を守り、心を慈惠に注ぎ、力を公益に竭す、兵庫港の西南和田の岬たる風浪險惡にして、動もすれは、船舶覆沒の虞あるを慨し、新川開鑿を首唱し、屢々官に稟議して、允准を得、乃ち有志と謀り、資金を醵して、一社を設け、明治七年工を起すや、中道困躓に嬰るも屈撓せず、自ら資を投して經營倍々努め、同九年、遂に、其功を竣へ、啻に繋泊の安全輸漕利便を加ふるのみならず、新地二萬五千餘坪を得。且つ沿岸の斥鹵を塡め、官に請て、之を購ひ、各町の共有地と爲し、爾來倉庫鱗次肆廛櫛比、頓に殷昌の域となるに至る、其他各種の公職に從ひ、黽勉多年、遭難船處分の弊習を除き、數處の學校を築き、商業會議所を創め、給氷工事を畫する等、洵に、公衆の利益を興し、成績著明なりとす、因て、明治十四年十二月七日、勅定の藍綬褒章を賜ひ、其善行を表彰す。

同人

公衆の利益を興し、成績著明なるに依り、藍綬褒章銀杯一箇副賜候事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●孝行　岩代國の渡邊藤九郎といふ者、幼にして、父を失ひき。もとより貧窮の身には、露命をつなぐことも難かりしを、人の家に僕となり。備に艱難を嘗めて、遂に、家を成せりといふ。母は、病身にて、後には起居さへ不自由なりければ、之に仕ふる、極めて篤く、二十有年渝はることなく、郷人、皆、其の孝を稱へ、官、亦、金を賜ひて、之を賞す。

●貞婦　信州松本に、寺村金兵衞といふ葉茶屋あり。本年五十三歳を以て逝きし迄、約十餘年中風を病みしが、妻ナホ、善く其の病床に仕へて、倦まず、撓まず。夫死して、殘りし三人の兒を膝下に、偏へに其の成人の程を祈れど、一郷擧ぞつて貞婦とし、操の鑑とすとぞ。

●心ゆくくさぐさ

◉師弟の情　島根縣深谷小學校の訓導にて石見といへる人、この頃內田小學校へ轉勤を命ぜられければ、村民、皆、惜みて、留任を請願せしも、聽かれざりき。出發に際りて、老少擧りて、村界に送り、淚をおとして、別を悲みきと。平素の敎方もおもひやられて、いとゆかし

◉篤志の看護婦　甲州の加藤賢次郎といふ者、自巳はもとより、妻のみか、十二を頭に五人の子供、皆な赤痢に罹りしが、妻と二人は、遂に死去りぬ。子供は、幸に癒えたれども、是れ、はた如何にせむ。看護婦、水谷トミ、かねて懇切に看護したりき。即ち、又、百方周旋して、親戚の者、及び、有志者をして、引取らしめたり。中に、三男秀造(二ッ)といふが、トミに馴れて、離るゝことをいなみければ。トヨ、いたくあはれに思ひ、其の後乞ひて、秀造を保育すといふ。看護婦といへば、この頃は惡評をきくが多き中に、いとたのもし

◉美擧　山口縣佐波郡、富海村は、風光の明媚を以つて聞え、村民、亦、淳朴を以つて、稱せらる。今春村長指揮者となり、蟲害豫防のため、一村を擧げて、稻株堀取を行ひしに、平年に比して、村內にて、一千三百餘俵の増收を得たり。是に於いて、其の増收額を、悉く、公共事業に寄附せ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

むことに決し、先づ小學校の新築に着手せりといふ。轉ある世に、いとありがたし◉篤志　島根縣の高崎關太夫といふは、最早、親もなく、子も生まれず、唯夫婦のみしてくらし居たりしが、遂には自宅を、他人に貸し、二人は、山中に小屋を造りて、住ひけり。爾後十餘年の間に、山野十數町を開墾し、杉檜の苗を仕立て望によりては、之を配與す。爲に近鄕の殖林事業、大に進み近郡よりわざ〳〵、觀に來る人も多しとかや。子なきを口實に、犬猫などのみ愛するものも多き中に、この心がけいとめでたし。◉老媼の篤志　羽後男鹿に於いて、赤十字社秋田支部員等、幻燈會を催し、救護の狀況を寫す。座に、目黒某の老母あり。金枝玉葉の御身を以て、戰時、篤志看護夫となりて、軍人を救護せさせたまふ狀況を觀、感泣止まず、養老金として貯ふる所の、銀貨二十五圓を差出し、終身社員たらん事を乞へりとぞ。◉義婦節行表彰式　前號の雜報に記し〻、義婦小川八重の節行を表彰するため、牛込南町の窮民救濟會にては、本月一日午後一時より、神田錦町二丁目斯文學會內に式場を設けて、表彰式を執行せり。あはれ、其の行、彼が如くにして、始めて、この榮あり、以てかゝみとすべし。◉孝子龜松の建碑　天明年間、信濃佐久郡の、孝子龜松が、十歲の時、惡獸を斃して父の危難を救ひし事は、幕府の孝義錄、飯田氏の野史等に見え、今の小學校の敎科書の中にも記されて、皆人の知るところなるが、今回、有志相謀りて、其の墳墓を修し、以つて其孝勇を表彰せんとすといふ。以つて千載に傳ふべし。

●大木伯の薨去　豫てより重痾に罹り居られしが、去月二日より中風症に變じ、爾來病躰漸々重きを加へ、二十六日午前一時三十四分六十九歲を一期として遂に薨去せられぬ。其の官歷左の如し

伯は舊佐賀藩士にして天保三年三月鄕里佐賀に生る、通名は民平、明治元年四月四日徵士として召され參與職、外國事務局判事となり同月二十四日京都府判事に任じ從五位下に敍せられ同年十二月參與職兼東京府知事に任ぜられ同二年七月東京府大參事、同十一月權知事、

同三年七月兩度民部大輔等に歷任し尋て民部卿及び文部卿となり同五年十月教部卿に任ぜられ同六年四月參議に任ぜられ同十月更に司法卿となり勳一等に叙せられ參議に兼任せらる十六年再び文部卿となり十七年七月華族に列し伯爵を授けらる十八年元老院議長に任じ從二位に叙せられ二十一年四月樞密顧問官となり二十二年十二月同議長に任じ特に内閣に列せらる二十三年司法大臣となり翌年六月更に文部大臣となり後官を辭するに當りて特旨を以て樞密院議長の優遇を賜へり茲に伯の病革なるに際し旭日桐花大綬章を賜へり

伯は佐賀七勤王家（大木、大隈、副島、江藤、古賀、阪部、楠田）の筆頭にして、世、江藤新平、古賀一平と併せて、佐賀の三平と呼ばれたりき。

●女子の商業教育　九月十九日の全國商業學校長會議に於いて、主務省より、提出せる諮問案、第一項、商業學校編制、及、設備、第三項女子商業教育の施設に關する意見如何の二案に付き、調査委員より調査の結果報告ありしを以つて、直に、第一項の逐條審議をなし結局二三の修正をなし、原案の通り可決し、次に、第三項を、左の如く可決せり。

第三　女子商業教育の施設に關する意見、左の如し。

一　必要と認む
二　入學程度は、高等小學第二學年修業以上の者
三　修業年限は、二ヶ年、乃至三ヶ年とす。
四　當分の内、高等女學校、又は、高等小學校内に附設することを得
五　學科は、修身、讀書、習字、作文、算術、簿記、商事要項、家事經濟、裁縫、及、体操の九學科とす。
　但し、本科目の外、他の學科を便宜加設することを得

此の問題については、都下の新聞雜誌は顧みるものなかりき。唯、大阪朝日新聞のみ三面に、一記者と署して教育時言を題する中に、左の如くいへるあるのみ。

特に注意すべき問題は、女子の商業教育とす。女子、亦人間たる以上は商たらしむべきは固より、農とも、工ともなし得べく、現に成りつゝあるなり。是に、皆專門教育を施すは、吾人の同意する所なりと雖も、單に商業教育の一方より、女子を見るに至りては、一考を求めざるを得ず、又、女子の職分、彼が天與の職分の何たるやは論する迄もなきが若し、彼に職業を與へむとせば、可及的、其の天職に遠ざからざるを要す。女

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

子を論ずるもの、最も、意を致すべき所なり。學校教員の如き、我國、今日の狀況に於て、女子恰好の職業にあらざるか、是は他日評論の期わらむと。

●華族女學校大學部の延期　同校にて學則を改正し、本學年より、大學部を設くるの計畫ありしも、宮內省中に異議起れる爲め、暫く延期することに決し、只此際は、高等中學科の上に位せる、專修科の課程を置くことゝなせりと。

●●●●●●●

●婦人教育會の演說　同會にては去る三十日午後一時より、華族女學校幼稚園內に於て開會し、巖谷季雄氏のれ伽噺、並に師範學校敎官加藤錦子の通譯にて、ヲッド博士夫人の家庭教育談ありしよし。

●音樂を稽古する弊　音樂は、人をして優美ならしむるに相違なしと雖も、未だ、一定の時期に達せさるに方りて、濫りに、これに耽るときは、遂には神經病に罹るもの多しと云ふ。○神經病專門醫を以て、有名なる、獨逸のウェッツホルド博士は、頃日、これが爲に、一文を草し音樂中、殊にピアノの稽古に、子女をして耽らしむるの弊は、神經病、腦病、又、消化不良、萎黃病等の疾病を發すること尠からず。これは、成熟せる婦人よりも、寧ろ、未成熟季に達せさる婦人が餘りに、音樂に耽るの獘なりとなし、博士自身の研究の結果を示して曰く、十二歲にて、ピアノ稽ひ、始めし婦人、千人中、六百人以上は、現今、種々なる神經病に罹り、未だ曾て、ピアノに、手を觸れしことなき婦人に到ては、千人中、疾病に惱むものは百人に足らさるなりと、博士は、これを以て、十二歲、未滿の少女に、ピアノを習はしむるの宜しからさるを說けり。（世界日本）

●親のために娶らず　金澤市役所の第三課々長心得を勤むる藤田某と言ふは、平生頗る勤直の聞え高く、役所に於いて、事務忙がしく定刻に後るゝ等の事あるときは、課長市長が何と言へぞとて、必ず一度家に歸りて、其旨を老母に告ぐる程なるが既に四十に達する歲なれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ども、未だ一度も妻を迎へず。蓋し、他人を家内に入るれど、家内に隔意など生じ、風波を起こす憂あれどなりと。婦徳の頽廢、遂に斯くの如き人あるにいたれり。あはれあはれ。

●くさ〴〵▲廣島縣安藝郡溫品村石田要吉、既に八十五歳に達し、妻いさも亦八十四歳の齡を重ね、子あり、孫あり。多くの餘財はなきも、生活の不足を感ぜず、而るに、老夫婦は坐食を嫌ひ、翁は山に草を刈り、嫗は川に衣を濯ぎ御伽噺の實際を愛孫に示すを樂しむ▲八十二嫗美作北條郡大井西村に、葛城小光と呼ぶ八十二歳嫗あり。數十年前夫に別れてより、望むに任せ、茶を數へ花を傳ふるの傍、自ら山野をあさりて、落葉を拾ひ、又た邸内に菊を植うるを樂しみとせしが、先頃の暴風雨に、吾屋根少なからず破れし折は、自ら麥稈もて、二日間に葺上げ、殆に又々、近郷の目を驚かせり▲石垣崩れて女生徒を傷く　さきごろ麴町區富士見町五丁目なる、富士見尋常高等小學校女子部尋常一年生の授業中、同所の、東京區裁判所富士見町出張所の裏手の石垣、突然三間ばかり崩壞し、爲に、前記一年生數室の硝子窓を破碎しければ、女生徒中、手足に微傷を負ひたる者ありしと。甚だ氣の毒のことなり。▲營業賤しきも風俗敦し香川縣綾歌郡長炭村の字長尾に新平民の部落あり。戸數四十餘、皆貧ながらの賤業を營めども、風俗純朴なり。此頃、片岡侍從が、災害視察として此の地を通過するや、村民一同、道を淸め土下座をなして、無上の敬意を表をしたりと。●會津の一大古跡　岩代國耶麻郡大鹽村を距る、東に八丁餘突出せる大岩、麓に老杉繁茂し綠陰深處に、一大古跡の存するものあり。世に云ふ、立岩[illegible]なるものにして、弘仁三年、空海大師の建立に係り、諸人の渴仰する處なりしが、戊辰以來衰微して人の顧るものなかりしに、今年寶物取調局の某氏同地に至り、取調べたる結果僅かに一千年以上の古跡にして、尊像の如きは、實に東北無比の大美術なるを分りしより、同地有志者は、俄に保存の道を講じ、已に寄附金も百餘圓に達したれば、來年早春工を起し、入佛の上大祭を行ふ筈なり。

●性善　宮城縣牡鹿郡石卷町岸野某といへる者の方へ、强盜入りぬ。白刃をひらめかして、主人を脅さむとして、ランプを切りたとしけれど座敷は、一杯火となれり。主人は、驚きて、家人を呼び起し强盜も、白刃をすて丶、一方ならず、力を添へ辛うじて、消しとめけり。コレハ御苦勞樣。イヤ、御メデタウとはいひしもの丶、始めて、わが身の强盜なるに心付き、うらはづかしく、今は氣の毒げに立去らむとするを、主人も、始めて、最前のおそろしかりしことをおもひだし、これも、今、はた、氣の毒になり呼びとゞめて、金三圓をいだし、辭むを强ひて與へ飯し丶とぞ、人の性は善

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なり。習はしだによかりけむには、斯く恐しきものにはならざりけむを。

●一筆啓上仕り候　秋も、やゝ深うなりて朝夕の寒さも、いよ〳〵身にしみそめ候ふげにや此處の森彼處の山も錦の衣を襲ひはじめ候。うらやましきとに御座候。人の世は、是よりあはれなることのみ多くなり申すべく候。みづからのことは、兎も角も思ひのどむる方も、これあるべく候へども、ひとかたならぬ憂き思ひして漸くに着せたる洗ひ張りの袷ながら、贅澤なる學校の朋輩には、猶穢しとや見らむ。聞ゆる聲して聲ゑぬげにさま〳〵と言ひ腐すが悲しとて、泣きてさへ行き佗ぶるを賺しこしらへて、學校に遣る母の心。思ひやくれて甚くもあはれに御座候。彼等の先生の中にてさへ、衣服を華美しう得なさぬが物憂しとて、樂しかるべき敎の庭へ、羊の歩するものも少からぬ由に御座候。されば幼き女の子ごゝろにて、一筋につらしと思ふも無理ならぬこと〻存ぜられ候。富める人、さてはあまり豐まぬ際までも、いかで秋の色にもまさらむと、此のごろは、唯衣服の華麗装の具の珍奇などにのみ心を苦むる有様、まことになげかはしきことに御座候。つら〳〵思へど、彼の野山の錦も、一時は見る目もまばゆく候へども、やがて木枯とやらんに吹かれて、あへなく散りはてぬべき、中々うらやましからぬものに御座候。人の上は、然まではかなくは候ふまじけれど、いつれも、天地の間にすむものは、榮枯盛衰のことわり、遂にはのがれ得まじきこと〻、そゞろに肌寒うおぼえ候。總べて奢侈めきたることは、甚だよろしからぬこと〻、常々論説漫錄などの人々より承りをり候。皆樣にも定めて、御承知の御事と存じ候へど、われ〳〵よりは今更めかしう理屈がましきとは申し上げず候。唯、貧しき人のために、着物らしき着物だに着せかぬる世の親のために、學校に行くほどの人は、上も下もおしなべて、衣服のをごりをつゝしまれむことを、希望のいたりに堪へざる趣をのみ、申しあぐべく

候。（ま、に生敬具）

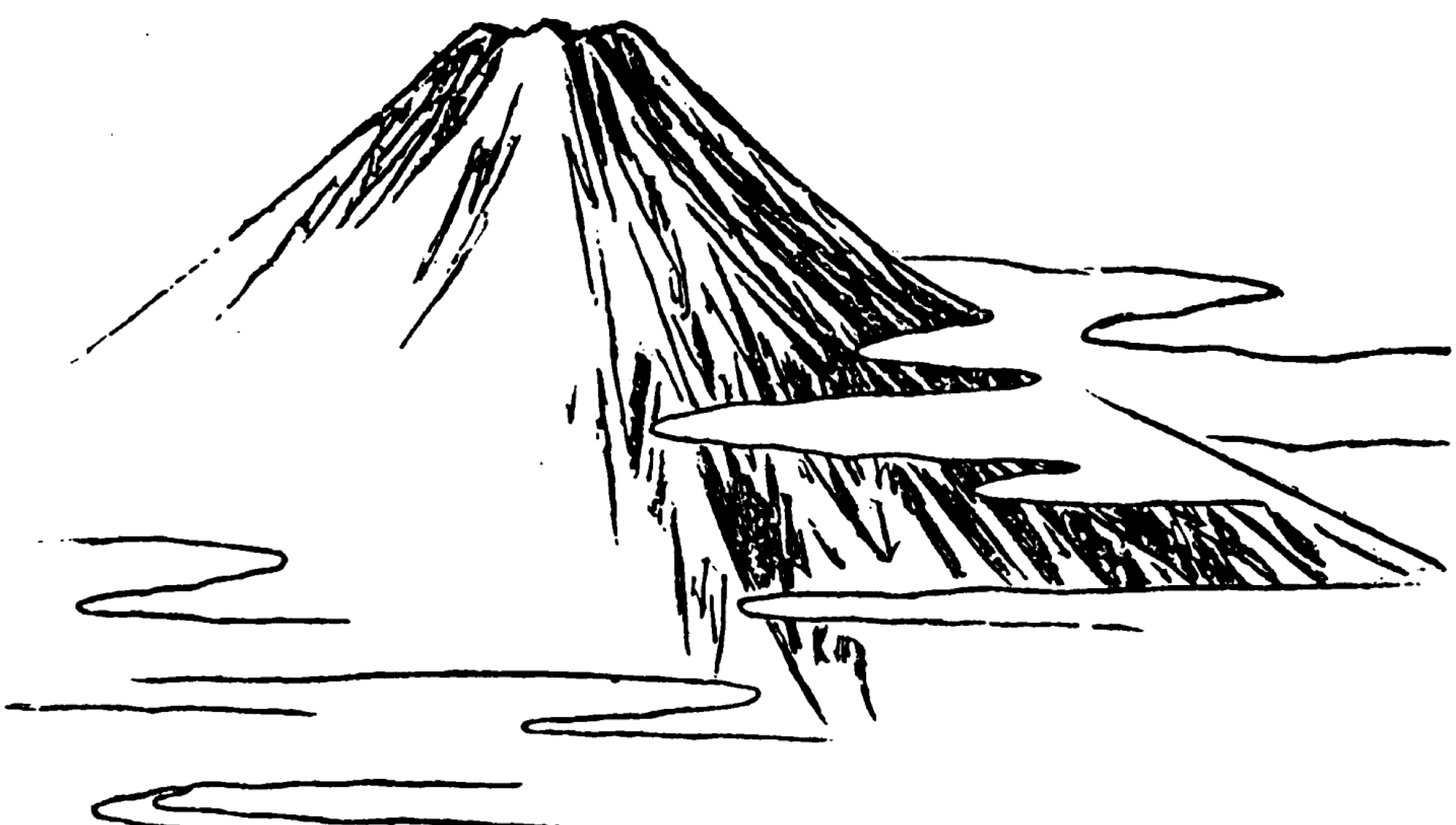


●女子敎訓書（本郷大道社發行定價十錢）大道社主筆、川合清丸氏が、其の女のために書きて與へられたるものなり。家を治むる心得、身を修むる心得、子を育つる心得、人に接する心得、世に處する心得、總べて、二十五條文極めて平易にして、何人にも解せらるべし。

人に語るまじきことは、決して、身に行ふべからず。身に行はるまじき事は、決して、人に語るべからず。口に言ふ所と、身に行ふ所とを、始終一致にして、更に、內外表裏の相違あるべからず。是れ人生の本分にして、世の信用は、蓋し此の處より生ず。（修身の條）

婦人は、他に、逆らひ、悖らざるを道とすれども、常に柔順なる裏面に、氣高き氣象を包み、溫和なる內部に、淸淨なる節操を存して、人に接するに方りては、其の風儀を、他に波及する程の力なくば、必す、他の風儀を知らず識らず、已れに波及せらるゝものと知るべし。（接人の條）

其の他、總べて、子を思ふ、親の至誠より溢れいでたる敎訓なり。余は、甚だ、斯る好書を、諸嬢の前に紹介するを得たるを喜ぶ。たゞり



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



歌の庭

十月五日兼題　衣擣所々

天　松山市三番町　長谷川　松枝子

月夜よし夜よしと賤のをとめ子が
こゝにかしこにころもうつらむ

地　熊本縣阿蘇郡北小國宮原　禿　眞澄子

をちこちにいそぐ擣衣の音きけは
ふけやしぬらしわきのしのゝ里

人　石川縣金澤市備中町五番地　戸倉信子

をちこちの里れしなへて月かけを
こよひのともところもうつなり

秀逸（十首）

やま里ははやも夜寒になりぬらん
みねにふもとにころもうつなり　三河　伊東千代子

そこはかと聞きわかぬ迄打ち交す
おともひまなき小夜きぬたかな　甲府　名取正代子

おしなへて夜寒になりぬ遠こちに
しつかきころもうちきそふなり　甲府　名取よし子

山ひことこたへあひつゝ里ごとに
うちかへすなりしづかさごろも　肥後　佐々有鄰子

月きよみ擣衣のおとをとめくれは
またかしこにもきこえそめけり　仙臺　山下やよ子

から衣うつこゑたかくきこゆなり
すゝもわかしもつききよしとて　石川　永山豊子

檻褸させせとなく虫の音に誘はれて
ころもうつらむよはふくるとも　岩手　月野さへ子

すむ月のかつらの里のかはこしに
うちわわせたる小夜きぬたかな　長崎　日高かず子

鳴きよはる機織むしにひきかへて
をちこちしけくころもうつなり　三河　石川敷子

なかなかに彼方此方にうつきぬた
なかきよすかのともとなりけり　和泉　福原篁子

（以下原稿着順到）

賤か家のかすやましけむをちこちに
まれくきこゆるさよきぬたかな　山田稻子

をちこちのきぬたの音もさはわたり
かたふく月にうちいそくなり　内海順子

月みんさおりたつにはにきこゆなり
いづこのさともころもうつこゑ　友永章子

月きよく身にしむころはあきかぜに
さそはれきつるささのきぬたは　那須昌子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あかずなほころも打なりよもすから　つままつさとのをさめなるらん　村崎包子

露しものふるさとさむくあきふけて　こなたかなたにうつころもかな　黑田明子

さよふけて此方かなたにころも打つ　こゑさへさむし木曾のやまさと　虎口資子

かくばかり月すむよひはいづこにも　ねられぬままにころもうつらん　溝口貞子

こゝかしこよすから賤がころもうつ　聞くわれさへもねられざりけり　中村露枝子

をちこちにつちのねきこゆさと人の　よさむやおなしこゝろなるらん　高やす子

ころも打おとこそたえねにしひかし　みなみにきたにひゝきわたりて　田代綾子

ふるさとは家ゐすくなくなりにけむ　まばらにきこゆころもうつおと　高橋照子

さらぬたにねられぬ物を夜もすから　かなたこなたにころもうつなり　永井さい子

夜もすからきぬたの音のをちこちに　たえずきこえてねられざりけり　服部倫子

夜やさむきかた山かげのさとごとに　まきかへしてもうつきぬたかな　佐々小琴子

をちこちのきぬたの音にゆめさめて　おもはぬつきをながめけるかな　石井豊子

てる月にしづかふせやのかげみえて　きぬたのおとのたえつきこえつ　立田原宮子

賤の女もつかれやしけんをちこちに　たえ〴〵ひゞくさよきぬたかな　立田原國子

むしの音もあはれをそふるさよなかに　をちこちのさところもうつなり　立田原直子

なつとのみ思ひなりしをさよふけて　あなたこなたにころもうつなり　小笠原ひろ子

なかき夜のねさめのともと思ふかな　さとわのきぬたおさのかよひて　小笠原元子

うちすだく虫のねしげくなるまゝに　いづくのさともころもうつなり　高原まつゑ子

さをくまたちかくなるほの浦きぬた　なみよけころもいそくなるらん　千代田たき子

秋ふけて身にしむ風にさよきぬた　こゝろ〴〵にうちきそふなり　河原いし子

ふくる夜をいそくきぬたの遠こちに　おともひまなくうちかはしつゝ　羽田三緒子

たか里もおなしこゝろにいそくらん　きぬたのおとのかずそそへゆく　河田ふく子

虫の音にきほふもさびしこゝかしこ　あはれたかつまころもうつらむ　西川順子

夜もすからころも打つなり山もとは　つきもをぐらのさとのいへ〳〵　田中すゞ子

おそ月のさえゆくまゝにおとそへて　こゝもかしこもころもうつなり　曾田なか子

この夜寒つきすむそらにかりなきて　こゝにかしこにころもうつなり　畑野りむ子

さらぬだにねられぬものをさよ更て　あなたこなたにころもうつなり　小川初野子

こゝかしこ打つやきぬたの音すなり　くれゆくあきのしるべやはする　田代鶴子

おとらしとうち競ふらんこゝかしこ
　きぬたのおとのたえすきこゆる　降田滿喜子

夜をさむみふけゆくまゝにから衣
　うつおとたかしをちこちのさと　淡井靜子

さよ更けて月すみのえにこゝかしこ
　ころもうつおといさゞみにしむ　駒澤まつ子

さと人がころもうつらしをちこちに
　つちのおとすなりあきの夕くれ　松村蕗賀子

つちの音のところ〳〵に聞ゆるは
　あきの夜さむみころもうつらむ　道廣やゑ子

競ひつゝうつやきぬたのをちこちに
　たゆみもやらすなかき夜すから　石川久子

ふくる夜の月かけ寒みこゝかしこ
　ときしりかほにころもうつなり　石川樂子

よひねする我おこたりををちこちに
　いさめがほしてきぬたうつなり　石川なゑ子

よひ〳〵にうちもやすまぬ小夜砧
　あはれたか爲の手業なるらむ　北島松子

つく〳〵とおもひわひたる夢の中に
　あまたきこゆるさよきぬたかな　北島操子

をちこちにきぬたのおとぞ聞えける
　ひとよたひねの玉川の里　北島功子

よもすからきこえぬ里もなかりけり
　よさむにいそくころもうつこゑ　中村敏子

みなみふき東風ふくたびに音たかく
　まくらにひゞくさよきぬたかな　山田きよ子

きぬたうつ音もさやけくきこえけり
　かは邊のむらもをちのさとべも　內野千代子

きく人のこゝろ〳〵にひゞくらん
　さとをもわかすころもうつこゑ　伊東蕗子

よを寒みいつこのさともをやみなく
　かたふくつきにころもうつなり　山本さし子

秋ふけてこなたかなたにころもうつ
　こゑもながるゝたまがはのさと　志葉多久子

をち近にしきりたゆむはかりがねの
　こゑやきぬたをうちとそふらん　坂井ため子

此ころはなべて夜さむになりぬらむ
　いづこのさともころもうつかな　山內代年子

おもひねの夜やふけぬらんをち近の
　きぬたのおとぞたかくなりぬる　鈴木那美子

をちこちと砧のおとはかはれども
　同しおもひにうちいそくらむ　鈴木秀子

とほちかにたえつ聞えつしづのめか
　きぬたうつそらに月すみわたる　西元とも子

ころもうつ千こゑ八千聲たえまなみ
　なかき夜すらをものおもひつゝ　河口文子

たかためにうちいそくらん山さとは
　あなたこなたにころもうつなり　岡伊勢野子

てりわたる月見かてらにやましづの
　こころ〳〵に打つきぬたかな　三木壽子

さよ更けししづが手わざのからごろも
　うつおとさびしをちこちのさと　新藤雪子

あき風のそよぐにつれてをちこちの
　きぬたのおとのきこえぬるかな　藤勝あさ子

あき深くしづけき夜半の月かげに
　こゝもかしこもきぬたうちけり　藤勝米子

うちとけてねられぬ秋としづの女が
　きぬうちあはすをちこちのさと　高砂菊代子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夜を寒みねられぬひさやからころも
うちしきるらむをちこちのささ
高砂き代子

遠こちのあまのいそやにきぬたうつ
こゑさむしろにたゆむまもなし
木村きく子

いつしかも秋ふけぬらしささひさは
なへて夜さむのころもうつなり
武田榮子

かりがねも夜さむを告げてをち近の
ささのきぬたのおさしげきかな
木川里子

うつりゆく秋のならひさおしなへて
ころもうつなり四方のささひさ
澤田春子

ふく風のおさだにあきはさびしきを
あなこなたにころもうつなり
小森田初子

秋かぜのさむくおさづるこのごろは
いづこのさともころもうつなり
小森田輝子

夜を寒みいそぐこゝろがからころも
こなたかなたにうちもたゆまず
德永識子

しろ妙のころもうちなすをさめらが
壁もをちこちにきこえけるかな
德永唐子

さよ更ていねられぬをちこちに
あきの夜さむのころもうつおさ
德永萬壽子

秋風のふきしきるころはさよきぬた
うつおさすなりあなたこなたに
田坂芳子

こゝかしこ里はいつこさわかれさも
おなしよさむのころもうつなり
上西美登利子

夜をこめて歸るやま路のをちこちに
きこゆきぬたのあはれさむけさ
杉浦三惠子

をちこちのきぬたの音もきこゆなり
いさゝさびしきあきのねさめに
椎野ぬき子

更るまでささはいづこも　うちて
川端まさ子

もの思ふわれもねられさりけり

あはれてふ秋の夜ながをわひしさや
そこもかしこもころもうつなり
川端まさ子

かれの音をきくだに秋はさびしきを
こゝやかしこにころもうつなり
石川多那子

月影のふけゆくまゝにきこゆなり
こゝにかしこにころもうつおさ
依田綠子

ふけゆけはいよゝきぬたの音しけし
やまひこさへもうちましりつゝ
村松月子

山ひこがそれかあらぬかこゝかしこ
ひさつにひゞくさよきぬたかな
山本りやう子

たゆみてはまた打しきるさよきぬた
すまもあかしもあきかぜやふく
伊藤久子

こゝかしこころもうつては多けれさ
いそぐこゝろやひさつなるらん
藤村幾子

さえわたる月にむかひてこゝかしこ
きぬたうつよのさむくもある哉
熊谷又子

つま思ふこゝろくらへによもすから
ころもうつらんをちこちのささ
三野てい子

たが衣うつにやあらんをちこちに
あかつきちかくつちのねぞする
富田郁子

さよ更てわびしきものをさよきぬた
きこえつたえつをちこちのささ
富田壽子

山ひこのひゞきもそへぬをちこちに
うつおさしきるさよぬたかな
泉　さい子

きゝわひしさなりの音にうちそふる
をちのささわの小夜きぬたかな
坂田喜美子

誰が里のぎぬたなるらむ小夜ふけて
いよゝうつ音のかずまさりゆく
河原芳子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夜を寒みねさめて聞けはあはれまだ
　こなたがなたにころもうつなり　山村隆子

をちこちにきぬたの音のきこゆなり
　よさむやおなしこゝろなるらむ　辻とみ子

をちこちの里のきぬたのおとしげみ
　われもねぬよをうちがさねけり　氣賀澄子

さらぬだにねられぬ夜半をあはれ又
　かなたこなたにきぬたうつなり　神田秀子

里ことにころもうつなりあきふけて
　なくむしの音もよわるよさむに　山根久子

露しものあきのよさむになるまゝに
　いつこのさともころもうつなり　横山柳子

みにしむはいつこもおなしあき風に
　うちかはしたるさよきぬたかな　横山寸賀子

をちこちのきぬたきこゆる秋の夜を
　なごかは人のかなしといふらむ　加島みつ子

秋かせの身にしみ〳〵とをちこちに
　ゆめおどろかすさ夜きぬたかな　青木たま子

遠かたのひゞきときけはこなたにも
　ころもうつらしつちひゝくなり　村井亮子

をちこちにうつやきぬたの音すなり
　ながながしよのものおもふころ　大谷美子

秋ふかくなりにけらしなをちこちの
　さとにきぬたのおとしきるなり　三戸かなわ子

遠たこなた音こそきほへさよきぬた
　おなし夜さむをうちわひぬらむ　仁保しま子

さと人やおなしこゝろにいそくらむ
　こゝもかしこもころもうつなり　香川いく子

ふけゆくをねられぬよはの友とてや　香川あち子

　ちたひやちたひころもうつらむ

秋もやゝふかくなりけりそこはかと
　たゝくきぬたのおとしげきかな　河方喜代子

しづのめが月みがてらにきぬたうち
　うたひ競ふなりこゝにかしこに　金子苔生子

をち方にあるは間ちかに宵のほどは
　きぬたの音のしげくもあるかな　部水春子

おのづからうち競ふめり小夜きぬた
　ふもとのさとゝかはづらのさと　目黒佐喜子

なべてうつわが里よりもほのかなる
　をちのきぬたぞあはれなりける　吉崎世根子

夜寒にやおどろかされていそくらん
　かなたこなたにころもうつこゑ　香川顕子

山さとにふくかぜさむく小夜ふけて
　こなたかなたにころもうつなり　佐伯きぬ子

夜寒をばわびぬひとそこなかりけれ
　さとごとにきくころもうつおと　森こと子

風さむく夜はふぬけれどをちこちに
　うちもたゆまぬころもかな　山崎千代子

山ざとのまつふくかぜにさよきぬた
　こなたかなたにおとぞきこゆる　田中房子

ふく風のさむきよすがらをちこちに
　たゆてつゞきてきぬたうつなり　由井なみ子

おしなべて夜寒にあきやなりぬらむ
　かなたこなたにころもうつなり　二宮さと枝子

さよふけてふく風さへもさびしきを
　かなたこなたにころもうつなり　近藤よし子

風にさく月にたゆみてさよきぬた
　かなたこなたにうちみたれつゝ　宇高松子

をちこちにきぬたの音のきこゆなり
いづこのさとも夜さむなるらむ　越智かめ代子

をちこちにきぬたの音のきこゆなり
おなじ夜さむやわびてうつらむ　野中あさ子

ころもうつ音こそよもにきこゆなれ
きよきつきよにうちうかれつゝ　河村君子

おほかたの賤がいへにはふゆや來ぬ
さとをもわかずころもうつなり　戸塚鐵子

長き夜のねざめにきくもおもしろや
ところ／＼にきぬたうつおと　諸井久良子

きぬたうつ音はとり／＼きこゆれど
なべてあはれとおもふあきかな　吾妻ちか子

こゝときゝかしこと數のさよきぬた
しづが夜さむにいそぐなるらむ　舘脇ます子

小夜更てあきかぜさむくをちこちに
ころもうつ子もみないそぐらし　萩原萃子

いづこまで秋のあはれやかよふらん
ところ／＼にきぬたうつなり　新海わか子

たがためにふくろもしらで賤の女の
かなたこなたにきぬたうつらむ　伊賀直子

音とほくひゞきはちかくきこゆるは
こゝにかしこにころもうつらむ　村上みさを子

ふく風のみにしむあきとなりぬれば
こゝにかしこにころもうつなり　田村多豆子

音なしのさともなのみかをちこちに
よさむのころもうちしきるなり　林久子

遠こちにころもうつ音をきゝわけて
ねられざりけりやまむらのやど　淀せい子

山ざとはいよ／＼わびし秋ふけて
こゝにかしこにころもうつこゑ　淀あさ子

あき風のさむくふきぬるゆふへより
やはたやまさきころもうつなり　宮武文子

小夜ふけてきぬたの音のをちこちに
ひとりをきけにねられざりけり　椋田凉子

おしなへて秋や夜さむになりぬらん
いづくのさともころもうつなり　米澤たれ子

きり／＼すなくね淋しきこのゆふべ
さとをもわかずうつころもかな　吉江いく子

から衣かなたこなたにうつおとを
ねざめのともとあつめてぞきく　田尻保代子

とほちかにきぬうつ音のきこゆなり
夜さむのつきのふけてゆくまで　北原すゑ子

霜にうつしづがきぬたのおとすなり
ねぬ夜のおとのすさびなるらむ　寺田みち子

ふみまよひやまぢをくれば風さむく
いづこのさとも砧たうちきほふ　關根美濟子

長き夜をあかつきかけてひまもなく
ころもうつなりをちこちのさと　尾崎羆子

をちこちのきぬたの音もとり／＼に
つきにすみゆくあきのよはかな　新泉翠子

いつこまで月はてるらんをちかたも
いつこのさともころもうつなり　新泉松子

夜や寒くなりにけらしなやまざとは
かなたこなたに衣もうつなり　尾崎秀子

里ごとにころもうつなりあきの夜の
ながきゆめ路はたがたどるらむ　笹子茂子

あまのこら夜さむの風をいとはずや
なみのほかなるこ衣もうつこゑ　敷島花子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うたゝねの夢もさめけりあまた所ろ
　つきにうかれてきぬたうつらし　淺川れい子

をちこちにひゞくきぬたの音さえて
　つきかげさむしたまがはのさと　大谷涓峰子

いづかたもよ寒しられてをちこちの
　さゝはたゆますころもうつなり　伊東いさ子

西ひがしきたにみなみの小夜きぬた
　ねさめのとこにかぞへてぞきく　河合縫子

よさむてふさとのなかみち我ゆけは
　みぎりひたりにころもうつなり　服部蔦子

いもやすくねられぬまでにせとの妻
　となりのをさめころもうつなり　加藤加壽子

をちこちにふけてきぬたの音するは
　おなしよさむのいそぎなるらむ　賀茂従子

ころもうつきぬたの音のをちこちに
　たゆむひまなきたまがはのさと　津村さみ子

ねもやらでよころ〳〵に唐ころも
　まきかへしつゝ打ちすさふらん　東野さく子

十月五日兼題
菊の花につけて友に送る文

天　香川縣高松市田町二丁目二百八十五番戸　宮武文子

花としいへど、なべてあだなるを、獨菊の花は、霜にかじけず、時雨にうつろはず、冬深くさへ匂ひ殘りて、色香のこともにすぐれたることそいとめでたけれ。まして一歳の花のとぢめと思へばにや。いとゞめとまる心地して、秋草のあまたが中にも、いみじうあはれふかゝり。もろこしのなにがしひとを、かならずまねぶとにもあらねど、心のともと見ましとて、ひとむら植ゑおけるきくの、蓬むぐるにまじりて此のころさきいでたる、なかなかに、ふかくめでがほに、つゆ霜にあてじとて、物もておほひ、竹ゆひわたしなどしつゝ、しひてひとじうつくりたてたらんは、其の本性うせて、なさけおくるるものなるを、かゝる處にもをりをわすれぬ花の匂ひこそ、いとあはれなれ。

扨、唐國にては、菊は黄なるをめづるにや。詩などには黄菊とも黄花とも聞ゆるに、皇國にては、白きをむねといひならはしたるならむ。歌にはいつも白菊をのみなむよめる。されど連歌の句にも、黄菊白菊其の外の名はなくもがななど侍るとか。かゝることをいひつゞけゆかむはなかなかをこなるべけれど。

幸此頃、伏屋のまがきに黄なるが二つ三つのこりて、われはがほにさし出でゝ打ちにほひたるは、常よりも色はえて、いとあてにめでたきを、一人見侍らむも、あたらしう思ひたまうれば、いとしたりがほには侍れども、色をも香をも知る人にこそとて、一本折りて、御らんせさせ侍るになむ。

地　宮城縣仙臺市東七番丁五十番地　山下八代子

今年は御すまひのほども、へだゝり侍れど、わたらせ

給はんこともかたくてや。秋のあはれも、ことさらにて、ふりにしことども、しのびはべりぬ。思へば去年の今日なりけり。松虫の音のをかしさにとて、とはせ給ひし夕つ方、ふと見出てたまひて、あなうるはしの花や。つくろはぬさまのゆかしさよと、いたくめでさせ給ひし菊の、ことしもまたかはらぬいろに咲き出で、匂ひさへたゞならで、人まちかほなるもさすがあたらしけれど、おのれのみながめんも、いと口をしさに、露ながら手折りてまゐらす。あはれとだにはしたまはらむ花もいかゞかりかられしかるべうなむ。

人　伊勢宇治山田町中之切　河村君子

この菊の花、ひと日ふた日まへより、まことの匂ひを知らんものと、色にあらはれ侍りぬ。されど、我れひとりこの秋をしむるもいと惜しく、人にもがなと思へど、我が心の色香を知り給ひて、親しき交も、幾千代かはらぬ君ならずして誰にかは。

人　肥後國菊池郡城北村　佐々有鄰子

花の隱逸なるものと、むかし唐國人のめでたりしもうべなりけり。秋ふかき露をかざして、まがきにはふらむ、いとうるはしく香さへなづかし。八重九重のゆるしの色をはじめ、黄なるも、紅なるも、斑なるも、さては、白妙の雪にまがへるも、けんをあらそひて、えんをきほひて、今をさかりの菊を。

朝露のおきいでゝみれどとりどりの
　玉をかざして菊の花さく

ひとりしてめでむも、心なきわざなれば、玉たれのをがめにさして、御もとにまゐらす。無禮のはざと、などがめたまひそ。たゞ例のこゝろと見なほしたまひてよ。あかなしこ。

（以下原稿到着順）

稲原蓋子

秋もやゝ更けゆきて、虫の音もよわりゆく此頃の物さびしさ、いかにすくさせ給ふらん。日頃間は侍ざりし罪は、よしなにゆるし玉へかし。さて去年より前栽に土かひし菊のあはれさ、白きは芳野の雪の如く黄なるは玉川の露にも似て、いと美しき花のいろいろ、今を盛りと咲き香ふ床しさ。獨り眺めんもいと心なきわざなれば、一本送りまゐらせぬ。あはれ、君よ、萬代の霜にも枯れぬ此菊を、文讀む窓の友となし、いよゝいそしみ勵み玉はゞ、いかに嬉しうれしからん。かしこ。

松村壽賀子

いつしか、木の葉もおち散りて、何となうもの淋しきなりから、御もと樣にはいかゞにおはしまし候ふらん。先づこのこと伺はましましうなむ。こなたは、みな事なうすごし侍れば、御心やすめ給ひてよ。さて、昨年より心にかけおき候ひし白菊、此の頃、いとうるはしうさき出で候ひぬ。ひとり見過さんもほいなく、御文机の友にと一枝御送り申上候。あはれ、菊も古人にはこよなうもてはやされしを。今は潔きみさをなめで、露のかほりなしたう人の、いとまれになりゆくなむ、くちをしきさ、はしたなき事をさへ、心にうかしみまゝかきそへ申候。例の御心に、みゆし給ひてよ。かしこ

北島功子

稲葉そよぐ秋風に、いさゞうら淋しき昨日けいふかにすぐさせたまふ

らむ。其後はさかうさりまぎれ心の外の御無音、こたびはまげてゆるさせ給へや。此許は露變なく暮しなりはべり。さても、あさの年より消閑の一節さして培ひそめし籬の白菊今年は思の外育ちよく、輪さへおほきやかに咲きみちぬれば、此程より、朝な夕なのなぐさめ草さして眺め暮しなりはべりしかども、かくて、日毎を一人眺めて、いたづらにうつろはせんも、なか〳〵に心なきわざにははべり。殊には日比より、君には此の花の香をおほかたならず愛でさせ給ふさかや。けさ開く露のまだきゐやらぬ一枝を折りて、御ほさりにまでまゐらするになん。あはれ、床きし君が御手振にためなをされ、御笑覬の後は御詠歌一首附せられたまはらば葎が庭に生ひいでしこの花の榮譽いかばかりならむ。げにわがみまでのめいもくになん。あなかしこ

福島しん子

平かにおはしますや。寧にまきれての怠り訪ひ參せさりしは、廣き御心にゆるさせ給へ。さても軒端にこさゝふ秋にさそはれて、手草のいろ〳〵咲きにほふ中に、去年うつし植し菊の、花、はやあはれを知りそめて、蓬の宿も見所あるやうに、なく虫も菊の花笠うちかづきて、節面白き歌うたひ出で候。さもあれ朝な〳〵おく露も宛らの色にみゆるが又なくおかしければ、君ならでご白く清けなるを一枝參せ候。この花あはれさ見そなはさば、松虫の下に戀ふ音を思ひやらせて一夜おはしませ。ぬれて折る袖に月影やささんもおかしうはべらずや。いかで〳〵、かしこ。

田中俊子

水無月のてりはたゝく日も、ひたすら後の樂を見んさて、日々花園に通ひ侍りしかひにや、此の頃は、白菊き菊打ちましりて、今をさかりさ咲きそろひ侍りぬ。二もさ三もさ、御許へもたせまゐらせつれは日頃好み給へる生花の料にもせさせ給へ。わらはのよろこびのみかは花も喜び申しらんかしこ。

内野千代子

秋風もいさゞ身にしむころさもなり侍りぬ。したしき君にはいかに過せ給ふらん。先つみけしき伺ひ奉る。次に庭の菊花こさしもやう〳〵吹揃き侍り。御兩親樣には此花いさいたうめでさせ給ふよし承り侍り、おなぐさみにさ一枝まゐらせつる。もし御老親様方の、千代の御かざしさもせさせ給はば、姿のみか花もいかばかりか嬉しう候はんかし。あなかしこ。

田中ゆさ子

己がこのめろわざさて、照りはたゝく夏のあつさもいさはで、朝に水かけ夕に土かひ、おこたりなくはごくみ侍りしかひには、けふ此頃は紅白いろさま〳〵に吹き初め候ひぬ。あたら花を、ひさり見んも、いさあかぬ心地し侍れど、さればさてあるしまふけなどして、まらふどまねく程にもあらねば、如何はせんさひさり心をいため居りしを。したしき友にはかれてより某君の許にさし花なんさまなばせ給ふさか。氣も香も見處無き花なから五枝はかり參らすれば、その料さもせさせ給へ。うるはしき花かめにさし入れられて御床の端にかざらるれは花もうれしく思ひ侍らんかし。

坂井ため子

心さへ晴間なき空のけしきにも侍るかな。いかにおはしますらん。同じさまにながめ暮させ給ふらんかし。此の菊はわざさもつくろひたて侍らぬけにや、早く咲きいて花もこよなく大きくて中々見所侍るに、朝霜のむちぼれたるさまいさおかしきにつけても、同じくは心しれらん人にさ、まづ御わたりゆかしくこそ思ひ給ふれば、いさしたり頃になん。あなかしこ。

代年子

其後は、いかに過させたまふらむさ、御案じ申しなり候折から、けふはわざ〳〵御車よせたまひし由、生憎にも、けさの空もやう、余り長閑なるまゝに山踏せんさ、妹らにそゝのかされて出にしあさにて何さも殘念におはしまし候。付ては、けふ遊びし山に、吹亂れし白菊のけしきいさもあはれ深うて、見る人もなき谷かげに、やがて枯んもいさほしけれど、まだ見ぬ人の爲家包にさて手折りきぬ。御なぐさみに一ト枝捧げまつる。御机上の瓶にもさし給らば、こよなう嬉しうなむ、あなかしこ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

岡伊勢野子

秋の野に色香きそへし、女郎花、藤袴など、名ごり忍ばん影たになく、虫の音も細りゆくあはれはいとゞ身にしむきのふ今日、あさまだき起きいでゝ、ふと庭に出づれば、いづこともなく、得も言はれぬ、香のさと風のたよりに送りこすつ床し。ぬしや誰とたづぬれば、昨日迄まだつほみなりしまがきの白菊なりき。まづうれしくて、我しらずほゝ笑みつゝ立ちよれば、さてもゆかしきかな。ひとりほこりかにほころびてあさつゆむすぼれ、枝ふりのびやかに、葉みづ／＼しう、花の優に氣たかく吹き出たるさま、たとへん方なく、きのふまでは我庭ならあれはてゝいとうとましかりしを、今朝は何となくなつかしく覺ゆるもおかし。あはれ、其花のうるはしう露霜にもやつれず、咲きいでたる、其操は松のみどりにもなど／＼劣らず。女の道になぞらへけるもげにうべなるかな。昔より、四君子の一として數へられ、はたやんごとなき雲の上の御しろしとはせさせ、たまひける

かゝるめでたき花を獨りめでんも本意なければ、一枝手折りて參らするになん。あはれ、有情の友よ、花のこゝろをくみたまひて、けふの御活花の料ともなしたまひてよ。花も、いかに嬉しかるべく、又姿もこよなうなむ。

さきいてぬ折りてや君に送らまし
かほりゆかしきしら菊の花

田中すゞ子

たが玉章をや、かけてきつらん。いと聲たかうなきつるゝ雁がれに、夢驚かされて、ねやの板戸を、おしあけ見侍れば、霧たちこめて、ほの／＼と、まだ夜を殘したる庭面の、あやしうも、なつかしきかをりするに、何ならんと心ときめくまゝ、いそぎおりたちて、そがまに／＼誘はれ行き侍りしに、咲き後れたる朝がほの、いとかじけたるが、かくても、束の間の命の、暫しだも長かれとや、祈り侍るらん。様もあはれに、散り殘りてまばらなる葉かげに、かくれつゝ、袖垣をたのみと這ひすがれるたかへに、己れのみはさいふらんやうに、いさぎよくさき初めたる白菊の、花の時しりかほなる、いみしうおかしうおぼゆ侍る、あはれかゝるをひとりのみながめて、何かはせん。色香しり給ふ御あたりにもとて葉末の露もおとさじと心して手折り侍りぬ。

露ながら折りて送らんちりの世た
しら菊めづる君があたりに

朝とく、かゝる使に驚かしまゐらせんは、いとはしたなく、なめげなるわざともおぼすめれど、露のかわきあへぬ程こそ、殊にしほらしう例の優れたまへる御筆の葉の花も一しほ色香めでたく咲き出づべけれとて、なん、かくはいそき侍る。よろづは、やがてさぶらひて、御まのあたりにてこなと書き殘し侍りぬ。あなかしこ。

新藤雪子

我手植せし菊のやう／＼咲き揃ひたれば、御許様は、日頃花の中にてもとに菊をめでさせ給ふと聞つればよき便りにまかせ、ひともと二もとまゐらせ候。手作りの事とて花ぶりあしう御意には召させ給ふまじければ、御文机の友ともなし給はらんには、花のみか姿のためにもこよなき面目になむ。かしこ。

木川里子

悠然見南山とやらんの、唐土人の古を學にはあられども、好めるまゝに手すさみの菊の花春より心をいれしかひありて、さいつころよりさき出て今を最中のさかりにて、みるかげもなき庭もまがきも、見處あるこゝちせらるを。一人見侍らひもあたらしうをもひ給ふれば色も香をもしらせたまへる君にもと、一本をりて御らんぜさせ侍り。もとよりうひ姿ひのつたなさは面赤らむわざには侍れど、栗を汲めば溢すとかきゝ傳侍へれば盛ひさしき花の命に習はせ給はんやう、父母の君の千歳の御かざしとも見そなはせ給はばこよなき本意にこそ。老がかるとはひとり梅花のみにも侍るましうなん。あなかしこ。

德永広子

露をかざして、咲いでし菊きのふけふを眞盛とぞおぼゆて侍る。かれてのやしなひ思ふまゝならぬゆゑ、枝ふりなどはみにくゝ侍れど花の多

くふさやかなる。其色の一本ごとに、ちがいて、さきいづろさまを只一人ながめたのしみて、朽ちはてさせんも、いと惜しく、おもひ侍れば二もと三もと遣らせつる、かれて御好の生花の、料にもあてさせたまひなば、いかばかりか嬉う侍らん。あなかしこ。

河方喜代子

朝な夕な土かひし菊のやう〳〵一二りん咲き出てぬ。此年はいぬる年よりは、すこし見ばへあるやうなり、されば一人してながめむも何となうをしき心地せられて、いかで御許と、共にながめまほしとおもふものから、其の折にあはず今は唯一二枝まゐらすれは御手いけともなし給ひてよ。妾にとりても花のためにもこよなきさちになん。あなかしこ。

宮田秀子

庭の千草も、虫の音も、枯れてさびしくなりけるけふこの頃、ひとりおくれて咲きいで候ふしらぎくの、霜にほこれるさま花の聖人といひけんも、げにことわりぞと、いひしらずけだかくおぼゆられてなん。年のうちにこれより後の花はなしと、昔の人も咏みけん、まことに花の深きばかり美しきはなし、あはれ、しらぎく。あはれ白ぎく。人のみさをもかくてこそと思ふにつけても、見る人なくて、いたづらに散らさんことのいとをしさに、一もとたてまつる。土かふをさへ、怠りがちなる園に咲きいでし花の、見どころなきは御あたりにはふさはしからねど、つゆ霜にうたれつゝ、色あせぬやさしさを、あはれとみそなはし給ひなば、こよなき花の幸にこそ。さても拙のみぎはに咲きそろひたるが、露にたわめるさま、あるは、いはほにそひて、咲きみだれたる中に、こがれ色なるが、うち交りて見ゆるなど、なか〳〵に、可憐らしき景色にこそ。あはれ咲ばとのたまひし御言の葉をしも、惜しみ給はずば、御道行ぶりには、かならず立寄らせたまへや。さきつ日うけたまはりさしつる、かの御ものがたりの殘りも、ゆかしうてなん。あなかしこ。

三野てい子

今日か明日かと待ちかれし別莊の庭の菊花、この頃にいたりて、やう〳〵さきそめ候。今年は野分風の障りもなくいとめでたく、花守の心つくしも今更申すまでも御座なく候。此の花は、秋草の内にて色も香も秀てて、霜に撓まず、操のけたかきは、なか〳〵に、春の花にはおさらざるべし。ここに、賤か垣根にみゆるは、一しほやさしくなつかしく、たれも〳〵、賞はぬものは無之候。中にも黄なると、白きとは、うつくしくなかしう候。御許様には、千草の内にわけて愛でさせ給ふ御心、かれて存候まゝ、私のみ見はやさん事は、花の爲にもいかがと存し、朝露のまゝさみに手折らせて、兩三枝持せ上げ候。もし文机のかざりともなしたまはらは、花の面目はさらなり、妾のうれしさ、いかばかりにかはかられがたく候。天長節のころには滿花と存せられ候。御いらせられずや。御相手には、友だち秋子様満子様なども御招き候申すべく候へば、たのしき御物語も多からむと存候。其節は御許様の琴一曲是非承り度しと母も切にねがひをり候。かしこ。

河原芳子

さびしき秋のながめにもと、御許と二人して、咲きなば共にと契りつゝ植ゑけむ庭の菊よ。いさうろはしうひらきそめたるころより、日毎に御越しをのみ待ち詫ひすぐるに甲斐なし。今は、なか〳〵に、花のひらくものうくて、この色香を、われひとりながめんことの本意なう思ひ侍るものから、二株三株ゑりとりて、贈りまゐらせ、せめてもの心やりに別れても同じ花をながめまほしうてをこがましくもかくなん。かしこ。

中村さく子

夜來の雨、乍ち暑さを洗ひとりいさう、新涼をおぼゆ候。御許様には御かわりもなう入らせられ候よし、何より芽出度存じ候。さて私事まなびのひまのなぐさみにと、昨年始めて菊花培養を試み候ひしも、始めての事とて、中々に出來あしく候ひき就ては今年は、更に諸所よりめづらしき苗をとり寄せ、朝夕土かひ水やりなどせし志の程見ゑて、前年よりは、花も大きく色も香もゆかしう咲き出で候、二枝三枝手折り、机下にけんじ參らせ候、萬一御花の料にも相成り候はば、こよなき幸に候、一兩日の内御手すき見合はちせられ御入來下され候はば、さひた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すら待入り候かしこ。

泉さい子

桐の一葉のちりそめしより、淋しさの日々にまさり、この頃は秋のけはひもいよ〳〵深うなりぬ。ひれもす敎の庭にかよはせ給ひなしへみちびきたまふ御心つくしのほどおしはかられ侍り。何なかな御心慰むるはしにもと思ふ折から、咲きいてたるしら菊一枝、こゝろばかりをもうけたまへ。あはれ、この花びらのまはゆからざるは、育てしおのれの罪にしあれば、雨にぬれ風にいたみ幾日ひの愛なしのぎ、咲いてつる花の心、あはれともみそなはし、淸らなる君が文机の、かざしともなし給はらば、花もひとしほ匂ひをましこよなき幸ならむ。御心ゆかしのはしにもならばと人してきこえまつゝゝになん。

坂田喜美子

虫の音もやう〳〵かれ〴〵になりて、霜白うおきわたし、心なき身に秋のゆくゑのあはれをさまざま思ひ出され侍るを、そこには、いかに過させ給ふらむ。折からうつしおきし、前栽の黄菊しら菊、とり〴〵に色香をきそひ、われはがほに咲き出たるをかしさを、ひとりかざゝんも本意なうおぼえ侍れば、一枝二枝手折りてまゐらする。あはれ、秋のわかれの御心やりにも、千代色香のめでさせ給はらば、花もこよなき幸ならんかし。

名取正代子

むくらはふまがきの中に咲けるものから、しかすがに、にほひかくれぬ此の菊の花に。昔つかたより、いかで〳〵とおふし植ゑてしあるじの心づくしをばしろやしらずや。白菊のよししらずとも、それといはぬ色さへ露に見えつゝ匂ひ出でたるうれしさ。われからほこりがなるもいかゞなれど、かゝるめでたき菊をよもぎが宿に匂はせて、獨りながめんもあたらしう侍れば、けさ〳〵に露ながら手折りてまゐらするになん。一枝となおぼしすてさせ給ひそ。菊の花には、千代のこもり侍らんものを。なほあさての九日にはいさゝかうたげのむしろをひらき、仙人の齢のぶとは菊の盃とり〴〵にくみかはしつゝ、千年へぬべくめではやさおもひ侍れば、いかで御車まげさせ給ひてよ。かならずと、まちあげ侍るになんあなかしこ。

西川順子

立田姫の心盡しておりなしたる紅葉の錦も、つれなき時雨にやゝ色うすれ行きて、四方の山邊もうら淋しう眺めらるゝを、御わたりにはいかゞ過させ給ふらん。かれてうつし植ゑしころより契り奉りし園生の菊ことしは父が丹精にて例の年よりは花輪も大きく君の好ませ給ふ白菊のことに勝れて覺えらるゝまゝ二三枝手折り侍りぬ。御文机の邊りに置かせ玉ひて、學びのわざをいそしみ給ふ御暇々の友ともなりなんには、其よろこび花ののみにては侍らずなん。夕月のなつかしき此頃あれし垣根もひとしほあはれ深う侍るを御いとまのふしとはせたまはゞ、いと〳〵嬉しうなん。あなかしこ。

三月かなめ子

朝な夕な學びの暇もて土かひそたてしまがきの菊の、今朝しも、やう〳〵ほころびそめぬるを、一人にて眺めはてんはいと本意なく思ひ侍れば、したりがほにはあれどうつろはぬ間に一本手をりてまゐらする。かゝる折には人なみによからずとも歌よみ出でゝまゐらせまほしうは侍れど、及ばぬ業とゞまり侍りつ。御秀歌よませ給はらんには色香もさしそはりぬべくこそ。あなかしこ。

月野さへ子

虫の音もいとしげくあれはてにたるそのふの方より、風のまに〳〵おかしき香の通ひ來るに、あやしみつゝ草かきわけて行見れば、あなゆかし。此花のみさほのすがた美しう朝日かげなば、笑みてむかふるかんばしさなど、一人のみやは見はて侍るべき。やどる露さへおとさぬやうに手折りていそぎ御文机のもとに參らするを、あはれ、文机のかたはらにだにおかせ給はゞ花のみかは己がうれしさ、せまきたもとにはつゝみあまり侍らまし。

月野あき子

今朝、とく起き出であけ行く東の空をながむる折しも、すゞ風とも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に、匂ひくるゆかしの香にいぶかしみつゝたつれ行き侍りしになかばくちし袖かきの許に、なよなよしうも匂ひ出でたる白菊の、霜の花さへ咲きそへて、いとゞゆかしう我のみ見あかんも、口惜しき心地のし侍れば、二三輪手折りてまゐらせ侍り。もし小瓶についさし一目たにながめさせ給はばいといたくなん。あなかしこ。

大谷奨子

いつしか、野邊の景色かはりはて、千草どもはなべて色つきそめぬる頃、いかゞおはすらん。

けふしも亡き母の日がらなればいと花折り手向んものと、朝とく起いでみれば、おきあまる露にも、ろこしの陶淵明ならねども、日頃土かひめでし白菊の花は、いとおもげにうるほひてあはれなるを、一枝二枝手折りしなりから、ふと思ふやう、かゝる枯れ行く秋の庭に、ゆかしきまで香ひあまれる白菊の千代の操を、あらはしけるなれらは、貞女ともよふべきか。そを、ひとりもてはやさんも、本意なきわざにてはべれば、たゞひともとには侍れど、御秀詠の料にもと參らすになむ。

來柄登美子

青葉の木かげ涼しかりし夏の日も、いつしか過ぎて、籬の朝顏も、肌寒き秋風の吹くまゝに、一日〳〵小さくなりもてゆきつ。萩の下葉の虫の音も一夜〳〵にあはれいやます心地せらて、何れも衰へがちなる我園にひとり此花のみは吹く風をよそに露にも霜にもたわまぬ雄々しき心をあらはして己れ慰めがほに打ちゑめるさまのいとゆかしうなん。さるを露けき葎のやどに生ひいでゝ誰れ一人きて見ん人もなきをいかに此花の本意なう思ふらん。あはれこのまゝに打すて置きなんにはあたら色香を、いたづらに谷の埋れ木となさんことのあたらしう思ひはべれば花のことなるを一枝づゝ手折り參らせつれば御花瓶にもものし給はゞうれしうなん。且は此花共も蓬のやどをはなれて玉しきの美はしき御花瓶にさゝれたらんにはほいかなへつるこゝちやせむとうれしうなむ。あなかしこ。

村井亮子

明日は、君が生日の足日とて、いとけなきむかしより、ともに数草つみてし友垣招き給ふみむしろのすそに、つらなる身のうれしさや。ひと日は、一日より秋ふかく、今は漸う〳〵秋果てかたとなり、萩の下葉も一いろくちはて、尾花もあはれうちふし、やう〳〵うら枯そむる此頃園の白菊例の年よりもいとすくやかにさきいて、露をも霜をも何とも思ひけちたるさま、たくひもあらすいとうれし。陶淵明は、ま垣の下に菊を植ゑて翫ひのともとせりとか。あるは菊の下水掬へは齢をのぶなど、かぐはしくめでたきためしすくなからす。されは、君が齢のあやにかしこき神のみ惠みに、みしめ縄なかき世かけてたのみ參らするみむしろの花瓶にも物し給へらばと、二三枝取揃へ送りまゐらするになん御言の葉の玉の光をもそへさせ給ひなばいとなん榮あるべき。まつはほぎことに添へてかく。

村松ゑつ子

海山へたてたりとにはあられども何となく御遠々しく成りし頃のつみふかう候。定めて、日夜御勉學の御事とうれしく存じ上候。さてこそ設けし前栽の菊、朝夕のやしなひもおこたりがちにすごせしをあめ地の御めぐみにみつるにほひてひとり君子の名にたがはず、しもかれ果つる昨日今日、白ぎく黄菊打まじりいまをさかりと咲きそろひ候をいたづらにすごさんも不本意に覺え候。學の庭に物する身もすめらみかどの深き惠みに浴しつゝ一しほ、わざをみがき得て花と色香をきそひつゝにほへる花の下かげに心隔なき友どちとうたの會など催したらんには實につゆの間のあそびにも千年をへたる心地して如何にたのしかるらんと花につけてのおもひを一筆かきそへ申候かしこ。

目黒佐喜子

去年の秋さる家に菊見にとてまうで侍りける折たぐひなき其の色香を床しと思ひしめてき。いかでおのれもと思ひ立ちそが作り樣をも傳へ聞きしまゝに、今年は其苗を乞ひ春の頃より心してつちかひ侍りし甲斐ありて、此の頃やう〳〵咲き出でしを、一鉢まゐらせ侍り。御居間の端になと据ゑて眺めさせ給はらば花も如何斗りか榮ある事と喜びまつらむ

かし。なほ御暇もあらせ給はゞ、花壇の露の姿をも見に渡らせ給へや。

香川穎子

年頃わが手しほにかけてそだてつる菊のことしは、殊に枝ぶりをかしう花も大きやかに咲き出でゝ、清きかをりは庭にみちく\して候へど、いまだ、一度も心ある人に訪はれねば、われさへにいと栄なき心地し侍るを。まして花はさこそ口惜しからめとくちをしうなむ。今朝は露ながら二三枝手折りて贈りまゐらす。さるはこれの美はしきにめでゝ、よそにのみあくがれ給ふみこゝろにも、一たびは我家の秋をたづねたまひてと、ほのめかしまつるのみにも候はず。かしこ

宇高まつ子

父なる人、おのづからのものをのみ、つれにこのみけるが、この菊も、ある山里より贈らせよせ、日頃土かひ、水注ぎなど老のたのしみに生ふしたて侍りしが、漸咲でたるにて侍り。花の色香もいみじとにはあられど、わざとならぬが、なかく\に哀にをかしく覚えられ侍るを、独りめでんもいと惜しく、かつは、父の心づくしの程も、みねまゐらせむとて、かくは弐もと三もと、手折りてまゐらすになん。をこなるわざとな笑ひ給ひそ。かしこ。

長谷川松枝子

いにし春の手すさびの花こそ散らめと植ゑおきしまがきのあたり、昨日けふわたす、露にきほひて、にほひ侍りぬ。日頃おこたりがちにのみなむはへれば、匂ひもうすく千年の秋などはいとをこにはへれど、ひとり見はてむもはねなければ、来む九日には、心知れるどちうち具へて、歌に文に、せめては[illegible]の花の色香をさへまほしうなむ。よろづさしおきたまひて、午すぐる頃より御車まけさせ給ひてよ。御もとそゝのかしまゐらせんとて、露ながら一枝手折りてまゐらすになむ。かしこ。

野中あさ子

おのれ、もとより菊の花をこのみ、年々に植ゑこゝろみ侍れども、まなびのひまのわざなれば、よくも生ひたゝず。いつしかこれはと咲かせまほしとおもふ折しも、今年の春、東京團子坂なるしたしき友より、三弥ばかり贈りこしゝは世にもめづらしき種との事なれば、いとうれしくこれぞ心のまゝに生したてんと、植ゑしよりあらかねの土もさくてふ夏の日もいとはず、土かひ水そゝぎ、野分たつ此頃もそこなはじと心づくししかひありて、昨日けふ、おきまさる露と共に、にほひ出てぬれば、この山にはにてひとりめでんもいとほしく、さても君ならでたれにかはと、二もと三もとたをりてたてまつるになむ。かしこ。

由井なみ子

ことしも、例の手すさびに土かひしきくの花、今をさかりと匂ひ侍るをひとりのみながめんも、ほいなくあかぬ心地し侍れば、ゆかしき言葉の匂ひも添へ給ひねかしと、且つは、もゝ草の花のとぢめときく花なれば、一枝送りまゐらすになん。あはれ、文机の上の友となしたまはゞ、花のみ面目のみかは。あなかしこ。

二宮壽枝子

七種も、やうく\かれがたになりて、今は花のみぞ庭にのこれる。此花の後には花なしとか、漢人のいひしごとく、霜おく秋の末にものこりてこしならぬは、世にも屈ざる様に似て、いとゆかしくなむ。[illegible]知らせ給へる如く、おのれ、もとより草木の花を好み侍り。中にも、殊に菊をめでゝ、つれに水やり土かひなどせし心つくしのしるしありて、先つ頃より、一日一日と咲かゝり、今はまだなりとて、つくろはぬ枝ぶりもあはれなるに、露にむすぼうれたるさま、いはんかたなくひとり見はやすはあたらしうおもひ給ふれば、いとしたりがほには侍れど、色をも香をも知る人こそと、一枝手折てまゐらせ侍れば、露のひぬまの御歌の料にも、なし給へかし。さればおのれのみかは、花もめんもくになんかし。かしこ。

日野れき子

すぎし春より、老いのすさびにとて、ちゝが物せし白菊こよなき出来には侍られど、落ち葉がちなるけふ此頃の庭の面には、いさゝか見所ある心地せらるゝに付け、年頃共に學びりしものから妾などの及ぶべくもあらぬ君の活けさせ給ふことと、又例のめでたき御言の葉のたれともならんには、花のためこよなきはへならんにと、云ひ出つればちゝもいみじ

うほいがりて自ら庭に下り立ち、これやよき。彼やよからんとて、折り與へつるまゝに、かくおくりまつるになん、あなかしこ。

川上けい子

秋たちしよりいつしかとまたれたたけしそのふのきくの、こゝろをこめししるしにや、去年よりもうつくしうさきいでゝ、木枯の風もよざげにうちかをるさまいはん方なく侍れば、君ならで誰にかはとつゆのひぬまに一本手折りて御覧せさ侍るになん。あはれみやびの御言の葉などうちそへてながめさせ給はゞ、こゝろなき花も、ひときはいろはゑてにほひもいよゝまさりぐさのまさりてぞ見ゑはべらなん。かしこ。

根來はな子

秋たちぬと思ひしはきのふけふのやうに覺ゑ侍れとひまゆくこまの足のはやさに、はや最中にやなりにけむ。荻の上風身にしみてつゞりさせとなく蟋蟀はいふもさらなり、くさ〳〵の虫の聲もたゑ〳〵なるにみそらゆく月さへさゑわたり侍れば、物おもふ身はなか〳〵にかなしくふきすさびたる野分のあと砧の聲に心うごかされて、身の上よりふるさとのはらからのことなどちゞに思ひみだれていねられず。東の空漸くしらみ渡りければひとり庭にいでゝ露ふき結ぶ朝風に袖かへしつる折りしもふとまなこに入りしものこそ侍れ。そは唐人も深くめでつときゝ侍る花の君子と云ふなる菊の、東籬に咲き出でゝ霜にたへてひとり色濃かなるにて暫しうきをも忘れ侍りぬ。まゝなる身ならば、君まれきてともにめてましとおもへとも、病める身にしあれば、なか〳〵に心のまゝならず。さりとてこのまゝにうちおかんも口惜しれけば、一枝折りておくり侍るになん。

秃眞澄子

時候柄さらぬたにかなしき秋の空なるをふりしきる村雨にいふせさやる方なき昨日今日、如何に御暮させ給らむ。こゝもと、春頃うへし植ゑおき侍りし庭の菊、時を得かほにところ〳〵咲初しまゝ、あたら花を唯一人して樂しまんも いと本意なく、兼て菊を愛で給ふと承りつるまゝ一本二本手折御送り參らするになん。床にかざり給ひて徒然の御なぐさめともならば、いともうれしうこそ。あなかしこ。

秃八千代子

秋も末になりて、寒さをおぼゆるばかりに相成候。如何、御くらし遊はし給ふらんと、御噂のみにて、御文もさしあげず。ひろき御心には例のとゆるし給ひてよ。扨かれて御話し申上置候庭の白菊もやう〳〵に咲き初め候まゝ、御なぐさみにと御送りまゐらせ候。あはれ御詠吟のたねともならば、こよなき幸と存候、あなかしこ。

戸塚鐵子

九重の菊の御壽、幾千々の秋も限りなう申納め候。まつ〳〵、皆々樣打ちそろはせ、御平らに御嘉ぎの御盛宴ひらかせ給ふ御事とめでたく存じ上候。扨も植うる時は、花待ち遠く存じ候庭の菊、今をさかりとさきみだれ、色香は薄く候へども、御手さしの料にもと、且は千とせの齢を延ふと申す習はしに候まゝ、一本御祝ひの印までに進上致しまゐらせ候、何れ參上よろづ申上べく候。あなかしこ。

村上みさを子

松菊猶存とかはなにかし翁のいひしと聞きさしにきゝつれど、實にもをりにあひてむかしの人をまちつけし色香は、いかばかりうれしかりけむとおもひやられ侍り。そも〳〵、花のさかりはいふべくもあらず千種もゝくさあともなく霜にかれぬる庭の面、にひとりかんばしき秋の匂ひを殘せるみさをには、誰もあはれまほしうおもひ給ふる。さて我庭のも今をさかりとおもへばはゑなき色ながらみもとふたもと 手折てまゐらすになん。「菊の花數ならねども千代をしも君にとおもふ心なりけり」あなかしこ。

北原季子

千草の花はうつろひゆきて、見るかげもなき淺茅が庭の籬がもとより、いひしらぬ香ぞ薰り來れる。偖はと、露ふみわけて月にすかせば、うれしや白菊の二もと三もと咲き匂ひたる、袖ふらさじと打眺めつゝ「今日こそなりて菊造らんと思ひけり」との句幾度となくくりかへし侍り。今朝まだきおく霜打はらひつゝたどりゆけば いとゆかしくも千代の色

こめて咲きまさりゐたれば、一枝折せて差上げ奉りぬ。其枝ぶりのあいなきさこころは見のがし給ひて花の心をあはれさおもされよ

なか／＼にあはれさおもへあれはてし
籬がもさにに匂ふしら菊

關根美津子

打ちたゐて訪ふ人もなき柴のいほり近く、つゞれさせてふこうろぎの秋のふけゆくをいたみてか、聲もかれ／＼になくしきろ。あはれ、奥山に妻こふ鹿の音の、なりなりわびしき夢をおごろかすさへあろに、まいて、吹きすさぶこがらしに山々の木々は錦かざりしきのふの俤もさゞず。たがはきすてけん藤袴の見まこふまでに色あせたる人目も草もゝさいへけんも、かくやさ思はれていさあはれ深し。そがなかにいさうろはし咲き出でし前栽の白菊ぞ、わりなく得しや。菊は花の隱逸なるものさてやんごさなきひじりにもなそらへ愛でにし唐人のふろ事も忍ばれて、いさめでたきに、霜に匂こりて操をかへぬ、其けたけさ世の女達の法さもかゞみさもせまほしく、いさ床しき姿のすてがたく、かれてさも／＼に行末のこさなご誓へてしも。いまはしき秋風の世の人の心にまで吹きすさむ折から、いかにやさも思ふめれば、さりさて定めなき浮雲のうはの空にも吹き迷ふあだし風にも、なか／＼に靡くまじきかくこの程も告げまゐらせ、また愛でたさ言の葉のきかまほしさに、ふたもさみもさほりさりてまゐらすになん。あなかしこ。

秋草見に友を誘ふ文

片山あや子

ふりつゞく時雨も、やう／＼はれ渡り候へは、秋野のなかめさこそさ思ひ居り候折から、某野の千草は、今を盛りさ咲きみたれて、逕かもさに鳴くむしもいさあはれに、月の夜は葉末のつゆにてりそふ風情も、興ふかき有樣さ、承り候へさも、これもかれも心あひだろ友なくては、たつぬろ甲斐もなき事さおもひ暮しなり候。あはれ御いさまもあらせられ候はゞ、山姫の衣のもやうのあせぬ間に、御たさり遊はされ候ひては如何に。一寸御うかゞひ申上候。かしこ。



◎女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　…………、……………………、……………………。……………………、……………………
住所　姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　……………、……………。……………、……………、……………。……………、……………、……………。……………、……………、……………。
住所　姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三輪田眞佐子著

第七版

女子の本分 全

本邦固有の道德に基きて、我が國の婦女が盡すべき本分を明にせるもの、之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす。本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは、世間既に定評あり。敢て贅せず。再版三版忽ちにして賣り盡し、四版五版猶需要を充すに足らず、從て出れば從て盡き、諸孃が一日千秋を以て待ち給ひし第七版は今や漸く其成を告ぐ。購求せんとする諸子は、此の際至急申込まるべし。所載極めて廣大、試に其の目次を示さむ。

定價金二十五錢
郵稅金六錢

目次

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

西村茂樹翁序
三輪田眞佐子女史著

第四版

女子處世論　全

菊判美本

定價二十錢　郵税四錢

本書は女子教育に有名なる三輪田女史が日常實踐躬行に徵し女子たるもの丶世に處するの道を詳述せしものにして字々皆着實に句々悉く誠意に出で一も虛構の文字なし世の令孃達此に依りて益々女德を養ひ以て神州國民の慈母たらんことに資せられんことを

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話番號本局八八）　國光社

生田目經德編

標註 雅文消息集 全

●菊版美本
●全一冊
●定價金廿五錢
●郵稅四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艷麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもその躰大にとゝのひ雅馴にして艷麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側におきて摸範となさば益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社

再版

家庭の鑑

菊版美本　全一冊

定價金拾八錢
郵税金四錢

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦、の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のものは或は勅定の綠綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれば皆是人の子弟婦妻の模範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれば其情味の津々たる實に小説を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の教育家父兄及子弟婦妻の坐右には一日も此可憐の書冊無かる可らず家庭及學校にも亦必此種の冊子を備へざる可らず、

發行所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地（電話新橋八八）　國光社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

伯爵佐野常民君題字
子爵品川彌二郎君題字
子爵松平乘承君序文
華族女學校幹事淺岡一君序文

藤井玄溟著

明治の女傑
慈善の泰斗
瓜生岩

定價一冊金貳拾錢
郵税四錢
代用郵券一割増

世に慈善を以て名あるもの多からざるにあらず然れども婦女の身にして能く有髯の男子を凌ぎ之が旗幟を翻すものは甚少し

瓜生岩女は渺たる一婦の身を以て畢生七十餘年間一日の如く社會の爲に國家の爲に粉骨碎身し以て**天下百世の龜鑑**を埀れしもの岩女を推して**當代の女傑**と爲し**慈善家の泰斗**となす豈過稱ならんや**本書**は其畢生を叙せし者なり

讀め！本書を讀め！天下の人士一度本書を讀まば貪婦も頑廉に惰夫も猶起つべし**請ふ本書を讀め！**

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　**日本赤十字發行所**

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	拾錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊前金(半年分)	壹圓	
全國無郵送料		

明治三十二年十月四日印刷
明治三十二年十月五日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地　並木良雄

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　(電話番號新橋八八)　國光社

（明治二十四年八月四日内務省許可）

妙技一等賞牌



金製寶石入指環

- 第一號　ケンドルビー入假四圓半ゟ拾五圓迄
- 第二號　アレキサンドル入假拾圓ゟ二拾圓迄
- 第三號　エメラルド入假八圓ヨリ二拾五圓迄
- 第四號　眞珠入リ假二拾五圓ゟ百二拾五圓迄
- 第五號　キヤツアイ入假拾五圓ゟ參拾五圓迄
- 第六號　眞珠入リ假七圓五拾錢ゟ二拾五圓迄
- 第七號　エメラルド入假拾二圓ゟ參拾參圓迄
- 第八號　オパール入假拾圓半ヨリ參拾五圓迄
- 第九號　色サフヤ入リ假八圓半ゟ二拾五圓迄
- 第十號　色サフヤ及眞珠入假拾圓ゟ二拾圓迄
- 第十一號　ルビー入假拾五圓半ゟ四拾五圓半迄
- 第十二號　眞珠及サフヤ入假拾圓ゟ參拾五圓迄
- 第十三號　色サンヤ及白サンヤ假拾圓ゟ卅圓迄
- 第十四號　色サフヤルビー假拾五圓ゟ四拾圓迄
- 第十五號　ダイヤモンド眞珠假卅五圓ゟ二百圓迄
- 第十六號　ダイヤモンド色サフヤ卅圓ゟ三百圓迄
- 第十七號　ダイヤモンド假百五拾圓ゟ五百圓迄
- 第十八號　ダイヤモンド入假百廿圓ゟ參百圓迄
- 第十九號　ダイヤモンドルビー五拾圓ゟ二百圓迄
- 第二十號　ダイヤモンド入假四拾圓ゟ二百圓迄
- 第廿一號　ダイヤモンド入假八拾圓ゟ六百圓迄
- 第廿二號　ダイヤモンド入假六拾圓ゟ壹千圓迄
- 第廿三號　ダイヤモンド入假四拾圓ゟ四百圓迄
- 第廿四號　ダイヤモンド入假五拾圓ゟ五百圓迄

天賞堂

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地
（電話新橋三百三十三）

（印刷所　東京國光社印刷部）

Digitized by Google